

義久公
義弘公 慶長十五年
家久公

後
編 舊記雜錄 卷六十五

661 「佐多伯著守忠充譜中」

從父久慶移河邊、

慶長十五年、轉河邊復舊領知覽、

寛永九年十一月十二日死、

662 「右馬頭忠興譜中」〔以久三男〕

慶長十五年庚戌、十二歳喪老父以久、則以 將軍家之有

仁愛、有亡父遺跡無所漏安堵 台命、故先詣駿府城拜謁

家康公、次登江戸城拜謁 秀忠公、謹以謝禮、而後歸國

矣、

663 「家久公御譜中」

〔正文在高橋七郎右衛門種十〕

改年之嘉祥珎重々、猶以不可有休期候、爲此等之御祝儀、御太刀一腰・馬一疋・段子二段令進入候、將又尾州名護屋御普請被仰付、人數差上候、其地も定而御普請衆被上候哉と申事候、新儀共御座候ハ、可被仰越候、尚永日中諸慶可申加候、恐々謹言、

〔朱力キ〕慶長十五年

正月五日

羽陸奥守

家久〔花押〕

高橋右近大夫殿

御宿所

664 「御文庫廿二番箱十卷中」〔義久公御譜中案文有之トアリ〕

今年之御慶不易、珎重々、仍今度尾州なこや之 御普

請、當國ニも被仰付候、依之彼福崎差上候、近比次之樣

候へ共、遙久無音罷過候間、用愚書候、委曲者含口上候

將又綾子五卷進覽之候、聊補書面計候、恐々、

〔朱力キ〕慶長十五年 正月十六日

信門跡

後藤右同案

ひろうと 宥端

665

「御文庫廿二番箱十卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

追而尾州なこやと申所之御普請、當國ニも被仰付候、

誠大儀成事共候、心遣之儀、不可過御高察候、

先年幽齋へ致傳受候古今之切紙御覽有度旨、去年被仰下候、尤早々雖可任 貴意候、持せ可登使無之故、于今延引候、然者今度平田越前守閑東へ使申付、陸奥守供仕罷上候間、彼者へ持せ進献申候、切紙之數何々慥可有 尊覽候、惣而者爰元へ写仕置度候へ共、此道心得たる筆者無御座候、不叶其意候、近比雖恐多申事候、それにて被仰付、写一通可被差下事所仰候、猶委曲者含口上候、右之段宜預御披露候、

「米カキ」

「慶長十五年」正月

倉光主水佑殿

666

「御文庫廿二番箱十卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

今歳之御慶不易、珍重々々、仍今度尾州なこや之 御普

請、當國ニも被仰付、依之福崎差上候、誠大儀成事共候、

心遣之儀可有御推察候、近比不新申事候へ共、此國之儀

ニ付、種々被添御心候、祝着不少候、弥出合之儀頼存候、

將又雖不坏候、ひらうと一端進之候、聊補書面計候、恐

々、

「米カキ」

「慶長十五年」正月十六日

祐乘法印

猶以墨跡御所望由、度々承候共、當分無所持故不立御用無念候、餘之事、とり一進入候、御氣色入候へ、祝着たるへく候、又拙者病之事、無相易儀候、巨細者口上申候間、不能細筆候、

667

「家久公御譜中」

慶長十五年閏二月、西北州之諸侯及牧伯因 台命遣士卒丁夫於尾名護屋城、于茲唯如當家至來秋止徭名護屋、山口直友已正月以一緘達 台旨於家久曰、是爲當家非凶事、又同月十日、本多正純亦贈書於家久、遙 台命曰、就勘合不成、思欲濟軍於明國、豫其爲武備可待 台命、此事后秋七月、家久淹留伏見之日、板倉勝重言家久曰、有可遣師明國之嚴命、全非渡師之用、爲有免許尾州名護屋徭役也、且來春可有 禁裏經營之事、應使公家之諸侯徭之、如薩摩遠國也不可及徭、惟於日州邊地採松材、而以舟運漕可乎、是營築之賦命未定、時傍人言不及薩前、台言件件儕在御前聞之、家久爲有好最負如此、則雖在世間、

又何勞心志之有乎、熟思之實、大御所之鴻恩也、

668 「御文庫ニ番箱家久公ニ卷中」「家久公御譜中ニあり」

以上

新春之御慶雖事旧候、猶更不可有際限候、抑旧冬琉國就
新拜領、爲御礼御使者被差上候、則案内者相添、本佐州
父子方へ様子申越候処、披露被申、何も御報ニ被申入由
候、一段御仕合殘所無御座由候、本多佐渡守父子方被申
越候条、於我等満足ニ存候、將又尾州なごやノ御普請、
先々來秋迄御普請衆御上七候事御無用旨、被 仰出候間、
先度御注進申入候、是又可然儀共にて御座候、就中爲御
音信、段子拾端送被下候、誠過分忝次第とも奉存候、猶
相替儀御座候者、是方可申入候、當春者頓而御上洛可被
成候条、其節萬吉可申上候、恐惶謹言、

「朱カサ」
「慶長十五年」

正月十九日

山口駿河守

直友(花押)

(家久)
嶋津陸奥守様

參貴報

669 慶長十五年庚戌

四月九日、久保權兵衛重次鳥津右馬頭以久臣にて以、猿渡左近久を慕て殉死、下同し、

承同上、肝付治部左衛門兼家同上、日高大炊左衛門重勝
同上、

十一月九日、尾辻次郎兵衛鳥津忠長臣、坂口分太國宗同上、
氏、田にて殉死、
納忠元にて新

十二月三日、伊地知又十郎重近入道世休大口士にて新
竹休兵衛同上、

670 「家久公御譜中」

鳥津菊袈裟又四郎忠仍男、去年以來爲當家之質在于江都、俵六同
年十二月二十六日、代北郷讚岐忠能賜暇、時有本多正信
副簡、載十四年之冊雖然以敬重 上、故來伏見姑留滯、至今茲
閏二月二十一日而發伏見、山口直友副書炳焉也、

671 「古御文書二十三通一卷ノ中拾番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

改年之御慶珍重奉存候、仍 兩御所様御機嫌能被成御座
候、御心易可被思召候、然者菊袈裟殿爲御替、北郷讚岐
殿御上付而、菊袈裟殿歸國之儀候、長々一段神妙ニ在江
戸被成候とて、我等かたへ本佐州懇之様子被申越候、尚
奉期後音之時候、恐惶謹言、

「御文庫四拾九番箱三卷中」「家久公御譜中ニ在リ」
態以飛脚申入候、當年之御慶雖事旧候、弥不可有尽期

「此正文、御文庫二番箱家久公二卷中ニ在リ」

羽柴陸奥守殿

(慶長十五年) 壬二月十日 本多上野介 正純(花押)

急度申入候、仍かんごう不相調ニ付而、唐口へ少く御人數可被遣旨、被 思召候条、内々其御用意候而、御意御待可被成候、爲御普請御人數爲御上候事、御無用ニ候、猶唐口へ御人數被遣候事者、いつにても此方よりの御一左右次第ニ可被成候、恐く謹言、

『在官庫』

陸奥守様

參人々御中

二月二日

山口駿河守 直友(花押)

尚以唐口へ之儀、御手前直ニ御越候事にてハ御座有ましく候、御人數計可參候間、其御心得可被成候、以上、

候、

一我等者駿府へ遣、十日計已前ニ罷歸候、大御所様來

三月中ニ可爲 御上洛之由候、若 大御所様御煩などにて候者、將軍様御上洛之由慥申來候事、

一又昨日申來候、將軍様二月末駿府迄可被成 御座之

由、大御所様被 仰遣之由候、御參會之以後 大

御所様尾州なごやまで被成 御上、御城之御普請等被

仰付、それ方 御上洛之由候、左候者三月下旬可爲

御出京かとの儀ニ候、但是者傳説ニ承候等、

一將軍様之若君様つれまいらせられ候て被成 御上洛、

將軍ニ被成御成候由候、其外駿府之御子様達御上洛に

て、御官位ニすまされ、於禁中御能なども可有御座

様ニも申來候、若君様將軍ニならせられ候ハ、各

進物なども入可申かとの申事候、但是も傳説ニ候、又

下々ハむざと仕たる説をも申之由候、不眞候、可有御

推量候事、

一別紙ニ可申入候へ共、事成儀も無御座候間、態一書ニ

令申候、龍伯尊老へも此由可被入仰候事、

一近日正源院を以可申入候条、此度書中不具候、恐惶謹

言、

〔朱カキ〕
慶長十五年二月十四日

〔細川忠興〕
〔花押〕

惟新尊老

羽奥州様
人々御中

674
〔忠元勲功記〕

忠元妻は種子嶋修理亮時與女ニテ、慶長十四年西二月十日病死、法名笑蓮妙欣大姉、大姉辞世の和歌歎、赤塚某書留の内ニあり、

新納武藏殿内室

弥陀たのむ心さやけき有明の月諸ともに西へこそゆけ

675
〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

其國之蜜柑二箱到來、遠路誠以悦覚候、猶本多佐渡守可

申候、謹言、

〔朱カキ〕
慶長十五年二月廿一日 (秀忠)

〔花押〕

薩戸少將殿

676
〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

〔本文書ハ六七二号文書ト同文ニキ省略ス〕

677
〔御軸物十番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

其以來不得御意候、仍御同又四郎殿御息之儀、龍伯様御理之通本上州を以申上候処、可有御歸國之由被仰出候間、早々御下被成可然通申入候処、爲御念于今御逗留之事候キ、雖然 御詮之儀候条、御歸國尤之由申入、唯今御歸國之事候間、龍伯様御満足奉察存候、猶御同又四郎殿迄申入候条可被仰入候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
慶長十五年閏二月 日

山口駿河守

直友〔花押〕

嶋奥州様

參人々御中

678
〔屏書ニテ存スヘシ〕
小川内村田島帳写

丸田与右衛門尉

小川内村田方

こは田
下田六蛙

七斗貳升

孫三郎

同所 下田貳段 貳石四斗 同人
 同所 下田廿四步 九升六合 同人
 柳のひら 中田貳段卷畦十步 貳石九斗八升六合六才 又十郎
 同所 中田卷畝 卷斗四升 同人
 山はた 上田二段 貳石八斗 又次郎
 上田 上田卷段六畦 二石五斗六升 同人
 下田 下田五畦 六斗 孫三郎
 中田 中田貳段八畦 三石九斗貳升 又二郎
 同所 中田八畦十六步 一石一斗九升四合六才 同人
 同所 上田二段一畝十四步 貳石六斗三升四合五才 孫三郎
 同所 上田五段四畝四步 八石六斗六升一合二才 同人
 同所 上田貳段二畦廿四步 三石六斗四升八合 又十郎
 同所 中田卷畦六步 卷斗六升八合 孫三郎
 同所 上田貳段四畦 三石八斗四升 又十郎
 同所 中田卷段三畝十八步 卷石九斗四合 同人
 同所 中田四畦 五斗六升 同人
 同所 上田一段二畝四步 卷石九斗四升一合二才 同人
 山そひ 中田五畝十二步 七斗五升六合 同人
 野はた 中田卷町五畝 十四石七斗 同人
 山そひ 上田貳段五畝十八步 四石九升六合 同人

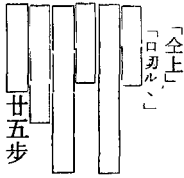
同所 下田五畝十步 六斗四升 同人
 川そひ 中田卷段六畝 二石二斗四升 九田 与右衛門尉
 川はた 中田六畝 八斗四升 孫三郎
 同所 中田四畝廿步 六斗五升三合二才 同人
 中田 中田卷段四畝廿八步 貳石九升六斗四才 同人
 前田 上田卷段六畦 二石五斗六升 同人
 畠方
 下畠 下畠三步 八合 小川内ノ 孫三郎
 のはた 下畠十步 二升六合六才六才 同人
 同所 下畠三步 八合 同人
 同所 上畠七畝十四步 八斗九升六合 同人
 同所 中畠四步 卷升三合三才三才 同人
 同所 下畠八畦十二步 六斗七升二合 同人
 同所 上畠五畝十八步 六斗七升二合 同人
 同所 上畠二畝十二分 二斗八升八合 同人
 同所 中畠二段十六步 二石五升三合二才 同人
 同所 中畠卷畝拾四步 一斗四升六合六才 同人
 同所 中畠卷畝十八分 卷斗六升 同人
 同所 下畠二段三畝十四步 一石八斗七升七合三才 同人
 同所 中畠八畝十二步 八斗四升 同人

同所	上畠廿四步	九升六合	同人
同所	下畠貳畝	卷斗六升	同人
同所	下畠壹畝	八升	同人
同所	下畠四畝廿步	三斗七升三合 <small>三才</small>	同人
同所	下畠壹畝	八升	同人
同所	下畠壹畝	八升	同人
同所	下、畠五畝六步	四斗一升六合	同村 又二郎
同所	下畠三畝六分	二斗五升六合	孫右衛門
同所	下畠四畝廿分	三斗七升三合 <small>三才</small>	同人
同所	下畠四畝	三斗二升	同人
同所	下畠一段四畝廿步	卷石卷斗七升三合 <small>三才</small>	又十郎
同所	下畠壹畝	八升	同人
同所	下畠四畝	三斗二升	同人
同所	下畠壹畝	八升	同人
同所	下畠二畝	卷斗六升	同人
同所	下畠壹畝拾八步	一斗二升八合	同人
同所	下畠三歩	八合	又十郎
同所	下畠四畝拾貳分	三斗五升貳合	同人
同所	下畠八畝貳分	六斗四升五合 <small>三才</small>	同人
同所	下畠壹畝二分	八升五合三才 <small>二才</small>	同人

同所	下畠壹畝	八升	又二郎
同所	山はた	五升三合 <small>三才</small>	同人
同所	下畠廿分	六升四合	孫三郎
同所	下畠廿四歩	二斗一升三合 <small>三才</small>	又十郎
同所	山そひ	二斗一升三合 <small>三才</small>	同人
同所	下畠貳畝廿歩	二斗一升三合 <small>三才</small>	孫三郎
同所	川そひ	四斗八升	同人
同所	下畠二畝廿歩	六升四合	同人
同所	下畠六畝	九斗六升	又三郎
同所	下畠廿四歩	二升六合六才	同人
同所	下畠壹段二畝	六斗七升二合	孫三郎
同所	下畠十歩	七斗六升八合	同人
同所	下畠八畝十二分	九斗三升三合 <small>三才</small>	同人
同所	下畠九畝十八歩	卷石一斗三升六合	同人
同所	上畠九畝十八歩	同上合而	同人
同所	中畠九畝十歩	田方五町七段六畝十八歩	同人
同所	以上合而	分米七十貳石三斗三升七合二才	同人
同所	田方五町七段六畝十八歩	畠方貳町九畝十五歩	同人
同所	分米七十貳石三斗三升七合二才	分米十八石六斗四升五合八才四才	同人
同所	畠方貳町九畝十五歩	合高九十石九斗八升三合四才	同人
同所	分米十八石六斗四升五合八才四才		同人
同所	合高九十石九斗八升三合四才		同人

慶長十五年 新納武藏入道

680



「全上」
「口刃ル」
廿五歩
石石八合 主税
六升三合九夕七才 同人
八斗六升六合二夕二才藤八左衛門

679

潤二月廿一日

丸田与右衛門尉殿

爲舟判

坪付

古川 中田 卷段六畝

石石六斗

仕明

同所 中田 四畝廿分

四斗六升

同

同所 下畠 二畝廿分

石斗六合六夕七才

同

合貳石壹斗六升六合六夕七才

古川仕明四石八斗餘有之由候条、其辛勞分として右之分進之候、已上、

慶長十五年

三月吉日

新武入(花押)

村田隠岐入道殿

まいる

681

「雜抄」

定

一侍之事者不及沙汰、中間・小者に到迄、一季者を一切置へからざる事、

附奉公望ミもの、一季と相定出すものは可爲曲事事、

一新珍ものは存分次第堪忍すへし、但春中之切米を取に

おゐては、翌年之夏迄役儀を勤、其上暇を可乞事、

一御普請御陳御上落之御供又者御使沙汰有之時、暇を乞

之儀可爲曲事之旨被 仰上者、存其趣出すへからざる事、

同村權現

同村小古川 下畠六畦十分

三斗八升

孫右衛門

同村南のわき 下畠四畦七分

二斗五升二合五夕

伴左衛門

同村との畠 下畠四畦

式斗四升

藤右衛門

同村との畠 下畠四畦八分

二斗四升壹合

諏訪坊

合田畠三町貳段九畦八歩

分米三拾石三升六合七才

慶長十五年

卯月一日

新納武藏入道

爲舟(花押)

村田隠岐入道殿

附關東中諸奉公人之分、六尺一圓不可拘置、若有相違者爲過料金子一枚可出事、

右條々堅可相守者也、

慶長十五年戊四月二日

682

「御文庫四拾九番箱中」
池田伊兵衛トアリ

猶々乍輕微銀子沓枚進之候、誠書音之驗計候、

得幸便企一書候、仍而高野寺家建立之儀、別而貴僧辛勞之故致首尾、誠二世之御高恩之儀不得申候、然者東國へ御供之由、是又打續一入御辛勞之至候、當年者陸奥守殿并我等も凶年にて候間、旁祈念之儀可被抽丹精事頼存候、將又小城權現座主屋敷之事累年雖申候、依繁多延引候、左候へ、此比屋敷相定事候、何も下向之時分万端可申承候条、書中不具候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十五年」卯月七日
惟新(花押)

成正院

御同宿中

683

「右馬頭以久譜中」

慶長十五年庚戌、將軍家築丹波州篠山城、爲勤其普請

企上都到伏見、則罹病痾四月九日卒、享年六十一、法名宗恕、號照譽高月院、

維慶長十五白歲次庚戌四月朔丙子同初九日甲申、我

太祖仁雄宗恕居士東城風流之地矣、我西居千海山

長途之外放雖其訃音到、身不侍闈維之場、實哀慕之淚紹

以血矣、於是孝孫藤氏忠仍不堪哀悼感激之至、五月初九

日、命十餘員之苾芻衆、備殯繫伊蒲塞之淨膳、以謹奉祭

於尊靈前香案之下、其文曰、

嗚呼哀哉 富有四海 武恣九夷

所無易有以珎寶珠玉 送往迫來進肴膳酒卮

百行政事可并 与天地合于其仁德

萬代大業可盡 兼金石堅於其洪基

虚豁襟宇 爽拔神姿

風雨不遮安住又安禪 胸集萬己星斗

雲泥不隔急行復緩步 氣飛千里鳥騶

抽功名於門閥 揚美譽於京師 吁戲

久霖摧垣 涕淚難忍連夜雨

浪聲打岸 断腸堪驚五更颼

杜鵑催歸數添萬恨 蟪蛄雖生不見四時

六十一年光陰 世間甲子刹那頃

二十四氣次序

即今端的散愛別

亡前失浚奈斯羅

於戲尊靈

指四德常住之自心

樂土已不遠

通三世覺滿之佛意

生天又無疑

朝出暮歸相見你

古往今來提得伊

導惠仁道誠

我量恩愛深如江水

教以家者義

翁仰慈育高似須弥

一炷香縷

三篋茗瓷

嗚呼哀哉 尚饗

684 「全以久譜中在忠興一流」

慶長十五年庚戌四月九日病卒于城州伏見、享年六十一、

法名高月院仁雄宗恕居士、於洛陽四條寺可之大雲院葬之

685 「忠興一流系圖中」

守右衛門尉彰久之子

久信

初忠仍 又四郎 相模守

天正十三年乙酉誕生、母者 太守義久主第二女、

祖父以久奉謁 將軍家拜領佐土原、移彼地時讓本領下大

隅於忠仍、故忠仍在城垂水、

慶長十五年庚戌四月九日、祖父以久病卒於伏見、時將

軍家以以久遺領賜忠仍、忠仍母堂年邁、且 龍伯主亦在

病牀、故堅奉辭退之、以故以久之三男忠興拜領佐土原、

忠仍如元居垂水矣、

686 「右馬頭忠興譜中」

慶長十五年庚戌、父以久卒於伏見、時 將軍家雖賜佐土

原於嫡孫又四郎忠仍、忠仍堅辭之、以故忠興賜亡父遺領、

在城于佐土原矣、

687 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様へ爲年頭御祝儀、御太刀一腰・御馬代金子式枚

并段子廿端御進上被成候、即致披露候処、御仕合共御座

候而御心安可思召候、猶期來音之節不能詳候、恐々謹言、

〔朱力字〕

卯月十二日

本多上野介 正純(花押)

鳴津陸奥守殿

688 「正文在大口土寺師氏」

薩州伊佐郡大口内諸村知行目錄

篠原村中嶋門

尾敷ノ後 下田三畝十分 式斗六升六合六夕

源四郎

「外敷十行略」

合田島屋敷三町七段三畦拾六歩

高三拾六石四斗五升八合

右之外

高四拾六石五斗五升、從鹿兒嶋國郡直之目錄式ツ有之、

惣都合高八拾三石八合

定公役

慶長十五年

卯月廿六日

新納武藏入道判

寺師筑後守殿

689 「國分宮内澤氏藏書」

詠社頭祝言倭歌

左衛門尉紀景親

わかたのむ神のむかしの言のはの

絶ぬなかれの岩清水かな

息長宿祢道隆

神かきの久しかりけるためしにや

松の葉つもる雪のいたふき

豊竊丸

神に人よるへの水のすみやかに

源つゝくなかれなりけり

冬日同詠社頭祝言和歌

左近將監源俊隆

祈をくこゝろもきよき神かきの

松のあらしになるゝみや人

紀景行

あつさゆゝ八幡のみねの高き名を

代々につたふるかけそあまねき

源俊堅

まうて來てたのむ心はおほぬさの

取てにもれぬみやめぐりかな

十一月十七日會

690 詠竊有遐齡和歌

法印龍伯

行末もさそなかさねんわかの浦に

むれつゝあさる霧の毛衣

沙弥玄与

越前守宗親

雲井よりおりくる鶴のよはひをや

はまのまさこにかそへそへなむ

沙弥永温

大炊助久正

龍つせのなかれたえせぬすゑとめて

あさりしつるも萬代のこゑ

沙弥宗察

右衛門尉豊信

ともにとやよハひをへたる山松の

木すゑになれてつるのすむらむ

沙弥栖幽

仙人も住計なりとも霧の
なるゝみきりに年を経ぬれば

右衛門尉元綱

うきなきいハほの松をねくらにて

いく代か経なむひな霧のこゑ

沙弥与進

聞からにけふそ千とせのはしめなる
みきりの松のひな霧のこゑ

長門守重位

わたつ海のあしはらとなりしむかしをも

田鶴よりほかはたれかしらまし

夏日同詠鶴有遐齡和歌

大膳亮忠俊

千とせふるまつの木すゑや久かたの
雲井のつなのやとりなるらむ

筑後介住房

かへらすも馴來てすめる友霧の

齡ひや松にいく世へぬらむ

慶長十五年五月二日 和歌會

『正會紙之順、公 忠俊 玄与 宗親 久正 永温 宗察 栖幽 豊

とも鶴のはねうちかはす雲のより
千代をふるてふこゑをきくかな

信 元綱 重位 与進 住房、題書違候故略享し候付、為見合書付置也」

691 「家久公御譜中」

北郷千世鶴加賀三為當家之質去年二月至于武都、而代北郷讚岐忠能在府、敷根中務少輔立頼今年正月來於薩代千世鶴、於是千世鶴時七賜暇赴于本邦、時有本多正純五月十四日之副簡、載左、

692

「正文在北郷作左衛門久嘉二番箱家久公二卷中ニ在リ」

尚々千世鶴殿江戸ニ御在府中、何事無御座御下被成候間、御心安可思召候、以上、

一書致啓上候、仍北郷加賀守殿御息千世鶴殿為御質人、江戸ニ御詰被成候之処ニ、其為御替敷称中務少輔殿御下被成候付而、千世鶴殿此度其地へ被成御下候条、御心易可思食候、猶爰許相替儀無御座候、何も此表相應之御用等御座候者、可被仰付候、不可存疎意候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長十五年」

五月十四日

本多上野介

正純(花押)

羽柴陸奥守様

人々御中

693

「北郷久加譜中幼名千代鶴丸」

慶長十五年庚戌五月、敷根中務立頼為久加之代上洛、故久加賜暇拜領於單衣二、御馬一疋、鹿毛、五月九日辭江戸、六月二十九日下著于平佐矣、北郷吉左衛門久延・佐渡與左衛門・本田藤右衛門從之、

694

「家久公御譜中」

「正文在文庫二番箱家久公二卷中ニ在リ」

以上

一書致啓上候、仍今度琉球之王御同道被成候而、此地江被成御下之旨、誠路次中御苦勞之段奉察存候、然者右之王御下ニ付而、伏見江江戸迄路次中ニ而、御宿等并人馬御馳走之儀、此以前朝鮮より之勅使御越之時分、於路次中御馳走之様子ニ、此度も御馳走可致之旨ニ御座候、其通路次中御泊々へ申遣候間、其御心得可被成候、委細之段ハ、山口駿河守殿・伊勢兵部少殿へ申入候間、定而様子可被申上候、山駿州御指圖次第ニ被成、御尤ニ御座候、尚御下内、此地相應之御用等御座候ハ、可被仰付候、不可存疎略候、何も爰元御下之節可得尊意候間、不能具候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十五年〕

五月十四日

羽柴陸奥守様

人々御中

本多上野介
正純〔花押〕

695 「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

今度北郷千代羈殿爲御替、敷祢中務殿就御越、千代羈殿御歸國玆重存候、江戸御立之砌者、將軍様被召出、御仕合無殘所由、本佐州方被申上候、於様子へ、御心安可被思召候、猶御上洛之節可得御意候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十五年〕

六月朔日

山駿河守

直友〔花押〕

奥州様

參人々御中

696 「家久公御譜中」

同年五月十六日、家久以中山王尚寧首途於魔府赴關東、時家老比志島國貞・伊勢貞昌、用人三原重種・山田有榮等從駕、六月十九日、著船于大坂而到伏見、少時留滯于茲飾行粧、七月二十日、發伏見赴駿府、東海道諸驛驟降台命、清掃道路修復橋梁渡口攢舟航、每驛屯人馬無一事

之遲滯、惠愛遠人均朝鮮人來朝之時、既而八月六日、到于駿府、則大相國遣使者勞之、同八日、家久以中山王尚寧登營、尚寧進獻緞子百端、羅紗十二尋、大平布二百疋・蕉布百卷・白銀一萬兩・太刀一腰、家久亦獻太刀一腰・白銀千枚其外數品、各奉拜謁大相國、時鈞命懇懇台顔快然、十八日賜饗宴、時常陸介主後大納言頼房於鶴後大納言頼房有舞曲、加之以貞宗之脇指賜家久、十九日賜暇于是尚寧之舍弟具志頭自途中不快、今也疾病大漸以不能赴東都、副平田阿波介宗衡留府中監療養事、而家久・尚寧二十日發駿府、二十五日到武都、則市塵之通衢灑掃之、置警固之士卒不許漫往還、見者貴賤男女充路傍及肆店、二十六日、大樹慰其遠來而賜上使、二十七日、亦上使來臨遙賜饗牙一千伎之台命、二十八日、家久引中山王登營奉拜台顔、時中山王獻上緞子百卷・虎皮十枚・太平布二百疋・蕉布百卷・白銀一萬兩・太刀長一腰、且又獻若君、以太刀一腰・緞子五十卷・太平布百疋・蕉布五十卷、家久之獻品亦居多也、九月三日賜饗應、七日於御茶亭御手自賜點茶、十二日、家久及中山王尚寧俱登營奉拜台顔、時山形駿河守家親執奏尚寧、十六日、家久應徵登營、則賜饗宴、加焉寶刀二柄號加賀貞宗號於太長先名

也、及東國無雙號笠拔駿馬一疋栗毛鞍置、且又同毛一疋、其外櫻田之宅地等拜賜之、是月賜暇、二十日出江府、由台命琉王者自東海道、家久者經岐岨路而入洛、既而歸廳府、乃使中山王不逾年而得還本邦、至若割琉球地九萬餘石、以與之尚寧及球國人、忭躍以大悅、

697 『在官庫』

任幸便令啓上候、仍京泊出船已後、天氣共能御座候而、去十一日當津室へ致着船候、然者今月四日大風仕事実ニ候へ共、我等乗船を始諸舟之事、筑前之内芦屋之湊へ入置心安候つる、上方之儀も弥易事無之由候、何様上着候而委曲可申上候、可得尊意候、恐惶敬白、

陸奥守
家久(花押)

進上 惟新様

「家久公御譜中正文在宮内喜兵衛トアリ」

698 「御軸物十番箱中」

如仰當年者不得御意候、然者早々御上落珞重存候、如御書中爰元御普請各申談候、不存油断候、漸出來候之間、

頓駿府へ可罷下候条、御逗留中以面談相積儀、可得貴意候、尤其元御見廻雖可申上候、御普請半之故無其儀御座

候、次御太刀一腰・御馬一疋并段子拾巻被懸御意候、忝

存候、猶御使者へ申達候間、可被得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
慶長十五年
六月廿五日
藤堂和泉守
(花押)

「宛ナノ切ル、」

「家久公御譜中ニアリ」

699 「家久公御譜中」

「正文在藤井孝左衛門」

今年之御祝儀未申入候、旁爲可申談、太刀一腰・馬一疋并惟子十令進覽之候、誠表嘉端計候、將又其元御普請炎天与申、御苦勞之儀更不得申候、尤雖可逐見廻候、江戸・駿府へ御礼爲可申上、近々罷下候之故、先々以使者申候、何様期(後音カ)候、恐々謹言、

「朱カキ」
慶長十五年
六月廿五日
鳴津陸奥守
家久(花押)

伊東修理大夫殿

御宿所

「張紙」
山田越前云々、此一葉ハ雜録廿九卷ニアリ、因テ寫サス」

『盛香集』

一夫利安慶哲居士ハ山田越前ニテ、猛心を専として疵をこふむり、名譽ある事度ノ也、しかるに忠節のものなれハ、内外をいはす召仕シニ、予五年の間心地例ならず、おこたる事なきを歎き、身の替りになんといひけるか、寔成哉、夏の初つかたより病床ニふして、水無月十四日身まかりぬると聞て、一首をつらねて手向とするものになむ、

はちす葉の置こほしたる露の玉

終りや君かためにしてけん

六月廿九日

法印龍伯

是を聞て新納忠元、

うらやましきへぬる玉の終りまで

いともかしこき君かことの葉

『下野守久元譜中』

慶長十五年庚戌六月、去馬越移宮城、翌年辛亥十月移于

鷹島矣、

(本文番ハ五九〇号文書ト同文ニシキ省略ス)

「正文宮原五兵衛ニアリ」「家久公御譜中ニ在リ」

無何事罷上候由、従大坂以書狀申下候、定可被聞召達候、

一去月四日芦屋にて大風吹申候へ共、船頭前かとなり致覚悟、川へ船皆々入候間、一艘も無何事遁難風申候、然者今度從又四郎使被上候付而、龍伯様以御傳書被仰聞候、其許も右同日以外大風にて、加治木・鹿兒嶋風あて申候由、家などもそこね申候哉、時分から玆敷大風与申事候、

一去廿七日隠岐守殿へ御礼申候処、初而被成御逢候由候而、殊外御取持にて、式々の御振舞結構成儀、書中ニ不申得候、召列候衆などへも悉七五三にて、膳の内金にてみかき立られ、折敷計木地にて候つる由申候、板倉殿・山口殿なども御振舞、御馳走無所殘候、上意忝候付而、何も如此御懇と存事候、前々の知音衆細川内記殿・福嶋大夫殿を始、皆々尾張・丹波之御普請場より追々預御使候、

一我等駿府下向之儀上着申候ハ、追付可打立申と存候

「御文庫二番箱家久公二巻中」

処、琉球人之こしらへ、いかにも念を入候て心静相調

可罷下由、山口殿より承候間、左様ニ申付故未罷下候、

來十二三日之比可罷立と存候、

一 一からへ人衆遣候儀も、當年之御普請を爲可被指置、世

上への御あいしらいニ被仰出候、遮而の儀にてハ無御

坐由、板倉殿雜談直ニ承候、然ハ下まばへんニ可遣様

子と相聞申候、

一 來春 禁中御普請可有御坐由被仰出候、我々儀も來春

ハ御普請可仕候間、内々國中其用意可有之儀肝要存候、

就中琉球納方之儀なども大方ニ無之様ニ、鹿兒嶋役人

衆へ被仰聞、被添御心候て可被下候、

一 唐船共其後いかほと參候哉、是又噓之儀なと惡無之様

ニ、被仰聞候而可被下候、

一 被仰付御のほせの早使兩人、三日以前上着申候、委尊

書共拜見仕候、此兩人ハ駿府下向之刻迄召置、此方之

儀次第ニ可申下候、猶此者へ申含候間、可被聞召達候、

誠惶敬白、

〔朱カキ〕

〔慶長十五年〕

七月五日

陸奥守

家久(花押)

進上

惟新様

704 「家久公御譜中」

「正文在島津筑後忠置」

〔(輕致力)〕上着、爰元大方仕廻候之間、近日江戸へ下向之用意

取紛、可有推量候、次弓之事、無断絶被仕候哉、弥嗜候

て可被相動候、余者期下國之節候、恐々謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十五年〕七月五日

家久(花押)

北郷二郎殿

「按スルニ、北郷讚岐守忠能初名次郎ナリ、天正十八年生ナレハ此年

二十一歳ニ當レリ、幼名長千代丸、九歳ニシテ上洛セリ、即慶長三年

殿下秀吉ノ命ニ應シテ如斯、考照ニ供ス」

705 「家久公御譜中」

平田太郎左衛門増宗者先祖以來奉仕島津家、至于増宗數

代受任於家老之職、可謂當家故舊之臣、雖然増宗事家久

忘敬畏忠勤之道潜抱黒心、故先是六月十九日、已自地頭

所清敷今改樋脇、赴私領郡山之途、抵越土瀬戸之時、不憶

山賊忽放鳥銃中増宗立僵、或曰、押川強兵衛公近及入來之

天討無所遁、古曰、滄浪水清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取

也家久呈惟新一簡、見者應須思其故、

706 『在官庫』

追而申入候、平田太郎左衛門不慮之儀候而相果候由風說候、於必定者爲何者之仕候哉、糺付度事候、御才覚尤候、様子委不知候間、重而念比ニ可被仰聞候、誠惶敬白、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

七月七日

陸奥守

家久(花押)

進上

惟新様

〔家久公御譜中、正文在宮内喜兵衛トアリ〕

707 〔家久公御譜中〕

從五和國俗日與南蠻之主獻使者於 大御所及 秀忠公、所其乘船六月來于家久領内、繇焉副護送使、先致五和之使者於駿府、則七月朔日、五和使奉拜謁 家康公、既而又到于江府、此時家久獻史記・漢書・通書各一部、風鈴・玉燈籠等物於 秀忠公、本多正信達 台聽、則 將軍家以 台書感謝家久志、正信・正純亦有書、共見于左、

708 〔正文在文庫〕

就自五和國到于領分黒船着岸、相副使者到來、得其意候、

就其史記・漢書・通書各一部并風鈴、令悅喜候、一段見

事之三部候、猶本多佐渡守可申候也、

〔朱カキ〕〔慶長十六年〕
〔秀忠〕
〔慶長十五年〕七月八日 (花押)

薩广少將とのへ

709 〔十番箱御軸物中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

尚以先日者寸はくおまへ致進上候処ニ、御祝着之旨、餘御慇懃之至ニ御座候、以上、

從奥南蛮 大御所様 將軍様使者進上之處、其御國へ着船ニ付而、兩使被指添候趣披露仕候処ニ、被爲入御念候儀、御祝着被 思召候、然者 將軍様江玉之燈籠并書物進上被成候、是又如御書中之一々披露仕候処ニ、何も此方珍物にて、彼是以一入悦被 思食、御内書被進候、隨而拙者へ白砂糖百斤入老桶送被下候、遠路御心付之段、書中ニ難申謝候、委曲爰元之様躰、御使者可被仰上候条、奉省略候、恐惶謹言、

七月九日 本多佐渡守
正信(花押)

羽柴陸奥守様
御報

710 「本田氏藏」

請取申四分出銀之事

高式百石者

合鳥目七貫八百七匁、銀ニメ四拾六匁八分四り、此外
銀百拾三匁八分四り、此外銀東國へ爲御使下向之刻、
詰越之御賦被給分、差引四分皆濟也、

以上但壹倍之さん用に候、

慶拾五七月十日

渡邊市左衛門(花押)

滝聞傳右衛門(花押)

本田助丞殿

参

711 「家久公御譜中」

「正文在文庫四十八番箱
中ニアリ」

鹿兒嶋へ書狀相添申候、御届候て可被下候、

從又四郎之使罷下候間、奉捧愚札候、仍我等関東下向之

儀、琉球人用意等心靜申付候而尤之由、從山口殿就御指

南少延引候、來廿日比者必可打立申候間、纏而駿府・

江戸隙明申、罷下可奉得尊意候、雖無題目御坐候、此方

當時之様子爲可申上如此候、誠惶敬白、

「慶長十五年」

七月十二日

陸奥守

家久(花押)

進上

龍伯様

712 「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

態企一行候、

一 御出船以後御左右不承候處、從室津之御狀、六月晦日
致下着披見、本望存候、然者此方者以之外之大風にて
候間、御船如何候へん哉与心遣千万ニ候處、其時分者
芦屋之湊へ舟懸候而、上下之船共無何事之由、目出度
存候、

一 去月十九日大坂へ着船之由、相良内藏助殿下向候而、

追付爰元へ被相越様子承、一段珍重存候、

一 此比者定而関東へ可有下向与察存候、駿府・江戸兩御

所様御前之儀、今度者琉球王被成御同心儀候間、御仕

合能有御座与存候、早々御吉左右相待申候、

一 琉球王之事、諸人見物共申候哉、又取沙汰も可在之儀

候間、旁以様子念比ニ可被仰下事待申候、

一 當國無何事候、就中鹿嶋御内御頭屋迄も無事ニ御座候、

可御心安候、

一 甌嶋ニ着岸之唐船三艘之内、一艘者可爲長崎船之由奉
行衆被申、如長崎可被引せ之由候、乍去當國ニ着岸之
船之事候間、於爰元商賣共候様ニと懸引申半ニ候、余
者追々可申通候、

一 河上五次右衛門尉事、此比者をのつから順風無之、未

出船候、然處伏見へ上着候者、都之嶋檢地之様子共、

村田三郎右衛門尉を以可被仰下之由候間、今少出船延

引候て、御用之儀共承候へと、紹益方被申事候、猶用

口上候間不能詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕七月十二日

惟新(花押)

陸奥守殿

まいる

713

〔家久公御譜中〕

〔正文在青山兵右衛門〕

巨細之儀者追々可申上候、

任便節申上候、平田太郎左衛門不慮相終候由、其聞得候、

何共咲止之儀候、畢竟如此之出合も國之緩故候、能々御

糺明等被仰付候而肝心候、雖不及申上候、一書此式候、

恐惶敬白、

714

〔御軸物十番箱中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

七月十三日

陸奥守

家久(花押)

進上 龍伯様

貴札致拜見候、仍今度ごハ方之使者船到薩广着岸付而、
爲案内者兩人被指添、御下被成候、致披露候處、右南蛮
人今月朔日 大御所様御礼被申上、御仕合能御座候、然
者 將軍様へ御礼爲可被申上、江戸へ被罷下、於彼地も
御仕合能候而、早々歸國被申候条、御心安可思召候、猶
其元方御兩使之儀も南蛮人同道候而、江戸へ被罷下候、
委細之儀ハ兩人之御使者可被申上候間、不能詳候、恐惶
謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

七月十六日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守様

715

〔御軸物十番箱中〕〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

別紙ニ申入候、仍今度南蛮人罷上候處、何方注進申候や、

「家久公御譜中」

「正文在島津市之助忠祀」

猶以申上候、古織部殿琉球人のうたを萬事けいこにて候、如何様數寄ニ入たる事こそ可有之候間、惟新様も内々被成御稽古、尤奉存候、織部殿如此候故、こゝもと數寄者たち、皆々被取持候事、甚おかしく存候、以上、

此方爲御見廻先日被成御上候早使、先々當時之様子爲可申上、差下申候、

一 上方相替儀無御坐候、我等上着仕候へへ、則本多佐州・同上州へ以書狀申入候、一段懇切之御返札共にて御

坐候、御前別而御機嫌能候間、可御心安候、

一 伊東殿・秋月殿・高橋殿など丹波之御普請場へ被有之候處、我等伏見へ罷着候由被聞付、或日歸或一夜留なとに爲見廻被相越候、右三人之衆へ大坂へも人を被付置、河口迄迎共被出候、御前之御取沙汰も悪候へへ、如此各御取持も有之間敷と存、祝着申候事、

一 藤堂和泉守殿も丹波御普請奉行にて、比中彼地へ逗留にて候、御普請相濟伏見へ被相越候間、彼宿へ見廻ニ罷出候處、殊外之馳走にて亂舞躍なとさせられ候て、種々會尺共御坐候つる、駿府・江戸にても御前御取合可有之由候事、

一 於爰許隱岐守殿御懇不淺候、其外板倉伊賀守殿なども別而御懇にて候事、

一 來春 禁中可爲御普請由候、然者公家になられ候大名衆へ可被仰付由候、如此出合候刻、板倉殿御前へ被有合、御意之通きかせられ候とて物語候、薩广などハ遠國にて候間、人數上方へ不上候共、日向邊之松材木などを舟にてのほせ候へへ、可然候へんかと被成御意候、如此候も御普請御つもりなと不相定以前ニ、人の手を不付やうにと思召、かやうに被仰出候、寄

特成御事にて、よき御鼻貞をもち申候間、世上人の心遣無之由、板伊賀殿へらひ事にて御坐候つる、何も來年御普請候、様子ハ重而委承究可申下候事、

一羽左太殿・細内記殿・寺志广殿・竹中伊豆守殿・毛利伊勢殿、此衆ハ尾州名護屋へ御入候、是も我等上着候由きかせられ、早く預使候、いつ比駿河へ罷下候哉、日限御き候て、中途迄可有御出由、懇ニ被仰越候、從細内記殿ハ兩度迄使給候、以之外御普請ニ取紛にて候處、遠路へ如此候儀共、皆々御眞実と申事候、然者我等通道之儀、美濃・尾張への筋ハ普請衆人ごみに候間、從伊勢地舟にて三川へ渡候而可然由、羽左太殿・寺志广殿などより被仰越候間、如此仕候、就其渡之舟なども右之御衆可有御馳走由其聞候、藤堂泉州も舟之儀可有馳走由、山口殿迄被仰之由候事、

一なこや御普請之儀、尾張國中ニハ石曾無之候故、三河・遠江境より舟にて三日路ほどおくよりとられ候ニ付而、以之外造作、日本之普請ハしまり候てより、かやうなる普請ハ有之ましきよし、其沙汰候、方々の商人共くりなど持來候て、殊之外高直ニ賣候を被買候ニ付而、金銀之入事難述言語之由候、羽左太殿などハ大方

貳千貫目ほとにてハ、手前之分可相調と被仰候つれとも、三千貫目ほとなられてハ可難調との取沙汰之由申候、日本にてハ一二番のかねもちにて候由申候へとも、

今度之御普請にて藏あき可申由申候、扱々如此候處、我等へ貳百貫め借給候、此節ハ難請取存候て、斟酌のやうに申候つれとも、最前約束之はずにて候間、是非共可被渡由候条、請とらせ申候、我等手前之入めもこと／＼しき借銀迄にて相調申事候、御普請を不仕候さへなりかね候處、御免許誠々難成儀申も疎候事、

一丹波之御普請ハ石場もちかく、其外心安候て早々相濟申候事、

一琉球人一段めつらしく候由候て、各御取持不大方候、板倉殿・藤堂和泉殿・古田織部殿など別而おもしろかりにて、板伊賀殿へも藤泉州へも山駿州なども振舞候て、藤泉などハ金子を琉球相中ニ被遣候、駿府・江戸も琉球人可有御覽とて、殊之外御催之由候事、

一唐へ人數遣可申儀、題目被仰付にてハ無之候、當年御普請爲可被指置、世上へのきこえに被仰出たる由、板伊賀殿被仰候、ばはんなどを少々遣候而可然候へんよし候、猶駿府・江戸も様子從鹿兒嶋之使召列候間、追

可申下候、誠惶敬白、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

七月廿日

陸奥守

家久(花押)

進上

惟新様

717 「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

御使札拜見申候、今度駿府・江戸爲御礼被成御參候、殊
ニ琉球王被成御同心之旨、誠以御尤之儀ニ候、就其爰元
山田民部殿爲御使者被仰付、銀子貳拾枚被下候、誠以忝
存候、當城御普請之義、手前うけ取分過半仕寄申候間、
御氣遣被成間敷候、猶從是可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

七月廿四日

寺志(广守)

廣(花押)

羽陸奥守様

御報

718 「家久公御譜中」

秋七月、自安南國東京主音問之使船著岸于領内、則以土

宜贈我來、前代未聞、是去年遣師於琉球以中山王還、吾
武威無隱三國、是以安南主亦結好、而自此以后爲通商船
所致乎、且渡唐琉人池城亦無事而還中山、龍伯・惟新各

719 『在文庫』 「家久公御譜中ニ在リ」

以書事々告家久、則事非可秘、乃記所贈來之品物、沈香
柱十本一本四丁
夫所擔持・沈香粉桂一本・糖水十壺・沈香十斤極上、
象牙二・鸚鵡一・孔雀一・里武氣以一尾馬也・紋絹二疋、使
及右幣物等上言可護送旨、追副警衛士送之駿府、

好便之条令啓候、仍御留守門尉爲見廻、早々可罷越処、
何かと取紛、漸去二日爰元へ越着、頃迄令逗留候、日州
木引之儀ニ付、先々今日致歸帆候、上方之仕合共能候つ
る由目出候、駿府・江戸弥別儀有間敷存候、將亦安南國
とんきんの屋形より、爲音信使者被差渡候、誠前代未聞
珍重候、殊更從琉球口渡唐之船、尖ニ歸國之由候、然時
者明國優之儀茂、又御人衆被指渡候する欵、御分別此時
候、ケ様之儀共者如何様紹益所より精申候覽、彼是爲御
存知候、恐々謹言、

〔慶十五年〕

八月八日

龍伯(花押)

陸奥守殿

〔此御書、御文庫四拾八番箱義久公卷中ニアリ〕

720 「家久公御譜中」

島津右馬允忠與福島左衛門大夫正則、而勤尾州名護屋普請、因正則・寺澤志摩守忠成等加懇意於忠興、家久聞此事、各以書翰述謝志、情見文、

「御文庫拾七番箱十九卷中」

慶長十五年八月八日、於駿河中山王登城之時、相國

樣江進上物、

一段子 百卷

代銀拾三貫目但一卷ニ付百三十目ツ、

一羅紗 拾式尋

代銀三貫目但一間ニ付三百目ツ、

一太平布 貳百疋

右者有合申候、

一白銀 一萬兩

銀子四十三貫目

一太刀 一腰

同八月廿八日、於江戸登城之時進上、

一段子 百卷

代銀拾三貫目但一卷ニ付百三十目ツ、

一虎皮 拾枚

代銀六貫目但一枚ニ付六百目充

一白銀 一萬兩

銀子四十三貫目

一太刀 一腰長光

六口 右尋候而も御座有ましくと存候、

合銀子百貳拾壹貫目

右之表大方算用仕候、大分之儀ニ御座候、我々とし

て俄ニ銀子相調候儀、可難成与存候、於京・大坂ニ

御下知を以借銀可相調候哉、左様ニ候ハ、返弁方

琉球^カ年を重、次第ニ可致首尾儀可罷成哉与、琉球

カ罷登候而爰元へ罷居候者共へ談合申候へは、年々

ニ被仰付候、出銀皆濟之儀さへ漸相調申儀候由申候、

右 御條書之内被引殘被仰付候ハ、可成程之儀者

此節之事情間、隨分談合申相調可申候、可然様ニ御

披露奉頼候、以上、

三月十日

宜灣(花押)

國頭(花押)

金武(花押)

722 「御文庫式拾三番箱拾六卷中家久公」 「御譜中ニ在リ」

其地御普請大形相調候哉、其方手前之儀も□候之由、祝着申候、就夫福嶋太輔殿・寺澤志广守殿御懇之由、則以書狀御礼申候間、此書狀進候条、可被相□候、此中從是秋大儀之御普請ニ、辛勞之通可申候處ニ罷成、返書背本意候、何様重而可申候間不能詳候、恐々謹言、

八月十二日

右馬允殿

723 今度就御普請、同名右馬允夏、貴老御組中ニ罷成候處ニ、

別而被添御心無吳儀相調候条、爲我等御礼可申入之旨申越候間、用愚礼候、誠若輩与申田舎者之儀、普請方可爲無案内候處ニ、御入魂之儀御頼母數存候、扱々永々數御辛勞御退屈察存候、來春者必其元可致參上候間、其節以面上可申入候、恐惶謹言、
〔朱カキ〕「慶長十五年八月十二日」
羽柴左右衛門太輔殿

724 今度就御普請、同名右馬允夏、羽柴左右衛門太輔殿御組

中ニ罷成候處ニ、貴老より手この衆被仰付、別而御懇候間、無吳儀相調候条、爲我等御礼可申入旨申越候間、用

愚礼候、誠若輩与申田舎者之儀、普請方可爲無案内候處ニ、御入魂之儀御頼母數存候、扱々永々數御辛勞御退屈察存候、來春者必其元可致參上候間、其節以面上可申入候、恐惶謹言、
〔朱カキ〕「慶長十五年八月十二日」
寺澤志广守殿

〔以上皆家久公御譜中ニ在リ〕

725 「御文庫二番箱義弘公五卷中」 「義弘公御譜中ニ在リ」

態令啓上候、今度陸奥守殿駿府被成參上候、尾州之内鳴海と申所御宿リニ候、罷出得御意申、於駿府御前之御仕合承度存、使者を進之付置申候、去六日ニ駿府御着、八日ニ御出仕、於御前御仕合殘所無御座候、御茶を可被進之と疊以下をも新敷被仰付、其以後者又常陸守様御能御覽候様ニと被仰出、大かたならず御懇ニ候、廿日時分ニ江戸へ可有御參旨候、江戸之御前御隙明候者、可被成御歸國候、爲可被成御覽、陸奥守殿方拙者へ之御狀進入申候、我等式迄大慶過之不申候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕「慶長十五年」

八月十六日

寺志广守

廣

惟新様

人々御中

「載相模守久信譜中」

先日者御尋忝存候、仍今度佐土原之儀得 御錠様子、就任被 仰出旨、互之御墨ニテ相濟目出度存候、然者自今以後切々被成御上洛御目見尤候、猶和久甚兵衛可申入候、恐惶謹言、

八月十六日

山駿河守

直友判

嶋又四様

人々御中

「御文庫四拾九番箱中」 「義弘公御譜中ニ正文在山田衆池田伊兵衛トアリ」

度々如申越候、高野登山已來、打續關東迄御供、誠々御辛勞之儀、中々申も愚ニ候、乍不申弥御祈念之儀、可被抽丹精事此時候、陸奥守殿下向之時者可爲御供候条、以面上万端可申述之間、不能腐毫候、恐々謹言、

「朱少き」 「慶長十五年」八月十七日 惟新(花押)

成正院

『雜抄』

尚々駿府之御仕合難申達候、將又かミ様・若子様御そく才ニ御坐候、右之条可然様御取合奉頼候、乍重

言申入候、奥州様・御供衆何も御城之廣間へ召よせ

られ、御能見被申候、御馳走之儀難申盡候、隨而本伊豆守殿御無事御奉公被成候、可安御心候、次おいと入組ニテ、當時拙者所へ居候、爲御存申入候、此方無替儀候、靜ニ御坐候、以上、

幸便之間令申候、仍奥州様此地江八月二日御着被成候、然者御城江八月三日御申請、七五三之御會尺にて候、府中が桜若太夫、其外座之者共卅人召よせられ、河州老御馳走御察可有候、然者御能高砂ニ田村三源武供養四天轍

五老松、右之分御坐候、將又かミ様茂御寄合前ニ御參會被成候、奥州様御參會ニ而河州様・御二人様御満足難申盡候、於懸川天氣惡敷候故、二日逗留被成候間、河州様御在所へも兩度御申請被成候、然へ八月五日懸川御打立、藤枝と申在所迄御通、同六日駿府江御着被成候、府中之侍衆一里程御迎ニ、次第々あひつゞき指出被成候、御馳走之儀無申計候、八月八日御目見得被成候、其後同十八日於公方様七五三之御寄合、其上常陸様御能被成候、同日貞宗之銘之御腰物并御脇差御重代可被成由被仰出、御拜領被成候、恐惶謹言、

「ケイ十五」 八月廿四日 伊集院五兵入道

本田源右衛門殿

參人ニ御中

729 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以長々路次中、御造作御苦勞、書中之通申上候、
以上、

尊書之趣夜前奉拜見候、然者駿府中ニ而之被明御隙、今
日當地へ御着可被成之旨、如被仰下候、尤面拜ニ可奉得
御意候条、早々御請申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十五年」

八月廿五日

本多佐渡守

正信(花押)

嶋津陸奥守様

貴報

730 『在伊勢氏』

先年関ヶ原落去之刻、我等道案者仕候者、江州本山之町
方半道程西之在所江罷居候、彼所之肝煎孫左衛門与申者
之叔父ニ而候、入道名を道珍と申候由、帖佐彦左衛門尉
逢候而承候由申候、今度彼表御通候ハ、被召出、別而芳
意之段御禮被仰可然存候事、

「慶長十五年」

八月廿五日

惟新

伊勢兵部少輔殿

「本文、左ノ正文ニ依レハ、一ヶ条ノ分抜き書セシモノ也、左ノ写ニ
テ考察スヘシ」

731 『雜抄』

一惟新様方伊勢貞昌江被下候御狀ニ、先年於日向表豊後
衆多勢被討果候、當年三十三年ニ相成候間、於福昌寺
大施俄鬼被下候様と相見得候事、

「此一ヶ条モ左ノ全文中ニ見ゆ、校正スヘシ」

732 「御文庫四拾八番箱義弘公」「義弘公御譜中ニ在リ」
「家久公御譜中ニモ在リ」

猶々日州表爲木引奉行下給殿被相越候、一段下知相
調候故、誠數千人之儀候へ共、少も猥儀無之、木引
はかゆく由候、自身も聊無氣任、筈なども不被着、
以之外諸事行儀たゞ數御座候由候、以来爲御名代何
方へ被相越候共、御氣遣有間敷由、相良日向守罷歸
物語申候、乍重言彼木之事、日本ニ珎敷木にて候、
勿論富國へ又類も有間敷候由候而、直成之事、能々
可入談合儀候、今度木引衆數千人たる之雜にて、大形
百貫目ニ及失墜たるへき由候間、代物百貫目ニ成候

へハ漸右之入目迄ニテ、木之代ハ無之候哉、せめて式百貫目ニモ成候而こそ稀なる木之詮ハ有之儀候かと、爰元取沙汰申候、是又爲心得候、

任幸便企一書候、

一日州表材木之事、去廿一日を取付候而引申候由聞得候、

木一本ニ綱廿はう付申候、一はうニ付而人數三百人宛にて引申由候間、合而六千人之盛ニ候、綱之程一尺廻御座候、綱一はうを五十人程ニテ漸持申候由候、誠大粧之儀候、乍去一時ニのほり坂一間程引のほせ候を見

申候、使罷歸物語申候、然時者輒急度可引届かとお慶ニ存候、然者本田三河守・相良日向守木床を申越候、彼木承及候よりも見申候而驚目候、日本一之木にて候由取沙汰有之事、無餘儀存候、何様見事之木ニテ御座候間、代銀百貫目程之御談合共可被成儀者、可有如何候哉、其上ニモ代物之分量者重く可有御座かと、右兩人ハ見及申候由被申越候、爲心得候、

一先年関ヶ原落去之刻、我等道筋案内者仕候者、江州土山之町を半道程西之在所へ罷居候、彼所之肝煎孫左衛門尉と申者之叔父にて候、入道名を道弥と申候由、帖佐彦左衛門尉あひ候而承候由申候、今度彼表御通候者

被召出候而、別而芳志之段、御礼被仰候而可然存事候、

一先年於日向表豊後衆多勢被討果候、當年三十三年ニ成申候間、於彼巷ニ大施餓鬼など可有之事可然存候へ共、當時御留守と云、其上琉球檢地之盛等彼是繁多之時分候間、遠方之儀者難成存候条、於福昌寺ニ大施餓鬼被

相調肝要之通、紹益へ内談申候、是又爲御心得候、此

書面比紀州へ披見候而、右之趣時々陸奥守殿へ可被申上候、猶追々可申通候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕八月廿五日

〔御年七拾六歳之御時ニ當れリ〕
惟新(花押)

伊勢兵部少輔殿

733 「家久公御譜中」

中山王尚寧弟具志頭醫禱百計無其驗、遂死于駿府邸舎、於是行葬禮、既而平田阿波介宗衡因本多正純之令、以具志頭之從臣等上洛、正純以書告家久、

734 「御文庫二箱家久公二卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書致啓上候、仍今度琉球之國王之御舎弟具志上御死去ニ付而、於此地御葬礼之儀、如形之取行ニ御座候間、御

心安可被思食候、然者具志上之御内衆、此地ニ被罷在候ても不入儀ニ存、上せ申候、左様ニ御座候へハ、平田阿波介其許へ可罷下之由被申候へ共、具志上之御内衆日本無案内ニ而、方角も無之躰御座候間、阿波介相添候而指上せ申候条、其御心得可被成候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

八月廿六日

本多上野介
正純(花押)

嶋津陸奥守様
人々御中

735
〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

去廿日駿府打立、同廿五日江戸へ下着仕候、則從 上様御使、加之翌日ニ者八木千たへら被下候、誠以忝儀ニ候、色々被付 御心候事、外聞実儀不可過之候、殊駿府より江戸迄者、道橋など新被作續候、江戸へ參着之時者、町々々ニ奉行を被付置、むざと往來不仕様被仰付候、種々御念入たる事非大形候、然者今日廿八日致 御目見得候、御仕合無殘所宜候、満足仕候、 御城承及候より結構之様子ニ而候、惣別御下知よくしまりたるとみえ申候、隨而爰元逗留之儀、何共未知候、定近日中ニ者御暇可被

下と存候、先右之仕合爲可申上、被稅所木工允差上候、猶追々吉左右可申入候、恐惶敬白、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

八月廿八日

陸奥守

家久(花押)

進上 龍伯様

736
『正文宮内社司澤氏藏』

注文

正八幡宮御拜殿之經筵十帖、兩人談合仕令寄進早、非恒例之儀候間、爲後證墨付如此、已上、

慶長十五年九月朔日

本田三河守

正親(花押)

喜入大炊助

久正(花押)

永温老

737
「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札致拜見候、仍琉球王御舍弟具志上御遠行ニ付而、御葬送之儀結構ニ執行御座候て、御満足思召之段、存其旨

候、然者彦坂九兵衛被入精付而、以御札被仰入候、即御狀相届ケ申候処、御返事被申上候、委曲期後音之節候条、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

九月三日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守様

738

〔御文庫二番箱義久公二卷中〕「義久公御譜中正文有之トアリ」
以上

貴札拜見、忝奉存候、隨而 公方様へ平田越前方を以被仰上候、則本多佐渡守披露之処ニ、一段御機嫌共御座候、今度陸奥守殿御下、爰元御仕合殘所無御座候而、御心易可被思食候、就中對拙者別而御懇比之儀ニ御座候間、忝次第ニ奉存候、將又御太刀一腰・御馬一疋并天鵞絨五卷被下忝候、遠路被爲入御念之段、過分至極奉存候、委曲御使者迄申入候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

九月十一日

土井大炊助

利勝(花押)

鳴津修理様

御報

739

『在文庫』「家久公御譜中ニ在リ」

尚々如此認申候処、昨日十二日天氣能御坐候て、琉球王御札相濟申候、我等も十七日必々可被立候、以上、

今度南郷内匠允伊勢爲參 宮罷上候處、此方様子爲可被聞召、東國迄被成御通候、先以忝奉存候、於駿府追付申候間、早々從彼地御返事可申上候処、江戸にて珍敷儀も於有御坐者、念比ニ爲可申上、此地迄召列候、然者爰許隙も明申候間、近日我等も可罷上候条、先々内匠允事下申候、

一先書ニも大形申上候、於江戸御馳走之様、存程書中ニ不申得候、最前御禮申上候以後、兩度 御城へ被召出、一度者式掌之御振舞にて、御脇指共致拜領候、一度者御茶被下、一段之御挨拶にて御坐候つる、 將軍様へ今度初而御傍近參候而、御様子共奉見候、結構成御事書中ニ難申分候、

一爰許諸事御置目之様子、諸大名其外御奉公人之躰見及申ニ、弥可爲御長久と相見申候、目出度御事候、
一本多佐州別而之御入魂不淺候、何事も佐州一人にて御前之儀者相濟申と見得申候、極老にて候へ共、日々方

くの振舞も被成同道、勿論出仕にも無御闕候、奇特成儀と申事候、

一我等儀者隙も明申候へとも、琉球王へ 御對顔未相濟申候、今日十一可爲 御對顔由被仰出候處、天氣惡候故相延申候、此方へ我等罷着候而以來、十五六日降とをし申候、今時分玆敷長雨と申事候、琉球相濟次第我等も可罷上由、從佐州承候間、無程可罷上候、弥不可存油断候間、可御、心易候、

一以条書申上候、委可被聞召達候、誠惶敬白、

〔朱カキ〕
〔慶長十五年〕

九月十一日

陸奥守

家久(花押)

進上
惟新

740
〔御文庫拾七番箱十七卷中〕

起請文之事

今度御書物被 仰付候、此等之内一毫茂曾以他言仕問敷候、若此旨於致違背者、

愛宕大權現 广利支尊天 天滿大自在天神、各御罰深重可罷蒙者也、仍起請如件、

慶長十五年
九月十一日

良秀(花押)

膺廓(花押)

泉哲(花押)

〔宛ナン〕

741
〔在官庫〕

以上

先刻者於 御城卒度得御意、御殘多存候、然者琉球王御奏者申候条、今晚御門へ御礼申度候間、御内儀被仰入可被下候、何様以參可得御意候、恐惶謹言、

〔慶長十五年〕

九月十二日

家親(花押)

山形駿河守

嶋津陸奥守様

人々御中

家親

〔此正文、御文庫二番箱家久公二卷ニ在リ〕

〔家久公御譜中ニ在リ〕

742
〔家久公御譜中〕

〔正文在相良權兵衛〕

其許長々滯留辛勞候、仍今度王位歸國付而、知行令割符、

物別諸法度等申遣候、向後之儀ニ候間、能々無緩様ニ可

申調候、就中來春渡唐船之事入精候間、要ニ候也、

〔朱力キ〕
〔慶長十五年〕九月廿三日 家久(花押)

有馬次右衛門尉との

相良勘解由次官との

743 「家久公御譜中」

家久奉對 兩御所、無別心爲勵忠勤、與本多正純互交神

裁、家老伊勢貞昌亦由家久之命、與正純之家臣内田織部

助直定交盟書、其情實見于左、

744 「古御文書御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

敬白 起請文之夏

一奉對 兩御所様、毛頭無別心可致御奉公候間、貴老へ

向後申談可抽忠節候夏、

一ぬきて表裡有之間敷候夏、

一企逆意者有之而雖致計策、曾以同心申ましく候、就其

申來旨少茂不隱置可申通候夏、

一我等於身上若あしき取沙汰可有之時者、ありのまゝ可

被仰聞候夏、

一龍伯、惟新儀も右之趣同前たるへき旨、連々申合候夏

右條々若偽於申者、

〔朱力キ〕
〔慶長十五年九月〕

745 「古御軸物御文書前ノ続キ」 「家久公御譜中ニ在リ」

敬白 起請文前書之事

一對兩御所様、毛頭無御別心、無二御忠節之旨被思召ニ

付而、向後我等ニ深可被仰合之段、奉存其意候、勿論

於拙者少疎意ニ存間敷事、

一其様於御身上、若悪キ御沙汰も御座候者、不殘心底何

様ニも御馳走可申上事、

一於何事も被仰聞、御隱密之儀御指圖無之かたへハ、一

言ももらし申間敷事、

一於何邊も心底ニ表裡存間敷事、

一本佐渡守ニも右之通我等連々可申合事、

右条々於偽申者、

〔在牛王裏〕
上者梵天帝尺四大天王、愨而日本國六十余州大小神祇、

別而八幡大菩薩 愛宕大權現 天滿大自在天神 伊豆箱

根權現 三島大明神 駿河鎮守・南無淺間大菩薩、各神

爵冥爵可罷蒙者也、仍起請文狀如件、

慶長十五年戌九月廿五日

本多上野介

正純(花押)

嶋津陸奥守様

746

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

案文也、

敬白 天爵起請文之夏、

上野様与陸奥守別而被申談付而、使共仕候間、向後貴老へ申合、少も私之儀無之、互御使之一筋、随何時も可申達候、就中從、上州様自然御隱密之儀など御物語にても、又陸奥守間との御使申候共、陸奥守より外ニもらし申ましく候、若表裡之旨を於存者、

「年月日ナン」

747

「御文庫拾七番箱十七卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

敬白 起請文之事

陸奥守様与上野介別而被申談付而、使共被申付候間、向後貴老へ申合、少も私之儀無之、互御使之一筋、何時も

儘可申達候、就中從、奥州様自然御隱密之儀など御物語にても、又上野介間との使にても被仰聞たる儀、上野方

外ニもらし申間敷候、惣而表裡毛頭有間敷候事、

右之旨若於爲申者、

▽梵^(牟玉)天帝釈四大天王、惣而日本國六十余州大小神祇、別

而伊豆箱根兩所權現 三嶋大明神 八幡大菩薩 天満

大自在天神 愛宕大權現 春日大明神 白山權現 賀

茂大明神 駿河鎮守 淺間大菩薩、神爵冥爵可罷蒙者

也、仍起請文如件、△

慶長十五年

戌九月廿五日

内田織部助

直定(花押)

伊勢兵部少輔殿

748

『諏方氏家藏』

尚神七殿御同道、是又畏入候、已上、

先刻者御尋祝着ニ候、一名之儀ニ候間、以來弥如在存間敷候、爲後日一到進之候、恐々謹言、

慶長十五年庚戌

九月廿五日

諏方因幡守

頼滿判

諏訪治部少輔殿

749 「正文在文庫」

慶長拾四年四月朔日、爰許之御船琉球へ御着津、同五月五日被成御出船候而、同月中ニ山河ニ被成上着候、同六月ニ鹿兒嶋へ被成着岸候、慶長拾五年四月之末ニ鹿兒嶋打立、五月節供之比者京泊ニ被罷居候、五月中ニ京泊被成出船候而、六月ニ伏見へ上着被申候、七月如駿河打立被成候而、益之比者彼地へ被罷居候、八月ニ駿河へ御着候而、御目見得御座候而、翌日駿河打立被成候、

九月廿七日

慶長拾三年

使僧自徳

使者宜保親雲上

750 「家久公御譜中」

家久發江戸之期、使伊勢貞昌遣駿府奉謝今般 恩遇之奈且以書簡及鳥銃・硫磺等贈本多正純、其返翰兩篇共載上方、

751 「正文在文庫」

以上

貴翰拜閱、過當至奉存候、如御紙面之、今度於江戸思召

儘之御仕合共御座候而、御満足思召段被仰下候、尤於我等珍重奉存候、然而此度就御歸國、木曾通御上被成候由、奉得其旨候、併先度爰元於駿府御逗留中、致何角悠々も不得御意、今以御殘多次第、書狀難申上候、雖不替申事候、此表相應之御用等御座候者、不殘御心可被仰下候、毛頭疎意存間敷候、將亦爲御音信於薩广御はらせ被成之由候而、御念を入たる御鉄炮廿挺被送下候、誠遠路御座候処、御懇切之通忝次第御座候、猶此等之趣、伊勢兵部少輔可被申上候間、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱力半〕
〔慶長十五年〕

九月廿九日

陸奥守様

嶋津

貴報

本多上野介

正純(花押)

752 「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

追而爲御音信鷹目、硫磺百斤送被下候、誠以遠路御心中忝次第、難申謝奉存候、然而是式御座候得共、判々蠟燭五百挺致進覽候、書中之驗迄ニ御座候、猶令期後音之時候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
慶長十五年

九月廿九日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守様
尊報

753 「御文庫拾七番箱十七卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶以 龍伯様 惟新様之御書、合三通進上申候、

去月廿九日之 御書、今月二日於落合頂戴、忝奉存候、然者安南國より使者船進上候哉、前代未聞、御冥加不可過之候、去年琉球へ御人衆被差渡、彼國之主迄日本薩州へ被引渡候事、三國ニ其隠有間敷候、就其自安南國も被申入欵と存候、其由駿府・江戸へ可有御披露之由、御尤之御意にて候、殊自琉球大明へ被罷渡候池城之仕合も、一段可然之由相聞得候、彼是以來春之被判者先く船作等被仰付、出船者可入御用捨事にて候、御錠御尤奉存候、隨而者是程迄御跡ニ後申候事、慮外千万、令迷惑候、乍去早朝罷出候てひえ申候へ、即たより申候間、日たけ候て罷立躰候、晩ニも早々宿を取養生仕躰候間、不及是非候、涯分急申候て、如上意関之地藏へハ必參上可仕候、此旨可然之様御披露所仰候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
慶長十五年

比志嶋紀伊守

十月二日

國貞(花押)

三原諸右衛門尉殿

754 「狗留孫山端山寺由緒書中」

一當寺之儀者 惟新様飯野江御在城之御時代、神前別而被遊御崇敬、家久様御代慶長十五年十月より御建立相始、十六年九月迄社頭并末社鳥居迄御首尾有之、則九月廿二日上遷宮ニ而、爲御名代新納次郎〔忠清〕四郎殿被成御參詣、成就御座候、其後破損、御修理度々有之云々、

755 「在官庫」

御使札、殊御太刀一腰・御馬一疋青毛・段子拾端・銀子卅枚被懸御意候、御懇意之至忝令存候、然者琉球王被成御同道、於駿府・江戸御仕合好、早々被明御隙御歸國、御満足察存候、此表於御上者、以貴面可得御意候処、勢州筋御通ニ付而、所存之外候、委曲御使者へ申達候条、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
慶長十五年

十月八日

井伊兵部少輔

直繼(花押)

嶋津奥州様

貴報

「此正文、御文庫二番箱家久公二卷中ニ在リ」

「家久公御譜中ニ在リ」

756

「御文庫四拾八番箱中」

「義久公御譜中正文有之トアリ」
「家久公御譜中ニ茂在リ」

猶以九月五日之尊書、今日致拜見候、然者大仏木曳之儀大相之由、尤ニ存候、此等之儀ニ付、別而被入御精候由、惟新様ハ先被仰越候、一段忝奉存候、何も罷下可申上候間、不具候、以上、

以先札如申上候、駿府・江戸之仕合無殘所、満足不過之候、殊罷上道筋之儀候間幸ニ存、伊勢へ致參宮、一昨日ハ伏見へ上着仕候、爰元之儀早々仕廻、大坂へ御札申候者、追付可致出船用意候、先此等之旨爲可申上、村田三郎右衛門尉差下候、委曲者含口上候間、不能書載候、恐惶敬白、

「朱カキ」

「慶長十五年」

十月十日

陸奥守

家久(花押)

進上 龍伯様

「慶長十五年ト張紙アリ」

757

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御上洛之由候間、參候て可申入候へ共、御透茂不存候条、先々一書令啓候、今度於江戸・駿府御仕合之段、珍重ニ存候、如何様御逗留中參可申述候、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長十五年」

十月十七日

花山大納言

定照

羽柴陸奥守殿

參

758

「相模守久信譜中」

慶長十五年庚戌四月、祖父以久卒城州伏見、將軍家賜遺領於忠仍、雖然 龍伯公在病床、忠仍之母堂亦邁老年、故固辭以請永屬從本宗家、因賜以久之三男堯舜房忠興於佐土原、忠仍在城于垂水、

759 幸便之条申入候、仍佐土原之儀連々御訴訟、本上野介・

拙者御取成申上、大形相濟申候、來春さと原右馬頭殿可有御受取由候間、其間之儀只今在城之衆・地下人喧嘩なと無之様、又四郎殿被仰付候様ニ御分別專一候、自然喧嘩たと仕出者於在之者、其元□被成□又四郎殿□

要存候、此等之趣、能々又四郎殿へ御申候而尤存候、以來之爲ニ候間如此ニ候、於右馬頭殿御下向之砌、具可申入候、恐々謹言、

十月十三日

山勘兵

尚友判

河上六郎兵衛殿

御宿所

760

「義弘公御譜中」

「正文在伊作衆田部四郎左衛門」

去夏者預書信本望候、於駿武奥州之仕合者無殘所様躰、
先上洛流布候故、無親疎衆令満足候、某許無事之模様、
玆重候、爰許無爲候、自然相應之義於承之者本懐也、猶
期來音之時候、かしこ、

「米カキ」
「慶長十五年」小春十五日

信尹

維新「爰ニ字不見」

761

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々三位中將儀、万端可然様ニ奉頼存候、以上、
今度駿府・江戸御下向御仕合之段及承、玆重ニ存候、就
其御上洛早々御見廻可申候へ共、御透茂不存候間、無音

所存之外ニ存候、何も以參和可申入候、恐々謹言、

「米カキ」
「慶長十五年」

十月十七日

大炊大納言

經頼(花押)

羽柴奥州様

人々御中

762

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

蹴鞠爲門弟無紋紫革之事、雖有子細之儀、別而御執心之
上、兄弟之契約申候間免之候、於淺思者可被背神冥者也、
恐々謹言、

「米カキ」
「慶長十五年」十月十九日

雅庸

羽柴陸奥守殿

763

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

就幸便企一書候、仍八月晦日之書狀、今月十三日到來、
令披見候、先以駿府・江戸之御礼相濟、一段御仕合能御座
候通、殊更「兩御所様別而御念比ニ被成御意之由、誠に
寄特成仕合、千々万々目出度存事候、左様ニ候て御暇出
申御上候者、京邊ニ無滞留早々御下向待入存候、乍去越
中守殿へハ必御礼被仰候而、可然存候、然者當國之儀弥
靜謐ニ御座候間、可御心安候、猶追々可申通候、恐々謹

言、

「朱力本」
慶長十五年也十月廿三日

惟新(花押)

陸奥守殿

まゐる

764 「相模守久信譜中」

爲見廻芳書令祝着候、駿府・江戸之仕合無殘所儀、書中
ニ難書記候、仍爲音信銀子五枚到來、遠路懇志之至候、
猶使者可申候、恐々謹言、

十月廿五日

家久御判

又四郎殿

765 「義久公御譜中」

「正文有之」

前の重武といひし人のうんせうのたち花山とて、植そた
てをかれし所をたつね行て詠之、

法印龍伯

時ならぬ冬まで残る木の本ハ

これやとこよの宿のたち花

慶長十五年十月廿五日

766 『小根占園林寺由緒抜書』

一慶長十五年小根占江 龍伯様御光儀之時、當寺江御成
被遊候、御詠歌御短尺并御供衆之短冊、于今格護仕候、
左ニ記之、

松杉のたちならひたる古寺はわけ入てこそ心すみけれ

龍伯

おほけなき袖を待えて古寺も玉しく庭となりける哉

關道

こほるより岩根の水の音絶てなを静なるおくの山寺

住房

杉むらの木のまのみち冬かけてけふをまちける法の場

かも 久正

たつね入おく山寺は岩木さへ心あるへきけしきなりけり

忠通

冬かれをよそなる松のみとりこそたへなる寺のしるしな

りけれ 如有

古寺の砌の松に風ふれてさなから法の聲を聞かな

重住

右之時、柘柑山の御詠も當寺ニ而御書せ、爲致拜領由

申傳候、于今格護仕候事、

いにしへ重長といひし人の温州の橘山とて、植そたてを
かれし所に行て、これを詠す

法印龍伯

時ならぬ冬まで残る木の本ハこれやとこ世のやとの橘

慶長十五年十月廿二日

767

「御文庫二番箱義久公三卷中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

猶申候、琉球之儀共旁 上意旨比志紀州・伊兵少申

談候、委細奥州様可被成御相談候条、萬事之分別專

一奉存候、猶奉期後音之時候、以上、

今度奥州様被成御上洛、関東へ就御下向、我等も御供申

罷下候、於 兩御所様御仕合無殘所候条、御満足奉察存

候、於様子ハ、比志紀州・伊兵少可被仰上候、書中不得

申候、都鄙之御賞御名譽之御事共候、就中先度爲御音信

御太刀一腰・御馬代三百疋并びらうたり五卷送被下候、

毎事御懇意忝次第共候、猶後音之節可申述候条、早々申

上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十五年」

霜月三日

山口駿河守

直友(花押)

龍伯様

參人々御中

768

「義久公御譜中」

「正文在蒲池八左衛門」

尚々奥州様御仕合能御下向之段、拙者式迄も大慶珠

重難申盡奉存候、猶追而可得貴意候、

雖無指儀御座候、奥州様被成御下向候之条、捧愚札候、

先書ニ如申上候、於駿符・江戸無御比類御仕合、無事ニ

御下國、目出度奉存候、先日御咳嗽・御痰折々御吐、逆

心御座候様ニ被仰下之間、御藥調進仕候キ、被成御用候

哉、於御相當者、重而可被仰下候、寒前ニ而御座候間、

不被引御風無御冷様ニ、別而御養性專要奉存候、切々御

吉左右所希候、爰元似合之御用等可被仰付候、委曲福崎

新兵衛殿可被申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十五年」

霜月七日

祥壽院

瑞久(花押)

龍伯様

人々御中

769

「圖書頭忠長譜中」

紹益罹微恙在病床、招於諸醫雖加療養藥餌不利、禱爾于

上下神祇亦不驗、而慶長十五年庚戌十一月九日卒、享年

六十、法號既成宗功庵主大徳山宗功寺殿、家臣尾辻次第

兵衛尉・鹽田分太追跡殉死也、

770 「家久公御譜中」

就日本與大明勘合不成、可設渡師備旨、今春已本多正純以書述台命、今又止渡師之事如左、是當初秋家久在伏見之日、板倉勝重所語無相違者歟、

771 「御文庫二番箱家久公二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

先書ニも申入候得共、重而令啓上候、仍自其許琉球へ御働之儀、弥御無用にて御座候、其子細ハ大明國与日本御和談之儀相濟申候間、如此御座候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長十五年」

十一月廿三日 本多上野介 正純(花押)

羽柴陸奥守様

人々御中

772 「御文庫四拾八番箱中義久公」
「卷久公」

既成宗功庵主ハわかき比ほひより、國家の法度などをもいたし、別而忠節の人なり、弓箭におひても度々高名をし、殊世の中のもてあそふ事なればとて、すぎの道歌連

歌をも執心して侍りしか、無常のならひ、さらぬ別のよしを聞て、予あはれさのあまり葉盡孤村見夜燈といへる句の心を一首につらね、霊前の手向とするもの也、

法印龍伯

山寺の木葉は風にさそはれて
すきまをみする夜半のともし火

慶長十五年十一月廿六日

「此御詠歌圖書頭忠長譜中ニ在リ」

773 「新納忠元譜中」

慶長十五年庚戌十二月三日死去、享年八十五、法名良英號嗜翁、

774 「忠元歿功記」

慶長十五年戊三月、忠元詠歌のよし、

さそな春つれなき老とおもふらん

ことしも花の跡に残れは

同年十二月三日、於大口病死、年八拾五歳、大口天龍寺に火葬す、後興禪院と寺号相改る、石塔は夫婦同所ニ相竝居、忠元法名者翁良英庵主、同日大口郷土伊地知又十

郎重近入道世休清久一名、宮竹休兵衛と申者兩人殉死爲仕由、

此石塔茂右夫婦の後ニ相並居候、又十郎法名玄岳龍翁一本、世

休居士、休兵衛法名鏡阿弥陀佛、此等四基一所ニ有之候、

右兩士の外致殉死度と申者、數多爲有之由候へとも、御

免無之、指を切て殉葬の式爲仕者五拾餘人爲有之段、古

老申傳候由、忠元夫婦位牌は祥雲寺ニ安置候得共、後泉

徳寺移し、于今其通御座候、

775 「義久公御譜中」

「正文在蒲池八左衛門」

尚、御逗留中ニ御能・御まり・御數寄、其外御家中

之御事打積被仕候、拙者式迄満足此事候、以上、

幸便之条申上候、陸奥守様江戸・駿河之御仕合無殘候て、

去十一月廿九日ニ此表被成御着候而、十二月五日御出舟

候、御下着程御座有間敷候、越中守外分旁之悦着被申候

事無是非候、殊更越中守へ被遣候國泰之御こし物、被成

御立候、明日ためし被申候所ニ、一筒かりかね之ほね迄

かけ水もたまらず、土段たけ打こみ申候、則二尺三寸ニ

摺上、さしれうニ早々こしらへ被申候、心藏双無御座候、

將亦松井子息長岡式部殿へ被遣候御こし物も、筒をち申、

祝着被申候、此等之趣御兩三人様へ可申遣旨ニ候間、如
此候、御実志不淺由ニ候、恐惶謹言、

「朱力半」
「慶長十五年」

十二月十一日

正源院

■■■■(花押)

龍伯貴老様

進覽

776 「家久公御譜中」

同年十二月十一日、家久通船筑前之海洋、時風波甚悪、

因乗船及供船共泊相之島、難風頻吹來汰波簸船、遂撞折

柁碎大濤卷、諸船當儀巖盡碎破、於是始家久供奉之士漸

保一命耳、唯肝付伴十郎兼幸溺死、此外陪臣奴隸殞命者

十餘人、翌十二日、以書告此事於龍伯・惟新、如左、

777 『在官庫』
「上文初ル」

礮ニ打上、漸あかり申候、誠々助不意之命候、めしつれ

候衆無何事候、乍去肝付伴十郎其外下々之者共十人餘、

相果申候、此等之様子、若我等下着以前被聞召付候へ、

可爲御心遣候条、急度申上候、自是者越州へ慥成舟借申

可罷下候間、可御心易候、誠惶敬白、

「朱力半」
「慶長十五年」

陸奥守

十二月十二日

家久(花押)

進上
龍伯様

惟新様

「此御文書、四拾八番箱中ニ有之、糺合スルニ上文切ル、モノト見ヘ
タリ」

「義久公御譜中ニモアリ」

「家久公御譜中ニモ在リ」

778

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲歳暮祝儀、小袖五重到來、尤神妙之至候、猶本多佐渡

守可申候也、

「朱カキ」

「慶長十五年」十二月十五日 (秀忠)(花押)

薩摩少將殿

779

「得能氏記録」

慶長十五年庚戌

堀忠俊家臣堀直寄・同監物兄弟諍論事、

閏二月二日、堀越後守忠俊 忠俊ハ羽柴左衛門督秀治カ長男ニ
テ、堀左衛門佐秀政カ孫ナリ、秀

政字久五郎ト云シトキヨリ信長公ニ仕ヘ軍功ヲ顯シ、段々御加恩有テ
「一石ヲ領ス、信長公横死ノ後、秀吉公ヘ属シ猶忠ヲ守ルニヨツテ、天

正十三年ニハ從四位下侍從ニ進ム、其後越前北ノ庄ヲ賜リ十八万石ヲ
領ス其上行上周防守善明・溝口伯耆守秀勝ヲ與カニ付ラレ、都合二十
九万八石ヲ領スルノ処ニ、小田原陣ノ時三十八歳ニテ病死、息久太郎
秀治ニ家督ヲ被下、是モ後ハ從四位下侍從ニ昇リ羽柴氏ヲ賜リ十八万
石ノ御加増ヲ賜フ、秀吉公薨御ノ後、家康公ニ属シ忠節ヲ励ミケルカ、
三十二歳ニテ病死ナリ、其子久太郎家督ヲ被下、其上 秀忠公ノ御前
ニ於テ元服シ、忠ノ御字ト松平氏、カ家臣堀監物直清・同丹後
ヲ賜ヒ、松平越後守忠俊ト号ス、

守直寄兄弟ハ忠俊左右ノ老臣ナリ、故ニ國家ノ政事ヲ
司リケルガ、越後守幼少故ニヤ、互ニ權威ヲ爭ヒ家中
頗ル騒動ニ及ヒ、兄弟駿府ニ來子細ヲ一々言上ス、
家康公大ニ御機嫌損ジ、越後守幼少ナレバ、汝等兄弟
左右ニ在テ國家ノ政事ヲ沙汰シ、且忠俊ニモ異見ヲ加
ヘ守立ベキ旨、先年數度仰付ラル、ノ処ニ、却テ主ヲ
蔑如ニシ國家ヲ治ル事モセズ兄弟權威ヲ諍フ事、善惡
ノ差別ヲ聞ニ不及、言語道斷不忠不義評スルニ不足、
是大乱ノ基ナリ、越後ハ北國ノ押地ナリ、故ニ忠俊ヲ
居置玉フ、如何ニ幼少ナレバトテ國家ヲ治ル次第モ不
存、不届ニ被思召候ト有テ、今日領知被召上奥州岩城
ヘ配流、家臣直清ハ最上ヘ御改易、直寄ハ御追放ナリ、
忠俊配所ニ赴キ星霜ヲ送リケ
ルカ、二十六歳ニテ病死ナリ、

(本文ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ)

(表紙)

義弘公
家久公
慶長十六年

後
編
舊記雜錄
卷六十六

780

「御文庫廿二番箱十卷中」
慶長十六年元日御發句

(義弘)
龍伯法印

朝戸あけの袂か
梅のうすかほり

「義久公御譜中ニ在リ」

781

「義弘公御譜中」

「正文在松山衆吉田貳右衛門」

天徳和合樂地福皆圓滿

(例之)
君か代の久しかるへき列には
兼そ植しすミよしのまつ

慶長十六年正月吉日
藤原朝臣義弘(花押)

年徳神
參

782

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

蜜柑二函到來、誠遠遠之条、殊歡覚候、猶本多佐渡守可

申候、謹言、

(秀忠)
「米カキ」
「慶長十六年」正月三日(花押)

(家久)
薩摩少將殿

783

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以爰元之様躰、御使者可被仰上候、以上、

如尊書之、先度者御使者御下向、於爰元種々申談御事ニ

候、仍御國之蜜柑進上被成候、山口駿河守も其段委被

申越候条、大久保相模守・上野介相談披露仕候処、遠路

被入御念候儀、御祝着之旨、御父子様方御内書被進候、

次私へも被下置候、如貴札到來、御芳情之至難申上候、

委曲御使者可爲言上候条、奉省略候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

正月五日

本多佐渡守

正信(花押)

薩广少將様

貴報

784

「十番箱御軸物中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

去十月廿八日貴札致拜見候、隨而御領内へ唐船一艘着岸
之由承候、然者近年者長崎へ被成御送届候得共、今度仰
出ニ付而、於御國ニ商賣被仰付候由、尤ニ存候、荷物并
唐人之員數別紙ニ示預候、則披露仕候處ニ、被入御念旨
ニ御座候、將亦最前被仰上候南蛮船歸帆仕候由、得其意
存知候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

正月十日

安藤對馬守

重信(花押)

土井大炊助

利勝(花押)

酒井備後守

忠利(花押)

本多上野介

正純(花押)

酒井雅樂頭

785

「義久公御譜中」

鳴津陸奥守殿

貴報

忠世(花押)

一慶長十六年辛亥正月廿一日、祈禱・醫藥・針灸共不驗、
法印龍伯卒、享年七十九、法名存忠、號貫明妙谷寺殿、
有辭世和歌曰、

世間のよねと水とをのミつくし

つくして後は天津大そら

追跡殉死者有十有五人曰、

新納式部 村岡豊前 山口對馬 肥後權允 武彦左衛

門 新原藤左衛門 田尻小吉 吉井佐渡 市來清左衛

門 赤塚吉右衛門 岡本讚岐 春田佐渡 染川源允

濱田民部左衛門 法印仙朝等也、

將軍家秀忠公聞龍伯訃音之觸、台聽則使揖斐與右衛

門尉殿下薩摩吊之、且賜香資白銀一千枚矣、

太守家久主賚法印龍伯之遺物定家卿色紙・寶刀治工來

葉茶壺三品、遣專使獻 秀忠公、公乃賜回報、

二月廿日、市來清左衛門實明公に殉死、年廿六、瀧田民部左衛門經

重年七、春田佐渡入道・林仙朝坊年十四、新納式部少輔忠

朝年四、新原藤左衛門年十九、岡本讚岐・吉井佐渡入道嘉

卜年七、田尻小吉種春年三、武彦左衛門延爲年四、染川源

允年四、村岡豊膳重光年十六、山口對馬年五、赤塚吉右衛門重

増年五、肥後權之丞盛秀年十

一妙谷寺貫明存忠菴主、文と武を車の兩輪の、鳥の双翼

のことくし玉ひ、理無據民の志ふかく、九ツの國を幕

下の内ニして、威海内ニして人□たりぬれば、四方

の風靜にして草も木もなひきし□のミニなん、朝ニ

ハ礼樂射御の道を翫、夕ニハやまとことのはの奥旨を

極め、造にもうます、顛觀マツく連序の窓の前ニハ眞如の月

ニコゝろをすましましおもひし、慶長十九年の暮より□

ならん、御心ちをもく□給ふて、次のとし睦月廿

日余リニ身まかり給へハ、上中下の悲しミ述てもつく

しかたし、筆ニも更也、幼き御恩徳のめくミハ山より

も高く海よりも深きを、泪なれてはたとふへき方もな

し、身なし子の心地ながら、御法名を句の上ニして、
九品の愚詠を手向種ニ作るものならし、

大炊介久政

「二首ノレス」

別れてふ有ハ佛の上ニさへ有けるものをあわれむの名
むかしてと遠くハあらん庭の面もはる草高く成増る也
免かれすとあふきなれつる陰頼む一木の花の跡如何ニ
せん

いとゝたにものかなしきを雲に入鳥の音さそふゆふつ
くる哉

そのことくなき名残さへ有物をとしはるなきし限とハ
しる

村薄もへ出よりすへの□本のしつくを忍ふ草かな
ちれば咲花ならんよのせからしをあわれいつ迄有てな

けかん

海ちかく山遠からん寺の前ニ御法の舟の浮む長閑さ

一※妙谷寺貫明存忠菴主家當□十六代の太守たり、先祖の□

□名越て、餘多の道を知るよしのうちにもなきを、

あさめ民を撫、或ハ敷島の道を傳しより、朝ハ靜成花

のかけにゆう／＼として、春色のけんするをおしミ、

暮れ八月の前にぎんしうして、秋光のたけなわなるを
悲しミ、しんかふの窓のうちニハ法の燈をかゝけしく
わんざつの心淺からさりしに、慶長十九年臘月「五歌」の末よ
り□きやくりんのゆふへと成給しかは、天にあ
をき地に伏て歎けとも甲斐なくして、哀ナル哉、會者
定離のことわり、誰かは此みちニもれ南、しうゑんの
おもりしもミタの名号を句の上に手向るものニ南、

惟新

「此御歌書違ひ多よめ兼候」

なし置ケる名殘□はなかたミかたみニつめる手向
種かな六ツの道はなれ出てハ□し南やちかすの
□なるらぬ

化の露よりけなる□の向後わすかたしくハ浮世の習ひ
かハ

道し有ことくをのミ國の爲人のおし名とすゝめし物
を

立のほる空にかれる面影□きらて果もせん夕煙かな
深き夜※の月ニ老たる鐘の音にかへのねむりハさめ果に
けり

(※部分ハ次号文書ト同文ナラン)

788

「御文庫三番箱卷三中」
「義久公御譜中写在國
府諸兵衛トアリ」

妙谷寺殿貫明存忠庵主ハ、たうけ十六代の太守たり、せ
んそのまつりごとにもこえて、あまたの國をしるよしの
うちにし世をおさめ、たミをなで、あるいハ弓馬のしは
んをなし、あるいハ敷嶋のミちを傳しより、朝にはしつ
かなる花のかけに、ゆうくとして春色のけんするをお
しミ、暮れは月の前にぎんしうして、秋光のたけなはな
るをかなしひ、しんかうのまどの内には、法のともし火
をかゝけしくわんざつの心あさからさりしに、慶長十五
年らう月のすゑより、例ならぬ御心あしくなり給ひて、
次の春む月の中の十日あまりに、ぎやくりんのゆふへと
なり給ひしかは、天にあふぎ、地に伏して、歎けともか
ひなし、哀なるかな會者定離のことハ、誰かハ此ミち
にもれなん、しうゑんのおりしも、ミダの名号を御とな
へ給ひしかハ、六字を句のかミにして六しゆをつらね、
そんれいに手向たてまつるものなり、

惟新

なしをける名殘めかれぬ花かたミかたミにつめる手向種
かな

六つの道はなれ出てハ九つのしなやはちすの臺なるらん

あたし野の露よりけなるミの向後わするゝはうき世の習

ひかも

ミちしあることくをのミ國のため人のをしへとすゝめし物を

たちのほる空にうかへる面かけハきえはてもせぬ夕煙かな

ふかき夜の月に寒たるかねのをとにかへのねふりハさめはてにけり

「前に載たるは傳写の誤多し、明治廿三年の夏、季通御文庫を開き、

正文を写して載せ置、後人の参照に供す」

789

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

去杪冬初廿三日御書、同十一月下旬到來、謹而拜閱、抑

貴國永々致淹滯處、情意之厚、于今遺失無之、殊更此地

案堵之条、千喜万悦、珎々重々、次爲御音問、楮國三百

帖并御茶壺壹箇拜受、厚恩重於泰山者也、隨而雖輕少之

至候、美酒貳壺進上之、補夙志計候、恐惶不宣、

「朱カキ」

「慶長十六年」端月十一日

中山王(花押)

羽林家久公

790

「家久公御譜中正文在伊地知越右衛門トアリ」

覚

一 御檢地之間、飯米白米ニ而一日老人ニ付七合五夕宛、

但かミ之分者三合減、御内衆者二合減可爲候、

一 薪・野菜人數ニ應而米奉行衆前より銘々御渡可有候、

付看者其所之有合ニハ可被仰付候、

一 御酒者白酒ミきの間ニ而、御檢地中其間切々より、一

日老人ニ付三盃宛可被仰付候、

一 御檢地隙明徒之日者、一日老人ニ付能米五合ツ、勿

論從在郷故実是有間鋪候、付留主番ニ被召置候衆者、

能米五合宛可爲候、

一 故実分米壹石ニ付、銀九匁宛之直成ニ百姓前より御請

取可有候、

一 船頭・加子飯米之事つき粟にて、船頭一日ニ壹舁宛、

加子一日老人ニ付七合五夕宛可爲候、

一 油之事御算用之間者、百姓前ヨリ調可申候、油無之所

者、あかし松可爲候、

一 田畠かくし不申候様ニ、其所之役人・百姓被召寄、堅

被仰付可被下之事、

一 御檢地衆至地下人、無理非道無之様ニ憑存候、自然地

『加治木御日記』

慶長十六辛亥

正月朔日壬寅晴

一 巳刻被成 御差出、削物ニ而御三献參候、御座江新納平兵衛尉・川上四郎兵衛尉・本田源右衛門尉、

一 加治木衆中出仕之 進上物之事、

一 百疋 新納平兵衛尉 一百疋 川上四郎兵衛尉

一 百疋 本田源右衛門尉 一百疋 伊勢弥八

一 五百文 川崎九左衛門尉 一百五十文 福永宮内少輔

一 六百文 大田千三郎 一百三十文 上井次郎左衛門尉

一 三百文 曾木五兵衛 一百三十文 上床藤右衛門入道

下人慮外之者候者、其科如何様にも可被仰付候、

右之条々我々申入事慮外ニ存候へ共、去年當國御檢

地衆も加様成墨付可仕之由被仰候間、如此候、以上、

慶長拾六年正月拾七日

本田伊賀守(花押)

蒲池休右衛門尉(花押)

都之嶋御檢地

御組頭

參

一 三百文 猿渡監物 一 三百文 波多彦八

一 三百文 松岡丹後守 一 貳百文 上井神三郎

一 貳百文 伊十院左京允 一 貳百文 白坂内膳正

一 貳百文 新納左右衛門入道 一 貳百文 和田主膳正

一 貳百文 白坂仲右衛門尉 一 貳百文 中村万左衛門尉

一 貳百文 野村早右衛門尉 一 貳百文 比志嶋内藏允

一 貳百文 江夏小内記 一 貳百文 五代舍人佐

一 貳百文 白坂助吉 一 百文 肥後十右衛門尉

一 百文 関玄蕃允 一 百文 大窪仲右衛門尉

一 百文 福永藤四郎 一 百文 有川与左衛門尉

一 百文 伊地知掃部兵衛尉 一 百文 安野弥左衛門尉

一 百文 市來治部右衛門尉 一 百文 林長左衛門尉

一 百文 健軍猪右衛門尉 一 百文 二階堂傳右衛門尉

一 百文 鎌田伊賀守 一 百文 宮原主計助

一 百文 伊東新四郎 一 百文 有川平右衛門尉

一 百文 松本助八 一 百文 福永弓左衛門尉

一 百文 安藤權右衛門尉 一 百文 須田式部少輔

一 百文 永山兵部少輔 一 百文 精松三右衛門尉

一 百文 大脇内藏助 一 百文 北村三左衛門尉

一 三百文 日置越後守 一包扇子貳本弓削屋九郎右衛門

一春日大明神 若官權現 山元權現 諏訪大明神 天蒲
天神江 惟新様末刻ニ御社參有之、御ヒサツキ鳥目百
疋宛被成御持進候、

正月二日癸卯晴

一帖佐・蒲生・吉田・山田衆中出仕有之、何茂御通被賜
候、

一加治木山伏衆出仕有之、但進上物衆、

一鳥目百文 圓乘坊 一中紙壹束 圓覺坊 一鳥目百文

如屑

一竜伯様年頭之爲御禮儀、使者南郷内匠助被參候事、

一御太刀一腰・御馬一疋 龍伯様江

一奥州様年頭之爲御祝儀、新納平兵衛御使として被參候、

一御太刀一腰・御馬一疋 奥州様江

一奥州様年頭之爲御祝儀、御使者川上式部太夫被參候、

削物ニ而御酒御寄合有、

一御太刀一腰・御馬一疋

右御使者川上式部太夫御礼として鳥目百疋進上被

申候、

一惟新様御船御乗初ニ被成 御出候、但未之刻、

一比志嶋紀伊守殿方使ニ而年頭之御禮被申上候、

一日州綾衆中方使上井越前守被參候、様子ハ配軼進上被
申候、

一伊東九兵衛尉・波多喜介・上床五郎太夫名被下候、爲

御祝物御樽壹荷・鯛一掛進上被申候、御酒被給候、

一利心江禱陰丸之儀被仰付候、使宮原主計助、

正月三日甲辰晴巳刻ヨリ雨

一寺沢志摩守殿方歳暮之使者須广七左衛門尉殿被差越候

小袖耆重進上、御振舞有之、相伴道甫、使者方鳥目百

疋進上、使者へ鳥目式百疋被遣候、使本田伊豆守、

一荒木十左衛門殿方右須广七左衛門殿へ傳書有之、并馬

書口傳

一木佐貫太郎次郎年頭御礼被申上候、せつた一そく進上

被申候、

一竜伯様年頭之爲御祝儀、御使者吉岡仲四郎被參候、

一御太刀一腰并御馬一疋

右御使者へ削物ニ而御酒御寄合有之、

一本田三河守年頭爲御祝儀參上、御樽壹荷・目籠進上、

挾肴ニテ御酒御寄合有之、

正月四日乙巳雨

一中紙貳束 般若寺

一中紙一束 法田院

一 中紙一束 若宮坊 一 中紙一束 醫王院

一 中紙一束 持宝院 一 中紙一束 諏方坊

一 扇子五本 吉祥院 一 扇子二本 眞藏院

一 雜紙一束 普門寺 一 扇子二本 玄性坊

一 扇子二本 自性院 一 中紙一束 十如院

住吉之元日之御祭之花かうとして瓶子二對進上、右

同人、

一 中紙一束 神守院 一 中紙一束 寶勝院

一 中紙一束 威徳院 一 扇子二本 宗俊坊

右般若寺十如院・法田院へ御汁二ツニ而御酒寄會有

之、衆徒中へ御通り之御酒被賜候、

一 桂山城守殿年頭之爲御礼參上候、吸物ニ而御酒御寄會

有、

一 折口之衆中へ使を以年頭之御礼被申上候、鴨式ツ進上

被申候、御酒被給候、

一 中紙壹束 福永弥兵衛尉

一 高城中郷之衆中并肝煎年頭被申上候、たきのわなさし
鴨耆番進上、御酒被給候、

一 求見崎之御假や年頭被申上候、御樽一ツ上ケ申候、御

酒被給候、

一瓶酒耆對 加治木正祝子 一瓶酒耆對 小山田祝子

一瓶酒耆對 平松之正祝子 一弓一張 川崎軍介

一 中紙式束 日塩善三郎

正月五日丙午雨

一 柗山權左衛門殿年頭之爲御禮使者被上ケ、取次比志

嶋内藏允、

一 彈宗衆年頭之御祝儀有之、出世之衆安國寺へ菓子ニ而

天目清酒御寄會有、餘者御通り被給候、

一 御茶一對 大壽寺 一同 吉祥寺 一同 安國寺

一同 永興寺 一同 陽春院 一同 觀音寺

一同 眞光寺 一同 東樂寺 一同 法壽寺

一同 富藏庵 一同 祖看藏主 一同 太珍藏主

一 運管上人并願成寺年頭爲御禮參上、汁ニ而御酒御寄會

有之、

一 御茶耆對 運管上人

一 中紙壹束 願成寺

一 御茶耆對 本誓寺

一 実窓寺・天福寺年頭之御禮被申上候、御茶一對ツ、進
上、菓子ニ而天目有之、

一 霧嶋山座主坊年頭之爲御禮儀參上、御樽耆荷・目籠進

上、御酒御寄會有之、

一 竜伯様江御使市來十左衛門尉被參候、

一 御虫氣何ほとニ御座候哉事、

一 御一臺へ御傳言之事、

一 大田左馬助・鎌田寛右衛門尉・野村吉之允・新納狩之介へ名被下候、爲御祝物御樽老荷・鯛老掛進上、

一 龍伯様江御使波多喜介被參候、今日之御氣相何程ニ御座候哉事、

正月六日丁未晴

一 相良長壽殿方年頭之爲御禮儀、使者佐牟田勝右衛門殿被差越候、御振舞有、相伴了齋、

一 御太刀一腰・御馬一疋 相良殿方

右使者方青銅式百疋進上候、

一 相良長壽殿使佐牟田勝右衛門殿へ鳥目三百疋被遣候、

使松本助八、

一 新納小兵衛年頭之御礼被申上候、御鷹之大緒一筋進上候、

一 竜伯様へ爲御年頭、 惟新様國分へ被成御越候、

一 御樽三荷并折三合 竜伯様江

一 御樽式荷并折二合 御一臺江

一 鯛老掛

一 惟新様御宿鎌田玄蕃助、爲御祝物亭主方鳥目百疋進上候、

一 鎌田玄蕃助へ鳥目三百疋被賜候、

一 於國分慶賀二頭參候、鳥目式百疋被下候、

一 獅子尾觀音ニ鳥目百疋御拜進有之、

一 増長院被參候、中紙老東進上、

一 伊勢兵部少輔殿へ御使野村大炊兵衛、

一 伊東修理太夫殿越着ニ付、御内證之儀被仰越候、

正月七日戊申晴

一 妙圓寺年頭之爲御礼參上、中紙二束并御茶老對進上、

菓子にて天目御酒御寄會有、

一 白鳥山座主坊年頭爲御礼參上、汁ニ而御酒御寄會、

一 御樽老荷 満足寺 一たひ老束 良秀房

一 竜伯様江御使大田左馬助被參候、

一 昨日被成御越候御礼之事、

一 御虫氣何程ニ御座候哉事、

一 伊勢兵部少輔下向ニ參候書狀寛

一 書狀并きみなへのきち茶杓老ツ

進上 長宗我部殿

一書狀壹通

小村殿方

一書狀二通

山口駿河守殿方

一御ふミニツ

遠州かけ川方

一精松三右衛門次男被懸御目候、名被下候、爲御祝物鳥

目百疋進上被申候、

一竜伯様方御使者大野左近將監被參候、御意趣ハ直ニ被

聞召候、

一右馬頭殿方年頭之爲御祝儀、使者ヲ以御太刀一腰・御

馬一疋進上、御酒被給候、

一白濱七介年頭御礼被申上候、踏皮一疋進上被申候、御

振舞有之、

一伊地々彦右衛門年頭御礼被申上候、御振舞有、

一簾屋源左衛門尉入道年頭御禮被申上候、御樽壹荷・昆

布一折進上、御酒被給候、

一奥州様方御使鎌田左京亮被參候、御意趣御直ニ被聞召

候、御酒被賜候、

一喜入攝津守殿年頭之爲御禮參上、御樽壹荷・目籠進上、

吸物ニテ御酒御寄會有之、

一於山本權現爲御祈念心經千卷讀誦之御札進上、圓乘坊

正月八日己酉晴

一又四郎殿年頭之爲御禮參上、御太刀并御馬一疋進上、

削物ニ而御酒御寄會有之、

一豊後守殿年頭之爲御礼參上、御樽一荷并目籠進上候、

削物にて御三献參候事、

一佐多又太郎殿年頭之御礼參上、削物ニ而御酒御寄會有

之、

右又四郎殿・豊後守殿・又太郎殿御寄會有之、御

座へ了齋・本田源右衛門尉、

一竜伯様方御使鹿嶋助七被參候、夕部夜半方御虫氣御快

氣候由被仰越候事、并一臺方も右之様子御傳言被申越

候事、

一藥屋与右衛門年頭之御礼申上候、御樽一荷并昆布一折

進上、御酒被給候、

一市來三右衛門年頭申上候、御樽一荷・昆布一折進上、

御酒被給候、

一長善寺幻生院・宗江院年頭爲御禮參上、菓子ニ而天目

酒有之、并御振舞有之、相伴比志嶋内藏允、

一飭屋久右衛門年頭之御礼申上候、手燭壹ツ進上、但薄

塗、

一吉田美作入道方年頭御禮使ニ而被申上候、自參上可申

候へ共、竜伯様御虫氣ニ付而、御祈念被仰付候間、
以使申上候事、

一成願寺年頭之御礼使僧ニ而被申上候、進上瓶子式對・

一折、御酒被給候、

一奥州様方御使川上喜左衛門被參候、御意趣者御直被
聞召候、御振舞有之、

一北郷加賀守殿年頭之爲御禮參上候、御樽壹荷・鯛式掛
進上、削物ニて御三献、則御食御寄合有之、御座へ本
田源右衛門・了齋被參候、

一 百梅年頭之御礼申上候、進上中紙卷束、

一 竜伯様江御使日置越後守被參候、

一 御虫氣何程ニ御座候哉由被仰越候事、

一 奥州様方御使二皆堂城之介被參候、

一 竜伯様御虫氣何程ニ御座候哉、未無御快氣候へ、

明日國分へ可有御越事、

一 吉利左右衛門殿方年頭爲御礼使、舎弟之三九郎被參候、

様子者御船作之奉行被仰付候間、名代ニ而被申上候、

御酒被賜候、

一 龍伯様御使中村萬左衛門被參候、

一 御虫氣可被聞召由候而、今朝御使被成御上候処ニ

御快氣候由、一段目出度被思召候、弥能御座候哉
事、

一 相良内藏丞殿年頭之爲御礼參上候、進上御太刀一腰・

御馬一疋、則削物ニて御寄會有、内藏丞殿同心ニ而犬

童拾兵衛殿被參候、鳥目式百疋進上、相良内藏丞殿・
犬童十兵衛殿御寄會有之、御座へ喜入大炊助・了齋被
參候、

一 喜入大炊助年頭之爲御禮被參候、御樽一荷并目籠進上、

正月九日庚戌晴

一 奥州様方被召寄ニ付而、本田源右衛門尉鹿兒嶋江被參
候事、

一 廣濟寺方年頭爲御礼、代僧被參候、修正御札并御茶進

上、御酒被給候、

一 大慈寺年頭爲御礼參上、茶一對進上、天目酒御寄會有

之、

一 中紙卷束 普門坊 一 雜紙卷束 南谷坊 一同一束

南之坊

一 御かミ様方年頭之爲御礼、本田新介被參候、中樽壹荷

・鯛三掛御進上、

一 鑄物師弓三郎參候、火掻ニツ進上、

一内小野寺年頭之御礼被申上候、瓶子二對進上、

一大汝八幡御祭之花かう進上

源太夫

一鳥目百疋進上

同源八

一又四郎殿御袋方年頭御礼使者ニ而御申候、御樽一荷・

目籠進上、御酒被賜候、

一岩下吉右衛門昆布一折進上、

一御樽一荷

常珎

一中紙老束

田口助右衛門

一本田与左衛門入道年頭之爲御禮被參候、從 竜伯様

御言傳被成候間、直ニ被聞召候事、

一肝付羈壽方年頭之御礼使ニ而被申上候、

一小水鳥二ツ進上、田中市左衛門木綿一ツ被下候、取成

南郷淡路守、

正月十日辛亥晴

一松浦法印方歳暮之爲御礼儀、使者久我九左衛門殿被差

越候、并太樽式荷・折二ツ進上、使者へ御酒御寄會有

之、御振廻有之、相伴比志嶋河内守、久我九左衛門殿

へ鳥目三百疋被遣候、使岩崎主水佐、

一下野守殿年頭之爲御禮參上候、青銅式百疋進上、削物

一不断光院年頭之御礼被參候、御茶一對進上、御汁ニ而

御酒御寄會有之、

一正興寺年頭爲御禮參上、菓子ニ而天目之清酒御寄會有

之、

一中紙老束

千藏坊

一惟新様餅田原江御狩、鷹野へ被成御出候、

一宗閑年頭爲御禮被參候、扇子式本進上被申候、并鳥目

百疋則被下候、

一竜伯様江初野之鞆五ツ御進上被成、御使有馬奉膳兵衛

尉、

一竜伯様御虫氣之様子爲可被聞召、御使川上助左衛門被

參候、

一伊勢左衛門太夫殿年頭爲御礼儀參上、青銅百疋進上、

一下総守殿年頭爲御禮參上、御樽二荷・一折進上、

一澁谷石見守殿年頭爲御礼參上、御樽一荷・一折進上、

一新納備前守殿年頭爲御礼參上、御樽一荷・一折進上、

右三人江削物ニて御三献御寄會有之、其後御食參

候、御座へ市來八左衛門、相伴了齋、

一市來八左衛門年頭被申上候、瓶子老双・目籠進上、

一みかん一折上ケ申候、

藤野御假屋

正月十一日 壬子 雨

一中紙卷束 伊地々彦右衛門入道

一中紙卷束 山本新右衛門尉

一雪窓院年頭爲御礼參上、御茶一對進上、菓子ニ而承、

酒御寄會有之、

一御樽耆荷并鱈二本 たなへや 七郎左衛門

一奈良漬桶式ッ 道与方

一御樽耆荷・鯛一掛 比志嶋彦太郎

一河内守殿内儀方年頭之爲御礼、使者ニ而御樽耆荷・鯛

一掛進上、并河内守殿御祈人さま方右使者ニ而御樽耆

荷・肴進上、

一行都罷下ニ付而、山口殿方引付之狀を持參申候、并火

はし一膳進上被申候、

一竜伯様方御使永吉半兵衛被參候、

一御虫氣然々無御座之由候事、

一昨日鶉御進上之御禮之事、

一奥州様今日國分江御越之事、

一昨夜鹿兒嶋方中途銀坂ニ而刀走候而手ヲ引切被申

候、早竟無題目処ニ、夜中之使者不入事かと被思

召候事、

一根占右近大夫殿年頭爲御礼儀參上、御樽耆荷・一折進上、吸物ニ而御酒御寄會有、

一御旧例之大般若經有之、般若寺增長院江御寄會有之、

御座へ了齋被參候、

一東郷源七郎殿方年頭爲御禮、使者を以御樽耆荷・鯛式

掛進上、

正月十二日 癸丑 晴

一龍伯様御虫氣ニ付、惟新様國分江被成御越候、 竜

伯様方爲御迎中途まで山田民部少輔被參候、

一奥州様方御使後醍醐院丞允被參候、

一談儀所方年頭爲御礼、使僧ニ而瓶子一双・目籠肴進上

候、

一北郷次郎殿方年頭之御禮使者ニ而被申上候、

一大願寺年頭之爲御礼參上、茶袋十進上、

一鴨二ツ月嶋鷲二ツ進上、 中馬大藏丞

一鳥目式百疋大山六右衛門へ被遣候事、

正月十三日 甲寅 曇

一福昌寺年頭爲御礼參上、茶一對進上、菓子ニ而天目酒

御寄會有、并御振舞有之、

一南林寺年頭之御礼ニ參上、茶一對進上、菓子ニ而天目

酒御寄會并御振舞有之、

一熊嶽寺年頭之御礼ニ參上、御茶一對進上、菓子ニ而天

目酒御寄會并御振舞有之、

一扇子式本進上、一和御振舞有之、

一奥州様方御使、國分方平田次郎左衛門被參候、

一惟新様昨日被成御越候事、

一竜伯様御氣相茂昨日之分ニ而候間、乍去今朝卯刻

方御ふるい被成候得共、纏而とり申候事、

一惟新様御宿鎌田玄幡助、宇主方御食被上候、御供衆不

殘振舞有之、

一下野守殿・鎌田玄幡助へ御食御寄會有之、

正月十四日乙卯晴

一惟新様國分方午之刻被成御歸宅候、

一越中殿江 奥州様方御使山口五郎兵衛尉被差越ニ付、

惟新様御傳書有之分、

一御狀并御太刀・馬

越中守殿

一御狀并段子式端

松井佐渡守殿へ

一御狀一包

正源院江

右東條隼人佐ニ而山口五郎兵衛尉江被遣候、

一奥州様年頭之爲御禮儀御越被成候、則奥ニ而式三献御

寄會并 奥州様江爲御祝儀御太刀并御馬一疋御進上、

一奥州様方 惟新様江御進上之事、

一御折三對

一大樽三荷

一御折二對并鯛式掛

右御供衆不殘御振舞有之、相伴了齋・新納左右衛門

入道・上井次郎左衛門・川崎九左衛門、

一蜘蛛舞ニ鳥目千疋被下候、

一寺沢志摩守殿方使者有浦二左衛門殿并書狀を以、新納

武藏入道殿死去ニ付而写之由被仰越候書狀也、御返札

本田源右衛門前方被申候、

一龍伯様江御使和田主膳正被參候、

一御氣相何程ニ御座候哉之由被仰候事、

正月十五日丙辰晴

一木幡長門守被參候、片口沓ツ・めんつう沓ツ進上被申

候、

一柁山權左衛門殿年頭之爲御礼參上、青銅式百疋進上、

削物ニて御酒御寄會有之、

一淨光明寺年頭爲御礼參上、汁ニ而御酒御寄會有之、

一嶽米良石見守殿方年頭爲御礼儀、使者ニ而御樽一荷并

一 鈴一丸進上候、

一 竜伯様方御使川畑洩右衛門被參候、

一 御虫氣ちと能御座候由被仰候事、

一 山下宗安ヨリ年頭之爲御禮、使ニ而御樽一ツ・昆布・

鯛一掛上ケ被申候、

一 奥州様御歸宅酉刻、

一 一臺江御使波多喜介被參候、

一 竜伯様今日之御氣色如何御座候哉之由被仰遣候事

正月十六日丁巳曇

一 竜伯様御氣色然々無御座ニ付、國分へ 惟新様被成御

越候、

一 日高弓左衛門年頭爲御礼參上、御樽一ツ・鯛一掛進上

被申候、

一 龍伯様方平田主水左衛門以、御氣色少能御座候通被仰

越候処ニ、於中途ニ様子被申上候、

一 竜伯様御氣色火急御座候間、 奥州様國分へ酉刻ニ御

着被成候、

一 伊東修理大夫殿方年頭之御礼儀并 竜伯様御煩之様子

爲可被聞召使札到來、使者兒嶋七左衛門殿へ御振舞有

之、鳥目式百疋被遣候、

一 琉球王位方使者進上、

一 小袖式ツ、内綾沓ツ・くゞし沓ツ、

一 せん香八把・竹心香二把使者方、

右使者へ吸物ニ而御酒御寄會有之、

一 西來院參上、鷹之大緒二筋進上候、

正月十七日戌午晴

一 竜伯様方御使飯牟禮紀伊助被參候、下野殿・比志嶋紀

伊守殿・伊勢兵部少輔殿御食御寄會有之、

正月十八日己未晴

一 奥州様方御使者國分平藏被參候、御意之趣者御直ニ被

聞召候事、

一 豊後守殿・三原諸右衛門殿へ御寄會有之、

一 下総守殿へ御寄會有之、御座へ佐多六郎兵衛・存力坊

被參候、

正月十九日庚申雨

一 竜伯様御氣色通御一臺方飯牟禮紀伊助ニて御申被成候

事、

一 佐多六郎兵衛尉・新納四郎左衛門尉・柏原將監へ御食

御寄會有之、

一 竜伯様へはり枕沓ツ進上候事、

一下野守殿・村田刑部少輔江御食御寄會有之、

正月廿日辛酉晴

一龍伯様御氣色爲可被成御覽、 惟新様御内江被成御參候、

一又四郎殿・佐多太郎殿參上被成候事、

一豊後守殿・下野守殿・北郷加賀守殿へ御食御寄會有之、

一竜伯様御煩之御祈念として正八幡江大節供上被成候、

御調新米五石五斗并鳥目拾貫文・中紙三束・薪十駄汎

殿へ渡、御使伊東九兵衛尉、

一奥州様御越被成御寄會有之、御座へ下総守殿・下野守

殿・伊勢兵部少輔殿・相良日向守被參候、

一瓶酒尅對

常珞

一御樽老荷并菓子

松田伊賀守

一瓶酒尅對

田口助右衛門尉

一鴨尅番

田方出雲守

一大樽老荷・一折

又四郎殿御袋

一瓶酒一對

岩下吉左衛門尉

一鮭尅尺

坂元三郎右衛門尉

一龍伯様申刻ニ御死去有之、

正月廿二日癸亥晴

一奥州様巳之刻ニ如鹿兒嶋御歸宅有之、

一伊東修理大夫殿へ御書被遣候、但飛脚也、

一惟新様御内江御詰被成候事、

一下野守殿・佐多六郎兵衛尉へ御食御寄會有之、御座へ

了齋・道甫被參候、

一濱田民部左衛門尉江御小袖尅ッ并衣尅ッ被下候、

正月廿三日甲子雨

一比志嶋紀伊守殿參上被成候事、

一奥州様御使有馬次右衛門被參候、御意趣直被聞召候、

一竜伯様御死去ニ付而雪窓院被成參上候、

一竜伯様御死去ニ付而根占殿御使被參候、

一龍伯様御供被申候衆、濱田民部左衛門・武彦左衛門・

赤塚吉右衛門・市來清左衛門被參候、御酒被賜候、

正月廿四日乙丑晴

一比志嶋紀伊守殿へ御食御寄會有之、御座へ了齋・道甫

被參候、

一龍伯様御供申候仲七養子懸御目、爲御祝物瓶酒式對進

上、

一御一臺御使指宿老岐守被參候、但 御意趣へ御直被

聞召候、

一瓶酒二對・食籠進上 吉井八郎右衛門尉

正月廿五日丙寅晴

一比志嶋紀伊守殿・町田勝兵衛尉・三原諸右衛門尉殿・

平田越前守殿・市來八左衛門尉・喜入大炊助殿・本田

三河守殿・鎌田玄蕃助殿御食御寄會有、

一竜伯様御供被申候衆へ御食被賜候、新納式部少輔・市

來清左衛門尉・肥後權允・武彦左衛門尉・赤塚吉右衛

門尉・濱田民部左衛門尉・吉井佐渡入道・村岡豊前守、

一瓶酒二對・食籠進上 吉田美作入道

一惟新様國分も酉刻被成御歸宅候、

正月廿六日丁卯晴

一龍伯様御死去ニ付而相良内藏助殿參上、宿許へ御使宮

原主計助被遣候、并御樽耆荷・鯛二掛被進上候、

正月廿七日戊辰雨

正月廿八日己巳雨

一去年 奥州様東國江御下向之刻、兩御所様も別而被

成御念比候御礼儀爲可有御申、伊地々掃部兵衛尉駿府

・江戸江被成上せ候、御進物之事、

一伽羅耆斤・御書

大御所様江

一伽羅耆斤

將軍様江

一御書・御太刀・唐菓子盆耆束 佐州江

一御書・御太刀・唐菓子盆一束 上州江

一御書二通・太刀・唐菓子盆一束 山口駿州江

一御書并御太刀・沈香二斤 藤堂和泉守殿江

一御書并御太刀・沈香二斤 松平隱岐守殿江

一御書并御太刀・沈香二斤 長宗我部 松平河内守殿江

一御書并卷物耆端 幽夢老江

一御書并卷物耆端 小佐手助左衛門尉殿へ

一御書并卷物耆端 さかや 内田織部佐殿へ

一御書并卷物耆端 宗可 藤本彦七へ

一御書并卷物耆端 藤本彦七へ

一御書并卷物耆端 藤本彦七へ

一御書一通 吉道丹波守へ

一今度駿府・江戸江御使被仰付、伊地々掃部介へ御小袖

耆ッ被給[□]綾、

正月廿九日庚午雨

一明後日 芳眞様御年忌有之ニ付而、妙圓寺へ御使有川

与左衛門、

一國分江御使根占喜藏被遣候、様子ハ伊集院肥前入道・

本田三河守・平田越前守・喜入大炊介・町田勝兵衛へ、

御番之儀油断被申間敷候由被仰越候、并御一臺へ御言傳有之、

正月晦日辛未雨

一國分御番衆へ御使上井神三郎被遣候、并御死骸之御前ニテ法花經讀誦之人衆へ辛勞被申由被仰越候事、

一佐多六郎兵衛尉瑞仙御見廻之由被申上候、御振舞有之、

一白坂式部少輔御見舞之由被申上候、

一竜伯様御死去ニ付而開座主坊方使僧被參候、

一新納式部少輔父子三人被參候、御酒被給候、

一鹿兒嶋へ御使圓乘坊、様子者宇治瀬之御祭之しはの由被仰越候事、

一伊集院源左衛門女中方便を以 竜伯様御死去之由被申上候、

已上

792

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲年頭佳兆、太刀一腰・馬代黄金式十兩并緞子十卷到來、
玆重候、猶本多佐渡守可述候也、

「朱力キ」
「慶長十六年」二月六日 (花押)

(秀忠)

薩广少將殿

793

「家久公御譜中」

家久領國多有大山、由是今茲蒙採 禁裏造營之材、可獻之 台命、乃使栢原周防入道有閑・土持左馬權頭盈信監此事、

板倉伊賀守勝重贈同年二月六日之書於家久曰、就今般家康公上都、雖盍國侯伯輻輳京洛、於家久以獻 御用材故免許參洛、本多正紀已先雖通是旨、且勝重承教令如斯、宜得其意云云、

794

「御文庫四拾九番箱四卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而去年御下之以後、以書狀も不申入無沙汰致□□、

自然爰元相當之御用御座候へ、可被仰下候、以上、

態令啓達候、先度本多上野介以書狀被申入候、今度 大御所様御上洛ニ何も諸大名衆御上候へ共、御手前者 禁中様御材木出申ニ付、御上御無用之由、重而我等方亦可申届旨候条、可被成其御心得候、恐惶謹言、

「朱力キ」
「慶長十六年」
二月六日

板倉伊賀守

勝重(花押)

『在官庫』

掟

一 御内之者百姓之子不可致養子事、

一 百姓物詣不可致事、付他所之祭禮ニ參、耕作をこたる

ましき事、

一 百姓惣別私之振舞仕間敷事、

一 諸侍・百姓ニ至迄、子をうミ候而殺ましき事、

一 御分國中諸百姓他國ニ相替、耕作并所務大形ニ有之間、

領主押而稠可申付事、付女共作ニ可出事、

一 諸所地頭分別を以、百姓之子御内不可取成事、

一 門屋敷ニ殿役分被附置^{〔候〕}役儀、堅可相勤事、

一 殿役追立被定置日敷之外、若其所之役人として私ニ於

召仕者、鹿兒島可致披露事、

一 諸在郷酒作へからざる事、

右條々相背輩有之者、可被處重罪者也、仍下知如件、

(北志島因良)

紀伊守

慶長十六年二月十一日

(澤山久徳)

權左衛門

『家久公御譜中』

『正文在文庫』

爲音信、硫磺三百斤到來、悦覚候、猶本多佐渡守可申候

也、

〔朱力キ〕

〔慶長十六年二月十三日〕(花押)

(秀忠)

薩广少將とのへ

『濱田民部左衛門榮林居士者武士の』ほまれならひなく、其名を天下に聞得、あけ心はんくわいかいさミをな

せしかハ、軍中にしのきをけつり、けつられし事數十

度なりしも、かれを害するかたきもなし、故ニ命をの

かれ世になからふる事七拾有七年なり、爰に

大守龍公様御逝去ならせたまふ、此事を映臨深く歎き奉

り、かなしミのあまり迷土黄泉まで供奉し申さる、予

かたはらに有て是を見、愁の袖をしほりながら、一翰

を遣ハし、疎なることの葉をつゝり侍りぬ、

爲俊

武士の名残の春のあつさ弓

君にひかるゝのちの世までも

798 世上ニ可嗜條々之事

- 一 御奉公之筋氣任申間敷事、
- 一 一身之ほとしらす利口申間敷事、
- 一 うて立上ニミやすましき事、
- 一 御役人中へそね言申間敷事、
- 一 善悪之友立見合可申事、
- 一 難成候共、第一武士道ニ可掛心事、
- 一 大酒するましき事、
- 一 傍輩入魂之筋取分申間敷事、
- 一 念比之傍輩とて内座ニ入間敷事、

二月十六日

子孫ニ書置候、

濱田民部左衛門尉入道
(經重)

799 竜伯様御歌

世の中の米と水とをのミつくし

つみしてのちハ天津大空

山口對馬

道しらす君のあとを茂見送て

乗をくれしといそきこそすれ

武彦左衛門
なからへてかゝる浮世にあふ坂の
水より清き我こゝろかな

仙朝坊

君は花をしむとすれと春風に
散てや本の根に歸るらむ

染川源之丞

入相のかねのひゞきにさそわれて

夢路をいそく明かたの雲

村岡豊前介

はらからのをくれ先たつならひ有

とは思とも別るゝハうき

濱田民部左衛門

ふたつなき命を君奉る

心のうちにすめる月哉

九月十日

800

追腹之御人數

四十六
國分衆
新納民部少輔殿

七十九
同
吉井佐渡入道殿

五十
同
山口對馬守殿

三十五
同
泉朝坊

五十二 肥後權之丞殿

同 四十四 村岡城之介殿

同 廿二 赤塚吉右衛門殿

同 三十 田尻小吉殿

清水 岡本讚岐守殿

末吉 原田佐渡守殿

同 四十 染川源之允殿

廿六 市來清左衛門殿

七十七 濱田民部少輔殿

四十八 武彦左衛門殿

二十九 新原藤左衛門殿

鹿兒島

慶長拾六年辛亥

二月廿日ノ刻ヨリ

辰ノ時迄之事也、

801 「家久公御譜中」

家久爲述職思欲赴駿武、先以使書通旨趣於本多正純、則達 家康公高聽、乃 鈞命曰、如今歲止參府、宜在國而安息、是旨正純以書報、

802 「古御文書卷十五 十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札致拜見候、仍御礼爲可被仰上、當年此地御下向可被成と思召之旨申上候処ニ、當年者御下御無用之由被 仰出、其元緩々、与御在國可被成旨、一段御懇之 御意共御

座候間、御心安可思召候、誠御珍重ニ可思召と奉察存候、恐々謹言、

「朱力キ」 本多上野介
「慶長十六年」 二月廿一日 正純(花押)

鳴津陸奥守殿

803 「家久公御譜中」

家久以領國之中所産之鷹目硫磺獻 家康公、砂石不混雜 絶勝常品、是以甚愜 公意、正純以書通其趣於山口直友、且家久今年參府 御免之事亦言之、

804 「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御札令拜見候、仍 大御所様へ鳴津陸奥守殿の薩厂之鷹目硫磺御進上被成候、則致披露候処ニ、硫磺一段勝申候由 御意被成、無殘所御仕合共ニ御座候間、御心易可思召候、將亦陸奥守殿爲御礼、當年此地御下向可被成と思召之由申上候処ニ、當年ハ御下御無用候由被仰出、緩々、与御在國可被成之旨、一段御懇之 御意共御座候間、其段可被仰入候、然而此表相替儀無御座候、此地相應之御

用等御座候へ、可蒙仰候、不可存疎意候、何も期來音之節候、不能詳候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

二月廿一日

山口駿河守様

御報

本上野介

正純(花押)

805

〔家久公御譜中〕

〔正文在琉球國國司〕

爲當春之嘉祥、預芳墨并方物數箇慥到來、令欣悅訖、抑年之先被遷玉趾於此國、遂面謁、誠千歳一逢者乎、御歸國之後其邦之諸人呈祥拜嘉之由、尤玆重々、弥庶民令案堵、球國長久之政可爲肝要者也、猶圓覚寺讓演説不能多毫、不宣恐惶、

〔朱カキ〕

〔慶長十六年〕季春初六日

少將家久(花押)

中山王

806

〔御軸物十番箱中〕 〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

追而申入候、仍本上州方先度之御報、一昨日到來候間、進上申候、當年之御上洛御無用之旨被 仰出候由、拙者

より尚以可申入之由候間、上州書狀爲御披見進上申候、

當年御在國目出度御事共候、不及申候へ共、此等之爲御礼、急度御使者御差上セ御尤存候、先書ニも如申、先度御上セ被成候硫磺勝申、一段御仕合無殘所之由、本上州方被申上セ候、是又御心安可被思召候、尚重而萬嘉可申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十六年〕

三月八日

山口駿河守

直友(花押)

嶋奥州様

參人ニ御中

807

〔雜抄〕

猶々各与中同心之衆不殘可有歸帆候、已上、

急度令啓候、其地御藏入方此中取納之儀、御辛勞ニ候、節々可申通之處ニ遠路之故、無其儀候、然ハ其地へ御檢地衆被差渡候間、定而頃日者相濟可隙明候条、迎舟として六艘申付差渡候、檢地衆へ以談合早々各事も与中之衆同前ニ可有歸帆候、此地へ着船之時、以面上可申達候、恐々謹言、

〔慶長十六年カ〕

三月十四日

三原諸右衛門尉

重種(花押)

守遠路下向之儀、神妙思食候、猶本多佐渡守可申候也、

(秀忠)

三月十七日

羽柴兵庫入道とのへ

河上彦左衛門尉殿

川越右近將監殿

野村但馬守殿

伊地知采女正殿

御宿所

比志島紀伊守
國貞(花押)

喜入攝津守
忠政(花押)

810 『雜抄』

尚以御宿本無事之由候、可易御心候、已上、

二月十八日之御狀細々令披見候、永々其許御辛勞、不及「慶長十五年琉球筆打ニ下ルモツアリ、其時ナルヘシ」

是非候、仍各可被成歸朝之由、檢地衆渡海之刻被仰渡候

キ、然者去納之殘米過分ニ在之ニ付、拂方之儀心遣之由

被仰上せ候、則御老中へ申達候、先早々被成歸朝候而可

然之由御返事候、殘米之事者其元役人へ被渡置、次第ニ

可相拂由申遣ニ而候、將又稅所弥右衛門尉殿・蒲地備中

守殿迄被遣候条書、巨細御返事兩人江申入候間、定而可

被仰越候、万々御歸國之時分可申承候、恐惶謹言、

「慶長十六年」

三月廿二日

市來八左衛門尉

家繁(花押)

伊地知采女正殿「重康」

野村但馬守殿

御報

808

「正文在琉球國加賀壽」「家久公御譜中ニ在リ」

先年自琉球池城爲遣唐使渡楫之時、爲船主被渡海、無異

儀歸朝之段、奥州様簡要被思召候、自今以往別而被抽

忠貞可有御奉公候、恐々謹言、

慶長十六年三月十五日

比志嶋紀伊守

國貞(花押)

椛山權左衛門尉

久高(花押)

加賀壽

809

「御文庫三番箱中」「義弘公御譜中ニ在リ」

爲當年祝儀、使者殊伽羅一斤到來、喜覺候、誠去年陸奥

811 「雜抄ニアリ」

一慶長十六年卯月十五日、寺沢志广守殿^レ之狀之内 大御所様去月十七日御上着、同廿七日御讓位、同廿八日秀頼様御上洛被成御對面、則晚ニ大坂御下向候、去十二日 御即位と相見得候、

812 「家久公御譜中」

同年三月六日、大御所出駿府赴洛、是因

後陽成院^{諱周仁}將讓位於

皇太子也、此事先聞于薩州、於是家久使町田勝兵衛久幸遣京師、獻幣奉賀 大御所同月十七日之上洛、

813 「御軸物十番箱中」 「家久公御譜中ニ在リ」

猶期後音之節、不能詳候、以上、

如被仰下、當春之御慶雖事旧候、猶不可有盡期候、
一竹心香三百本被下、忝奉存候、如御意珍物一入過分至極奉存候、

一大御所様去ル十七日ニ京都御上着被成、廿三日ニ御參内御座候而、一段御機嫌能、于今京都御逗留候御事候、
一御じやうい來ル廿七日と申候、 御即位來月十二日と

御沙汰ニ候、其通候ハ、大御所様頓而可被成御下國与御意候、

一先可申上を、去年駿府御下之刻ハ、種々御懇意之段、忝次第不申足候、

一今度者貴公様御上洛無御座候而、不得御意御殘多奉存候、此地拙子式ニ似合候御用御座候者、可蒙仰候、恐

惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十六年」

三月廿六日

竹中采女正
重義(花押)

家久様參

尊報人ニ御中

814 「御文庫拾七番箱十七卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

敬白天爵靈社起請文之事

一奉對 家久様從前々毛頭不奉存別心候、向後亦無相違可致御奉公候事、

一奉對 家久様存惡心之旨、不寄自他國申談事無之候、於自今以後相違申間敷候、縱謀略之儀申來候共同心不仕、有之儘ニ可致披露候事、

一龍伯様御存命之内、拙子進躰ニ付望之儀候而訴詔申上事無之候、勿論從 龍伯様モ被仰聞儀無御坐候事、

一佐土原移難成由申上候事、龍伯様御老躰之御事ニ候
条、母上洛迷惑被存ニ付、拙子も同心申候、別ニ子細
候而難澁非申儀候事、

一於拙子身上若御不審之儀可有御坐時者、御糺明所仰候
事、

右條々雖爲一事於僞申上者、

謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釈四大天王 豹尾 黃幡 歳

徳 釈迦善逝 釈提桓因 奉宿劫、四天 八天 十二天

二十大天 三十三天 十二神將 七千夜叉 廿八部第六

天魔王 聖天地之三十六會 百億須弥 百億梵天帝釈

百億鉄囲山 百億閻魔法王 諸天 百億天衆 百億天人

百億天女 百億童子 百億大力夜叉 百億惡鬼 百億天

上 百億閻浮提中所顯現之大小神祇、上者有頂天、下者到

金輪在佛神 皆悉驚白言、堅牢地神 八海所接龍王龍衆

十王十躰俱生神 太山府君 司命司祿 冥官冥衆 有情

无情 辰星 南斗 北斗星 日曜星 破軍星 羅喉星

計都星 巨文星 七曜星 八曜星 本命星 四方四佛

五方五佛 大聖摩利支天 太白神 大歳神 八請神 十

二月將神 天葬神 地葬神 阿豆智神 天神 地神 海

神 木神 火神 金神 水神 風神 諸菩薩 諸善神

東方降三世明王 南方軍荼利夜叉明王 西方大威徳夜叉

明王 北方金剛夜叉明王 中央不動明王 大黒尊天 毘

沙門天王 大弁財天女 宇賀神 十五童子 三寶荒神

多婆羅天王 武答天神 頗梨采女 蛇毒氣神王 八王子

八万四千六百五十余神 金剛界七百余尊 胎藏界五百余

尊 金剛藏王 毘地帝主 大聖剛童子 普天率土愛染明王

妙見菩薩 過去現在未來三世諸佛 一万八千軍神 二万

八千軍神 三万八千軍神 四万八千軍神 五万八千軍神

六万八千軍神 七万八千軍神 八万八千軍神 九万八千

軍神 十万八千軍神 二千八百師天童子 一万燈明佛

三万燈明佛 藥師如來 宝生如來 无量壽如來 微妙身

如來 文殊菩薩 普賢菩薩 觀音菩薩 勢至菩薩 般若

十六善神 八万四千夜叉神 忝日域崇廟天照皇太神宮四

十末社内宮 外宮 風宮 諸末社 八幡大菩薩 春日大

明神 王城鎮守山王廿一社 根本中堂本尊 立堂諸堂諸

坊中之諸本尊薩埵 祇園牛頭天王 松尾大明神 平野大

明神 吉田 立田 熱田大明神 大原大明神 稻荷大明

神 賀茂上下大明神 貴布祢大明神 北野天滿天神 三

輪大明神 住吉大明神 十羅刹七 三十番神 愛宕四所

大權現 熊野三所大權現 十二所權現 九十九所權現

廣田大明神 金峯山藏王權現 吉備宮大明神 對馬天王
 羽黒山大權現 葛城大權現 峯々藏王權現 子守勝手大
 明神 梅宮大明神 法華二十八品 三藏法師 鞍馬毘沙
 門天 吉祥天女 兩童子 開東守護神 伊豆箱根兩所
 權現 三嶋大明神 鹿嶋大明神 富士大權現 白山妙理
 權現 立山大菩薩 諏訪上下大明神 出雲大社大明神
 多賀大明神 御靈八所大明神、殊者氏神、惣者大日本國
 中六十六箇國大社 二千小社 五百九十二所大小神祇等
 地藏菩薩 陀羅尼菩薩 竜樹菩薩 虚空藏菩薩 梅檀香
 菩薩 大病神 八万四千鬼神 大恩神 歲破神 天蘇神
 大疫神 大歳神 夜氣夜叉神 妙鬼神 六百五十余神
 金山六十万鬼神 刀八毘沙門天王 父天狗 太郎房眷属
 九億四万三千四百九十余神 善貳師童子 八所大明神
 善善房 次郎房 八万四千之眷属 飯繩大明神 四十四
 万一千眷属 太天魔三万三千 小天狗三万三千眷属 智
 羅天狗 十二天狗等、日域中山々峯々嶽々所居住大天
 狗小天狗等、各作群集而正路之旨照鑑給、若偽心於在之、
 立所受白癩黒癩重病 八万四千毛孔四十二之骨節、日々
 夜々苦病無止、深厚蒙御罰、弓箭冥加盡終、佛神三宝雖作
 祈願不可叶、於後生墮八寒八熱阿鼻无間地獄、到未來永

劫不可有浮期也、仍靈社上卷起請文如件、△

慶長十六稔辛亥三月廿七日 又四郎 忠仍(花押)

伊勢兵部少輔殿

815

〔御軸物十番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

尚々爰元少も相替儀無御座候、未御在京にて御さ候、
 來月十五六日ニ駿府へ御下向と申候、いかゞ可有御
 座候哉、將又竹心香三百本被送下候、誠忝奉存候、
 何事も重而可申上候、以上、

尊書拜見忝候、如貴意去年者駿府へ被成御下、種々得御
 意忝次第不淺候、無異儀御下國之由、玆重奉存候、此地
 相替義無御座候、大御所様去六日ニ駿府を御立被成、
 同十七日御上着被成候、同廿三日 御參内被成候、秀頼
 様同廿八日ニ御上洛被成、大御所様御對面被成、御兩
 所様御機嫌不大形候、則其日ニ大坂へ御下向被成候、何
 も目出度儀与奉存候、尚期後音之時候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
慶長十六年

三月卅日

赤井豊後守

忠勝(花押)

家久様

貴報

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々今度伊勢兵部少輔差下候書狀、爲御一覽もたせ申候、被成御覽候て可返給候、

從昨日其地へ被成御越候哉、天氣能候而玆重存候、此節者何与様ニも御氣を被延候て肝要存候、然者今度之御支配之事、誠以不輕儀候、就夫雖爲少之儀、兩老中被遂細談、可然相調候様ニ可被入精之通、堅被仰出候而肝要存候、存子細御座候条、爲御心得申事候、恐々謹言、

「朱カキ」

「慶長十六年」卯月朔日

惟新(花押)

陸奥守殿

參

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札致拜見候、仍而今度就 御讓位、大御所様去月十七日御入洛被成、同廿三日御參内被成候、弥御機嫌能御座候間、御心安可思召候、猶此表相替儀無御座候、然而去年駿府御下被成、御仕合能早速江戸へ御下候而、思召儘之御仕合共御座候而、御満足思召段御尤存候、將亦其元御下國之時分ハ順風無御座候而、漸及極月御下着被成

由、海陸御苦勞共奉察候、何事無御座御下國被成由、玆重存候、大御所様近々還御可有御座候条、於駿府相應之御用等御座候者、可蒙仰候、疎略存間敷候、何も追而可申上条、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十六年」

卯月十二日

本多上野介

正純(花押)

嶋津陸奥守様

貴報

「御文庫二番箱義弘公五卷中」「義弘公御譜中正文在栗野宮越隼人親宣トアリ」

態令啓上候、爲端午之御祝儀、御帷子式ツ進入申候、誠表御祝儀迄候、將又 大御所様去月十七日御上着、同廿七日御讓位、同廿八日 秀頼様御上洛被成御對面、則晚ニ大坂御下向候、去十二日 御即位、昨日者公家衆爲御見物於御城御能、近日駿府可爲御下向旨候、西國衆いづれも從是御暇被下、罷下候様ニ可有之旨候条、近日罷下可申候間、何も在所より可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十六年」

卯月十五日

寺志广守

廣忠(花押)

惟新様

人々御中

「御文庫三番箱宝鑑中」 「家久公御譜中ニ在リ」

爰許之様躰、具町田可爲演説之間、不宣、

慶長十六年正月、家久使高崎彌六能乘獻御太刀一腰・御馬代銀百枚於 秀忠公、奉壽年首、則本多正信・大久保忠隣胥議奏達、 台顔頗欣然、諸事如常軌、家久贈朝鮮益於青山圖書助、因報復之書載後、

「十番箱御軸物中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書言上仕候、 將軍様へ御年頭之爲御使者、高崎弥六殿被成御越候、即本佐渡守・大相模守被致披露御意候、 玆重被 思食候、將亦拙者方へ高麗盆拾枚被懸御意候、 誠過分之至可申上様も無之候、爰元相替儀も無御座候、 貴様之屋敷ニも何事無御座候、委曲中務殿可被仰越候 間、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十六年」

卯月廿二日

青山圖書助

成重(花押)

鳴津奥陸守様

貴報

「古御文書中」 「家久公御譜中ニ在リ」

尚、 大御所様 秀頼様 右兵衛様 常陸様互ニ被進之候注文、惟新様へ進之候条、可被成御披見候、 一書申入候、去三月十七日 大御所様被成御入洛、同廿七日 秀頼様至淀被成御上、同廿八日早々被成御上京御

ひらうと二巻賜候、奇珍物候、

一屏風之事承候之處、久々目相煩、于今未然候故遅々候、 乍去今日染筆、町田勝兵衛(久老)ニ相渡候、

一御下國之時分に風波之由、聞及申、無心許候之處、御下着玆重候、

一龍伯之事多年申承候処、乍巡義殘多事候、

一大御所御上洛候て讓位・御即位等相濟、各含咲候、

一秀頼公御上洛候て、是又諸侍・國民迄悦入候、かしこ、

「朱カキ」 「慶長十六年」卯月廿二日

信尹(近衛)

鹿兒嶋少將殿

「家久公御譜中」

先月二十八日 秀頼卿會盟 大御所于二條亭、小林民部少輔家孝告家久、見後書、

對面、種々御入魂殘所無御座、即刻至大坂夜半時分被成

御歸城、上下万民天下太平目出度との申事ニ御座候、様

躰可被成御推量候、委御事各より可被申入候條、不能巨

細候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

卯月廿二日

小林民部少輔
家孝(花押)

羽柴陸奥守様

参人ニ御中

824
『在官庫』

〔本文書ハ八二二号文書ト同文ニノキ省略ス〕

825
〔古御文書中廿卷ノ内〕「家久公御譜中ニ在リ」

龍伯御遠行候由、不慮之儀不及是非候、今一度得御意、

和歌會興行大望候処ニ、無念之至候、則以使者可申入と

存候處ニ、休甫無用之由候而無其儀候、承候而奉驚、先

捧愚翰候、恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

卯月廿六日

雅庸

羽柴陸奥守様

人ニ御中

826
〔古御文書廿卷ノ中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

今度 大御所様就御上洛、爲御音信町田少兵衛殿被成御

差上七候、本上州申談、則令披露候、御機嫌殘所無御座

候、御心安可被思召候、去十八日被成 還御候、仍在京

中御機嫌よく御座候、大坂方 秀頼様被成御上洛、目出

度御事共候、就中御能二日御座候、常陸様御能去年御

覽候方ハ尚以出來申候、上様御満足可被成御推量候、

猶御使者へ申入候間、在増申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

五月二日

山口駿河守

直友(花押)

嶋奥州様

参御報

827
〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

就今度上洛爲祝儀、太刀一腰・馬代銀子十枚并帷子三十、

内單物十五到來、遠路懇情之至、令祝着候、猶片桐市正

可申候、謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

五月四日



〔墨印〕

薩摩少將殿

「御文庫二番箱義弘公五卷中」

一書申上候、龍伯様御遠行之儀、三月末ニ承、それ方以
使僧成共可申上と存候處ニ、何かと□□任延引仕候儀、
委細安齋へ懇ニ申入候、其元御心中之躰可申上様も無御
座候、恐惶謹言、

五月五日

宗善(花押)

惟新様

人々御中

「家久公御譜中」

「正文在伊勢兵部貞榮」

覺

一在江戸之事、

一一儀之事、

一毎度之御普請被成御赦免、忝儀幾度申上候ても難申盡
候、就其得御意候事、

一御普請奉行衆へ一禮可申置候哉之事、

一我等領分先年 大閣様御時御檢地被仰付竿相通候間、

内檢申付候事、付知行高之事、

一琉球之事、

一妹之事、付めいの事、

一唐船ニ引舟出候儀、堅法度申付候、乍去湊近參候をか
まいなく候へハ破損候間、繫おかせ可申候哉之事、

一去年從南蛮使舟候様子之事、

一離別様子之事、

〔慶長十六年〕

五月十日

家久(花押)

「家久公御譜中」

同年五月十六日、板倉伊賀守勝重返書之中曰、家久因蒙
可獻 御用材之 台命、免今茲之參勤、實是珍珍重重、
委見于後翰、

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々今度 上様御上洛ニ付而、秀頼公御出仕被成、

御仕合よく大坂へ御歸城被成、今更大坂衆も目出度
由被申候外、可有御推量候、以上、

先度者預御懇書具拜見仕候、殊更御太刀・御馬代并盆式
束被懸御意候、遠路御懇情之段、別而忝珍重奉存候、隨
而上様被成御上洛、禁中御讓位・御即位早速相濟、卯月
十八日ニ駿府へ還 御被成候、御在洛中 御機嫌能上下

大慶奉存候、將又貴様今度御材木之儀被 仰付故、御上

不被成事、先以目出度存候、御材木之様子定本上州より重

而御左右可被申候、猶御使者へ申入候条、可爲演説候、

恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

五月十六日

板倉伊賀守

勝重(花押)

嶋陸奥様

御報

832

『正文國分宮内社司澤氏藏』

眞幸院飯野之内知行目録

原田村之内玄番か原
下田七畝 七斗

寺た 宮原村之内
下田三反七畝十五步 三石

小原之脇 原た村之内
下畠三畝 壹斗八升

同所
下畠式畦十五步 壹斗

藏本 宮原村之内
下畠八畦十步 三斗三升三合三夕三才

はさわら 原た村之内
下畠老反 六斗

やしきノ前 宮原村之内
下畠老畦 四斗

合分米大豆五石三合三夕三才

慶長拾六年

五月十日

伊集院肥前入道

元巢(花押)

槽松

三右衛門尉

川瀬

新左衛門

山形

治兵衛

同人

うきめんノ

相左衛門尉

ミのはるノ

七兵へ

岩崎

對馬

833

〔家久公御譜中〕

〔正文在文庫〕

伊東作右衛門尉殿

遠路使者并太刀一腰・馬一匹・鈍子廿卷到來、喜覚候、

尚本多佐渡守可申候、謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕五月廿四日 (花押)

薩摩少將とのへ

834

〔正文在文庫〕

就年甫之佳兆、太刀一腰・馬代銀子百枚到來、歡覚候、

委曲大久保相模守可申候、謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕五月廿五日 (花押)

薩摩少將殿

835

〔御軸物拾番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

一書令啓上候、爰許相替儀無御座候、上様御機嫌能
府被成御下着候、弥々御息災之儀候、御心易可被思召候、
先度御在京之砌も、琉球方唐へ通用之儀無御油断御才覚

可被成旨、御詫候キ、琉球王ハ唐ヘ之御使者漸可爲歸

朝候条、其口上之趣被聞召届、唐ヘ重而様子被仰渡御尤存候、猶於趣ハ御年寄衆迄申入候条、可被得御意候、將亦小屏風一雙進上申候、表寸志計候、猶口上ニ申含候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長十六年〕

五月廿六日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參人ニ御中

836

〔御軸物十番箱中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

爲改年之御祝儀、御使者被成御上セ候、折節御在京之砌にて、本上州申談披露申候處、御仕合殘所無御座候、御心安可被思召候、將亦我等かたヘ爲御祝儀、御太刀一腰・御馬一疋并段子五卷・琉球酒壺送被下候、忝奉存候、尚御使者申入候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕

〔慶長十六年〕

六月二日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參貴様

837

〔家久公御譜中〕

琉王尚寧去冬還中山悔先非、於是今茲四月差使節、如舊式來文船、文船著岸山川灣、則家久先賴山口直友稟之、乃達 高聽、大御所快然曰、猶委聞琉使所說應須告稟其旨、直友齋一簡於和久氏、遙下于薩達之、既而至冬使琉使副護送士赴關東、十二月至駿府、同月十五日琉使登營、獻藥物及中山之土産、甚愜 台意、而后賜暇歸至于 慶府、

888

『在官庫』

已上

去四月十八日之御狀、六月四日來着、令拜見候、仍從琉球綾船、其御國山川ヘ着岸之由、御注進之趣則令披露候、一段 御機嫌之儀候、御心易可被思食候、猶彼使者被申様共被届聞召、様子可被仰越候、將亦あまつら御進上候、是又披露申候、三年ニ成申通申上候ヘハ、一入 御祝着ニ被思食候、何も和久甚兵衛罷上候砌、萬事可蒙仰候、猶追而可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱力カ〕

〔慶長十六年〕

六月六日

山口駿河守

直友(花押)

「家久公御譜中ニ在リ」

「御文庫二番箱義弘公五卷中」 「義弘公御譜中ニ在リ」

猶以御念入申たるしゆろほうき三本拜領、忝奉存候、

次桐之文轡一進上仕候、誠以書中之驗まで御座候、

已上、

態一書申上候、

一當春弥右衛門差下候處、下着初御懇之儀共、殊銀子な

と被遣、忝儀可申上様無御座候、

一竜伯様御遠行由承候て、驚人存候、御力落可申上様無

御座候、

一めくり野鹿毛駒一疋拜領、是又忝奉存候、乍早晚當年

之駒一入能御座候、弥右衛門かけ候て、とふも月毛の

駒も一段能罷成候、

一私事五月十七日ニ下着仕候、於上方數多馬とも見申候、

御玳敷儀も無御座候、

一最近致進上候、黒馬再仕候由、千萬不審御座候、馬た

けく御座候つる間、そうだニ相申候てくせ仕事と存儀

御座候、

一大御所様一段御そくさいニ御座候、來年者江戸御普請
由御座候、

一其表唐船着申候者いと少かい申度通申上、たニ一人差

下候へと御意ニ候間、先御尋申上候、成申儀候者三丸

程御かわせ被成可被下候、毎年上洛御供仕候故、手前

はたと草臥申ニ付而、か様之御心安儀申上御事ニ御座

候、相調申儀候者、此御返事次第重而一人差下可申候、

委細段白坂攝津介殿・二階堂采女殿迄申入候、

一最前被仰下候、びけい之手綱之儀、みゝあいよりはな

さきかけて打申、ぶちにて御座候、弥く御不審之儀御

座候者可被仰下候、恐惶謹言、

「朱カキ」

六月六日

荒木十左衛門尉

元満(花押)

進上

惟新様

参

『在琉球』 「國三司官」 「家久公御譜中ニ在リ」

今度爲使江洲渡海候間、用一輪候、仍其地之儀王位被成

歸國候刻申渡候様、諸事不可有油断候、別而西來院之儀

者日本之様子能依存之儀候、雖沙門之事情相加三司官候間、無遠慮被入精尤候、猶委細態以使者可申候間、期其節候、恐々謹言、

〔朱カ〕
〔慶長十六年〕六月九日

家久(花押)

琉球三司官

841 「御文庫拾七番箱十七卷中」

靈社上卷起請文前書之事

一奉對 家久様、太郎左衛門違目之儀被仰聞、驚入候、乍去逆心之旨別闕故候之哉、我等者努々不存候事、

一於 御家先祖以來譜代御奉公申候間、縱世上如何躰之儀出來候共、不混縁者親類、一筋ニ可致忠節心底迄候之処、伊集院専次方へ一封依在之不幸之仕合、誠迷惑不過之候、然共野心之族ニ令同心、書狀ニ而も口上にても毛頭申通候事無之候、庄内落城之後歷年月候間、定改先非御奉公可申かと存、於別条なにとなき文共ハ可在之候欵、少茂不忠之所存於我等者無御座候事、

一今度御勘氣之衆多々候之處、拙子事 貫明様被召使候以一件、稠御愛被成御赦免、剩愚息事魔府へ可被召出之由蒙仰、忝奉存候、御厚恩之段不可致忘却候、當時

雖逼塞之躰候、乍勿論無別心候条、向後弥可抽忠勤事、右之旨若於僞申上者、

〔牛王神文略〕

慶長十六年辛亥六月十六日 平田越前守 宗親(花押)

伊勢兵部少輔殿

842 「御文庫二番箱義弘公五卷中」

龍伯御遠行之儀承、驚入申候、貴老様御心中之程察存候、尤早々可申入処ニ、拙者も手前取紛儀御座候内ニ致上洛、無程煩出し申候ニ付而、乍存御無沙汰申入候、尤程近ニ御座候者罷下御見廻可申入儀ニ御座候へ共、遠路と申、殊今程病中半ニ御座候間、乍存心計にて御座候、委細者比志嶋紀伊守殿・伊勢兵部殿迄申入候、恐惶謹言、

六月廿日 羽柴左衛門大夫 正則(墨印)

羽兵庫頭様

人々御中

843 「本田助之丞藏」

一石ニ五分出銀請取之事

高七拾七石七斗五升四合四勺三分直分
十二月廿日

一鳥目貳貫二百四拾三文

六月廿五日
一銀子廿七匁七分三厘二毛一ホツ

合卅七匁三分七厘七毛

皆濟

慶長十六六月廿五日

〔印〕

青山傳左衛門尉

関玄番允

大窪仲左衛門尉

協本勝次郎殿

まいる

844 「家久公御譜中」

家久今年之上洛就獻 御用材蒙恩免旨、先月十六日板倉
勝重之書中雖粗告知、固爲窺時節、使三原諸右衛門重種、
即山口直友咨參勤之事、直友達 台聽則有今般之上京免
許之 台命、於是直友附一封之書於重種報知、重種領之
復命見左、

845 「御文庫二番箱家久公二卷中」 「家久公御譜中ニ在リ」

以上

先度以來以書狀不申上、然者貴殿様御上洛之儀、可然御

次御座候而申上候へ、遠國之御事候間、此度之御上洛

者御無用之由被 仰出、早々拙者右之旨可申上之 御

説ニ候之条、三原諸右衛門尉可有御下由申談、以書狀申

入候、中途迄被成御出舟候共、御歸國候而緩々御安座

御尤と存候、就中又四郎殿今度御下之儀申上候へ、是

又早々被成御下可然旨御意候間、其御心得可被成候、内

々之御訴詔之儀共、得 御意申候、何も追而様子可被

仰出之旨候、一段御挨拶能御座候而、御心安可被思召候、

猶御吉左右追而可申上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
慶長十六年（慶長八年）
六月廿九日

山口勘兵衛

直友（花押）

少將様

參人々御中

846 「家久公御譜中」

先是慶長十六年正月二十一日、三位法印龍伯逝、訃音達
秀忠公上聽、則 上使揖斐與右衛門尉齋御弔書及賻銀、
五百 遙來于薩州、遙 台命、家久謹拜戴之勞之饗之、青
山圖書助亦投書於比志島國貞、通慰悲沈之志於我、共見
後篇、

「御文庫拾七番箱十七卷中」

一書令啓候、然者 龍伯様御死去ニ付而、將軍様カ爲御使者夷比与右衛門被遣候、陸奥守様御心中奉察候、御次而之節可然様ニ被仰上可被下候、恐々謹言、

七月十九日

青圖書助

成重(花押)

比志嶋紀伊守様

人々中

比志嶋紀伊守様

青圖書助

カ

「家久公御譜中」

「正文在文庫在三番箱中」

龍伯死去之由、不及是非候、心中之程察思食候、因茲差

越使者候、委曲本多佐渡守可申候、謹言、

「朱力半」
「慶長十六年」七月廿一日 (秀忠)(花押)

薩广

少將殿

「御文庫四拾八番箱卷物中」

尔來御無音罷過、背本意存候、節々以書狀成共雖可得御

意候、隱遁之式御座候へハ、旁令遠慮乍存候、仍龍伯煩

被極候刻迄駒を一疋貴老へ進上申度候間、從我等引せ可致進入之由被申置候、爲首尾無然々馬にて御座候へ共、只今令進上候、猶可得尊意候、恐惶謹言、

八月九日

羽柴兵庫入道

惟新(花押)

羽柴越中守殿

參人々御中

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

以上

急度今啓上候、仍琉球ニ玆數草花在之由被爲 聞召候、

然者何ニても玆布草花御座候者、御上セ可被成候、於御

座候ハ不及申候へ共、遠路參事御座候条、かれ候ハぬや

うに被成御尤存候、右之通 御詮之由候て本三州カ被申

越候間、如此申入候、則本上州カ之書狀爲御披見進申候、

必御報ニ可預示候、尚追而可得御意候、恐惶謹言、

「朱力半」
「慶長十六年」

八月十九日

山駿河守

直友(花押)

「少將様カ」

様

參人々御中

其後者不申通候、仍龍伯遠行之已後、兩御所様委不申上候間、唯今貴老迄此者申付候、然者爲遺物、少々進物共御座候、以御心得可預御取合候、將又貴老へ脇指一腰令進覽候、誠々寸志之驗迄ニ候、恐々謹言、

八月廿六日

羽陸奥守

家久(花押)

山口駿河守殿

人々御中

「慶長十六年と張紙有之」

「家久公御譜中」

「正文在伊勢兵部貞榮」

志广守様此方爲御見廻、可被成御越由、被仰越候通則陸奥守へ申聞候、別而畏入被存候、定御兩所共可爲御供候間、以面上可得御意候、爲御迎嶋津下野守被申付候、早々御光着可目出度候、恐惶謹言、

九月二日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

比志嶋紀伊守

國貞

岡嶋次郎兵様

「家久公御譜中」

「正文在伊勢兵部貞榮」

七月廿一日之 御内書八月廿七日到來、謹頂戴仕候、抑龍伯事被及 聞召、度々書加 上意、剩爲香典銀子五百枚致拜領候、誠以忝奉存候、此等之旨宜預御披露候、恐々、

「本マ、九カ」

如月二日

本田佐渡守殿

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

爲重陽祝義、小袖五到來、悅覽候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

「朱カキ」
「慶長十六年」九月四日 (花押) (秀忠)

薩广少將殿

「全」

沖那波 けらま 与部屋 いぜな 伊恵嶋 となき嶋

栗嶋 久米 やえま 宮古島

右嶋より毎年可被相納物數之目錄

一 はセを布三千端

一 上布六千端

一 下布尅萬端

一 から苧千三百斤

一 綿三貫目

一 しゆる綱百方眞なし

但長六十ひろツ、

一 くら綱百方眞なし

但長六十尋ツ、

一 苧三千八百枚

内三百枚へ長むしろ

一 うしろの皮式百枚

以上

慶長拾六年九月拾日

三原諸右衛門尉

重種(花押)

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

町田勝兵衛尉

久幸(花押)

比志島紀伊守

國貞(花押)

桃山權左衛門尉

久高(花押)

琉球國

三司官

「此一書、家久公御譜中ニ在リ、正文在琉球國司トアリ」

856

「御軸物十番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

大御所様江爲重陽御祝儀、御服被成御進上候、如御目錄致披露候処、一段之御仕合御座候間、御心安可被思召候、御内書之儀重而相調可進之候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十六年」

九月十一日

本多上野介

正純(花押)

羽柴陸奥守殿

857

「正文在琉球國司」「家久公御譜中ニ在リ」

王位御歸國已後令無音間、以使者申候、其國御靜謐之由
弥重候、仍其許之儀諸事被入念、長久之忠貞肝要候、惣
別琉球之儀自往昔緩々爲躰故、一節被相背日本及干戈、
既王位日本江有渡揖上者、永可被相離琉國之處、我等以

懇志被成歸國事不可有忘却候、自然對日本疎意之旨於有
之者、始王子衆至諸侍迄、自三司官相理、此方江有様可

申越候、若以用捨無其沙汰、自別方於有其聞得者、三司
官欄可申理候、將又太刀一腰・馬一疋青銅五百貫宛進之候、寔

表祝儀迄候、猶使者含舌頭不詳候、恐く謹言、

慶長十六年
九月十五日

家久御判

西來院

池城

江洲

豊見城

名護

858

「家久公御譜中」

家久在國、近來不獻使節於 將軍家、由命山田民部有榮
齋方物捧 兩御所、訪問 尊體之安否、則 大樹秀忠公
怡悅之餘許謁於有榮、安藤對馬守重信報謝之趣見于書、

859

「十番箱中」

尊書忝致拜見候、如仰御歸國已來者以書狀も不申上候、
此表相替儀無御座、 上様御機嫌能被成御座候間、御滿

足可被思召候、爲御見廻御使者を以被仰上候、則 御前
へ被召出、一段之御機嫌御座候、殊爲御音信しゆちん拾

卷被懸御意候、誠以遠路被入御念候段、忝奉存候、委細
山田民部少輔方可被申上候条、不能一二候、恐惶謹言、

「朱力字」
慶長十六年」

九月十六日

安藤對馬守

重信(花押)

鳴津陸奥守様

貴報

「家久公御譜中ニ在リ」

860

掟

一 薩摩御下知之外、唐江詔物可被停止之事、

一 從往古由緒有之人たりといふ共、當時不立御用人ニ知

行被遣間敷之事、

一 女房衆江知行被遣間敷之事、

一 私之主不可頼之事、

一 諸寺家多被立置間敷之事、

一 從薩州御判形無之商人不可有許容事、

一 琉球人買取日本江渡間敷之事、

一年貢其外之公物、此中日本之奉行如置目可被致取納之

事、

一 關三司官、就別人可爲停止之事、

一 押賣押買可爲停止之事、

一 喧嘩口論可令停止之事、

一 町人百姓等ニ被定置諸役之外、無理非道之儀申懸る人

あらは、到薩州鹿兒府可被致披露事、

一 從琉球他國江商船一切被遣問敷之事、

一 日本之京判外之外不可用之事、

一 博奕僻支有問敷之事、

右條々於違犯之輩有之者、速可被處嚴科之者也、仍

下知如件、

慶長十六年辛亥九月十九日

(伊勢貞昌)

兵部少輔(花押)

(比志嶋國貞)

紀伊守(花押)

(町田久義)

勝兵衛尉(花押)

(藤山久高)

權左衛門尉(花押)

「家久公御譜中、正文在琉球國司トアリ」

「家久公御譜中」

去年家久使中山王尚寧匪害赦死、且割琉球國與之、臣從

「正文在官庫」

敬白 天罰靈社起請文之夏

共還中山、於是尚寧深感家久之仁德、奉報謝以神裁、諸
按司亦從捧神裁、自是琉王繼統之初以捧神裁爲法例、其
情炳焉乎盟書、

一 琉球之儀自往古爲 薩州島津氏之附庸、依之 太守被

讓其位之時者、嚴巖船以奉祝焉、或時々以使者・使僧

獻陋邦之方物、其禮義終無怠矣、就中 太閤秀吉公之

御時所被定置者、相附 薩州徭役諸式可相勸旨雖無其

疑、遠國之故不能相達、右之御法度多罪々、因茲球

國被破却、且復寄身於貴國上者、永止歸郷之思宛如鳥

之在籠中、然處 家久公有御哀憐、匪害遂歸郷之志、

割諸島以錫我其履、如此之御厚恩何以可奉謝之哉、永

々代々對薩州々君毛頭不可存疎意夏、

一 到子々孫々讓与此靈社起請文之草案、不可忘脚厚恩之

旨可令相傳夏、

一 所被相定之御法度曾以不可致違亂夏、

右條々僞於有之者、

▽ 敬白天罰靈社上卷起請文事

「本マ、却カ」

謹請散供再拜々、夫惟年号慶長十六年辛亥歲、月並十

二箇月、日數者三百五十餘箇日、撰吉日良辰、而致信心

請白、大施主等謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釋四大天王

豹尾 黃幡 歲德 釈迦善逝 釈提桓因 奉宿劫四天

八天 十二天 廿大天 卅三天 十二神將 七千夜叉

廿八部衆第六天魔王 聖天地之卅六會 百億須弥 百億

梵天 百億鐵跏山 百億閻魔法王 諸天 百億天衆 百

億天人 百億天女 百億童子 百億大力夜叉 百億惡鬼

百億天上 百億閻浮提中所顯現之大小神祇、上者有頂

天 下者到金輪際佛神、皆悉驚白言、堅牢地神 八海所接

龍王竜衆 十王十跡俱生神 太山府君 司命司祿 冥官

冥衆 有情無情 辰星 南斗 北斗星 日曜星 破軍星

羅喉星 計都星 巨文星 七夕星 八葉星 本命星 四

方四佛 五方五佛 大聖摩利支尊天 太白神 太歲神

八諸神 十二月將神 天葬神 地葬神 阿豆知神 天神

地神 海神 木神 火神 金神 水神 風神 諸佛諸善

薩 諸善神 東方降三世明王 南方軍荼利夜叉明王 西

方大威德明王 北方金剛夜叉明王 中央不動明王 大黒

天 毘沙門天王 大弁財天女 宇賀神 十五童子 三寶

荒神 多婆羅天王 武答天神 頗梨采女 地毒氣神王

八王子 八万四千六百五十餘神 金剛界七百餘尊 胎藏

界五百餘尊 金剛藏王 晃地帝王 大聖金剛童子 普天

率土愛染明王 妙見菩薩 過去現在未來三世諸佛 一万

八千軍神 二万八千軍神 三万八千軍神 四万八千軍神

五万八千軍神 六万八千軍神 七万八千軍神 八万八千

軍神 九万八千軍神 十万八千軍 二千八百師天童子

一万燈明佛 二万灯明佛 三万灯明佛 藥師如來 寶生

如來 无量壽佛 微妙身如來 文殊 普賢 觀音 勢至

十六善神 八万四千夜叉神、忝日域崇廟天照皇太神宮四

十末社 内宮 外宮 風宮 諸末社 八幡大菩薩 春日

大明神 王城鎮守山王廿一社 根本中堂本尊 立塔諸堂

諸坊之諸本尊薩埵 祇園牛頭天王 松尾大明神 平野大

明神 吉田 立田 熱田大明神 大原野大明神 稻荷大

明神 賀茂下上大明神 貴布祢大明神 北野天滿天神

三輪大明神 住吉大明神 卅番神 愛宕四所大權現 熊

野三所大權現 十二所權現 九十九所權現 廣田大明神

金峯山權現 吉備宮大明神 對馬天王 羽黒山大權現

葛城大權現 峯々藏王權現 子守勝手大明神 梅宮大明

神 法華廿八品 三藏法師 鞍馬毘沙門天 吉祥天女

兩寶童子 關東守護神伊豆・箱根兩所權現 三嶋大明神

鹿嶋大明神 富士大權現 白山妙理權現 立山大菩薩

諏訪上下大明神 出雲大社大明神 多賀大明神 御靈八

所大明神、殊者氏神、摠者大日本國中六十六箇國大社

二千小社 五百九十二所大小神祇等、地藏菩薩 陀羅尼

菩薩 龍樹菩薩 虚空藏菩薩 梅檀香菩薩 大病神 八

万四千鬼神 大恩神 歲破神 夜氣夜叉神 妙鬼神 六

百五十餘神 金山六十万鬼神 刀八毘沙門天王 父天狗

太郎房眷屬 九億四万三千四百九十餘神 善貳師童子

八所大明神 善害房 次郎房 八万四千眷屬 飯繩大明

神 四十四万一千眷屬 大天魔三万三千 小天狗三万三

千眷屬 智羅天狗 十二八天狗等、日域中山々峯々嶽々

所居住之大天狗 小天狗等、各作群集而正路之旨照鑑給

之、若偽心於在之、立所受白癩黒癩之重病、八万四千毛

孔、四十二之骨節、日々夜々苦病無止、深厚蒙御罰、弓矢

冥加未盡、佛神三寶雖作祈願不可叶、於後世者墮八寒、

熱阿鼻无間大地獄、到未來永却不可有浮期者也、仍靈社

上卷起請文如件、△

慶長十六年辛亥菊月

進上 羽林家久公

中山王

尚寧(花押)

『全』

敬白 天罰靈社起請文之事

一琉球之儀自往古爲 薩州之附庸之条、諸事可相隨御下

知之處、近年依致無沙汰被成破却、始國主・王子并侍

衆至迄被召寄貴邦上者、再止歸國之恩候處、 家久様

以御哀憐被爲歸國、加之過分之御知行被宛行、開喜悅

之眉候、以何如斯可奉謝御厚恩候哉、永々代々奉對薩

州之君不可奉存疎意候事、

一若球國之輩忘右之御厚恩、企惡逆者在之而、縱國主雖

爲其旨同心、唯今此起請文連署之輩者屬 薩州御幕下、

毛頭不可相隨逆心之無道候事、

一此靈社起請文之草案銘々寫置、讓与子々孫々、奉對

薩州不可致不忠之旨可令相傳候事、

右之旨若於僞申上者、

▽敬白天罰靈社上卷起請文事

謹請散供再拜々々、夫惟年号慶長十六年辛亥歲、月之並

者十二月、日之數者三百五十餘箇日、撰吉日良辰、而致

信心請白、謹奉勸請、掛忝上者梵天帝积四大天王 豹尾

黃幡 歲德 积迦善逝 积提桓因 奉宿却 四天 八天

十二天 二十大天 三十三天 十二神將 七千夜叉 二

十八部第六天魔王 聖王 天地之卅六會 百億須弥 百億梵天帝釈 百億鉄田山 百億閻魔法王 諸天 百億天衆 百億天人 百億天女 百億童子 百億大力夜叉 百億惡鬼 百億天上 百億閻浮提中所顯現之大小神祇、上者有頂天、下者到金輪際佛神、皆悉驚白言、堅牢地神 八海所接龍王竜衆 十王十駄俱生神 太山府君 司命司祿 冥官冥衆 有情无情 辰星 南斗 北斗星 日耀星 破軍星 羅睺星 計都星 巨文星 七夕星 八葉星 本命星 四方四佛 五方五佛 大聖摩利支天 大白神 大歲神 八諸神 十二月將神 天葬神 地葬神 阿豆知神 天神 地神 海神 木神 火神 金神 水神 風神 諸佛諸菩薩 諸善神 東方降三世夜叉明王 南方軍荼利夜叉明王 西方大威德夜叉明王 北方金剛夜叉明王 中央不動明王 大黒尊天 毘沙門天王 大弁財天女 宇賀神 十五童子 三寶荒神 多婆羅天王 武答天神 頗梨菜女（采） 她毒氣神王 八王子 八万四千六百五十余神 金剛界七百余尊 胎藏界五百余尊 金剛藏王 晃她帝王 大聖金剛童子 普天率土愛染明王 妙見菩薩 過去現在未來三世諸佛 一万八千軍神 二万八千軍神 三万八千軍神 四万八千軍神 五万八千軍神 六万八千軍神 七万八千

軍神 八万八千軍神 九万八千軍神 十万八千軍神 二千八百師天童子 一万燈明佛 二万燈明佛 三万燈明佛 藥師如來 宝生如來 无量壽如來 微妙神如來 文殊菩薩 普賢菩薩 觀音菩薩 勢至菩薩 般若 十六善神 八万四千夜叉神 忝日域崇廟天照皇太神宮四十末社 内宮 外宮 風宮 諸末社 八幡大菩薩 春日大明神 王城鎮守山王廿一社 根本中堂本尊 立塔諸堂諸坊之諸本尊薩埵 祇園牛頭天王 松尾大明神 平野大明神 吉田立田 熱田大明神 大原大明神（野原之） 稻荷大明神 賀茂下上大明神 貴布祢大明神 北野天滿天神 三輪大明神 住吉大明神 十羅刹七 三十番神 愛宕四所大權現 熊野三所大權現 十二所權現 九十九所權現 廣田大明神 金峯山藏王權現 吉備宮大明神 對馬天王 羽黒山大權現 葛城大權現 峯々藏王權現 子守勝手大明神 梅宮大明神 法花二十八品 三藏法師 鞍馬毘沙門天 吉祥天女 兩宝童子 関東守護神 伊豆箱根兩所權現 三嶋大明神 鹿嶋大明神 富士大權現 白山妙理權現 立山大菩薩 諏方上下大明神 出雲大社大明神 多賀大明神 御靈八所大明神、殊者、摺者大日本國中六十六箇國大社 二千小社 五百九十二所大小神祇等、地藏菩薩 陀羅尼

御奉行中

菩薩 竜樹菩薩 虚空藏菩薩 栴檀香菩薩 大病神 八
 万四千鬼神 大恩神 歳破神 天蘇神 大疫神 太歳神
 夜氣夜叉神 妙鬼神 六百五十余神 金山六十万鬼神
 刀八毘沙門天王 父天狗太郎房眷属 九億四万三千四千
 四百九十余神 善貳師童子 八所大明神 善害房 次郎
 房 八万四千之眷属 飯縄大明神 四十四万一千眷属
 大天魔三万三千 小天狗 三万三千眷属 智羅天狗 十
 二八天狗等、日域中山々峯々嶽々所居住大天狗 小天狗
 等、各作群集而正路之旨照鑑給、若偽心於在之、立所受
 白癩黒癩之重病、八万四千毛孔、四十二之骨節、日日夜
 夜苦病无止、深厚蒙御罰、弓箭冥加盡終、佛神三宝雖作
 祈願、不可叶、於後生者、墮八寒八熱阿鼻无間獄、到未
 來永劫不可有浮期者也、仍靈社上卷起請文如件、△

慶長十六年辛亥九月廿日

勝連(花押)

江曾(花押)

江洲(花押)

豊美城(花押)

池城

雲心(花押)

「此正文、御文庫十七番箱十七卷中ニ有之、引合濟、二通共家久公御
 譜中ニ在リ」

864

『飯野狗留孫山權現棟札』

奉造立狗留孫三所權現拜殿一字云々、
 大檀那藤原家久朝臣云々、大願主同人

慶長十六年辛亥九月廿二日

當座主大法印珍海

大工青木李兵衛尉

鍛冶松田四郎兵衛尉

遷宮導師白鳥山法印光儼

飯野當地頭伊集院肥前入道藤原久信

作事奉行鎌田勘兵衛尉政秀

野田帶刀充重時

865

「御文庫拾七番箱十八卷中」

只今水俣將屋并肥後へ遣候者、筑後へ遣置候者同前ニ罷
 歸候、今月二日ニ築川へ被成御着、同三日ニ高瀬へ御座
 候間、四日隈本へ御着之由申候、上使中途與ニて御座
 候、御内衆五人馬乘之由申候、明日方者爰元へ可有御着

存候条、内々其御心得尤候、此方へ御着之日限者追而可

申入候、中途者、上使御家中衆兩人御座候、被罷出相伴

被申候由候、送夫之儀者いか程入申候通未承候、京衆も

六十人餘と申候、上使遠道者無御懸之由申候、瀬高よ

りの書物相添持せ申候、爲御存候、恐惶謹言、

十月六日
三原諸右衛門尉
重種(花押)

喜入攝津守様

比志嶋紀伊守様

伊勢兵部少輔様

人々御中

866 「家久公御譜中」

今初穠唐船來著于家久之領浦、因所載來之新製之小器二

筒以使者獻 秀忠公、則頗愜 台意、故賜 台書、如左、

287 「正文在文庫」

至于其國唐船着岸付而、今燒之小壺二到來、入念候之段、

誠以喜覚候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

「木カキ」
「慶長十六年」十月八日 (秀忠)
(花押)

薩广少將殿

868 『在文庫』「家久公御譜中ニ在リ」

尚以御仕合殘所無御座候、委曲山口駿河守殿可被得

貴意候、以上、

今度其御國ニ着岸仕唐船ニ參候今燒之小壺二、進上被成

候、則達 上聞候處ニ、遠路被爲入御念之段、御祝着被

思召御内書被進候、隨而私へ唐之硯箱送被下候、爰元珎

敷御座候而、別而自愛仕御事候、猶御使者可爲言上候条、

不能詳候、恐惶謹言、

「木カキ」
「慶長十六年」
十月十二日
本多佐渡守
正信(花押)

羽柴陸奥守様
貴報

869 「家久公御譜中」

「正文在文庫」

尚以右之様子能く薩广へ可被仰入候、以上、

今春薩广へ着岸仕唐船ニ參候小壺、陸奥守殿方進上被成

候ニ付而、預示候趣致披露候處ニ、遠路被入御念候由候

て御仕合能御座候、則 御内書被遣候、右之通貴老方も

能く可被仰入候、猶薩广方之御使者可爲演說候、恐惶謹

言、

『全』

〔朱カキ〕
〔慶長十六年〕

十月十二日

山口駿河守様

御報

本多佐渡守

正信(花押)

870

『義久公御譜中』

(本文ハ八七九号記事ト同文ニノキ省略ス、但ノ日付ハ十一月十八日トアリ)

871

『飯野満足寺文書』

白鳥山御知行百四拾石之事、先年庄内御弓箭之刻、爲御寄進被付置、御公役可爲御免許之旨、御判形槌有之儀ニ候間、弥向後不可有相違候、然者以右知行社頭之御再興等懈怠有間敷候、仍證文如件、

慶長十六
十月十八日

伊勢兵部少輔
貞昌判

比志島紀伊守
國貞判

町田勝兵衛尉
久幸判

白鳥山

座主

873

『家久公御譜中』

眞幸白鳥山者 奥州様以御判形、出物被成御免許候間、彼領之高可被引除候、爲其如斯候、恐々謹言、

〔年間不詳〕

十一月三日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

市來八左衛門殿

本田伊賀守殿

御宿所

先是文祿三年 太閤秀吉公命細川幽齋文旨、檢察薩隅及日州諸縣郡之田畠山野、則其高都合五十七萬八千七百三十三石也、其内以一萬石爲公領、以六千二百石與石田治部少輔三成、以三千石與幽齋、以五十五萬九千五百三十三石安堵之朱印賜義弘、既而慶長四年義弘愷旋於朝鮮之日、五大老感其軍功、以所散在薩隅及諸縣郡中公領給地之高及寶刀等賞賜、于是薩隅一圓及諸縣郡領之、家久受繼其讓雖領之、固非膏腴之地、加舛檢校其經界、或有延縮賦斂租粟、或有輕重、故農民苦賦稅、領主亦無如軍役之資用不足何、是以家久降内檢之命、檢察薩隅及日州諸縣郡、因家老町田久幸、比志島國貞・伊勢貞昌・三原重種等書數箇條之法令、示内檢使如左、

「御文庫拾七番箱十八卷中」 「家久公御譜中ニアリ」

「口切ル」
一 喧嘩口論

一 又小者於致狼藉者、其主人ニ科可被相懸事、

一 諸在郷肝煎[□]人、田島少も不隠様可被致沙汰事、

一 諸百姓私ニ御檢地衆宿へ出入一切可爲停止事、

一 肝煎百姓等佗言取次間敷事、

一 或者雜掌、或者賄路等毛頭被請付間敷事、

一 ひいきへんば有間敷事、

□ 竿大將者其所之可爲地頭事、

一 作病并私之所用ニ隙を被入候仁候者、互ニ可被申出事、

一 はね地有間敷事、

一 諸所御城之内ハ竿を可被除事、

一 諸外城侍衆居屋敷軍役之外たるへき事、付惣五睦屋敷

ニ被相定事、

但百石より及式百石者八睦たるへき事、

一 被定置寺社之事、寺地・社地之内計竿を可被除事、

一 百姓へ非分之儀被申懸間敷事、

一 竿定之事、五間六十間たるへき事、

一 一村之位定之事、

一 斛盛之事、

一 竿之あげさげのびちゝミなきやうに念を可被入事、

一 溝越・道越・堤越之田島可被打分事、

一 竿始之次第無相違、田島共ニ可書付事、

一 次第ニ可作明田島竿を可被渡事、<sup>付別帳ニ
可被留事</sup>

一 せいらい屋敷・死苦村ハ竿を可除事、

一 竿大將主從五人、筆者二人主從四人、算用者式人主從

四人、蒔見二人主從四人、竿執式人、合主從拾九人、

一 竿持・硯持從其所可出事、

一 浦役可有沙汰事、

一 網屋・塩屋沙汰有へき事、

一 上木・上草沙汰有へき事、

一 大山野沙汰あるへき事、

一 紙墨筆從公儀可被出事、

一 御檢地衆飯米故実從公儀可被出事、

一 草薪ハ從其所可調事、

一 御檢地衆送迎從其所可仕事、

一 ともし火ハ松可爲、但從其所可調事、

一 竿執ハ其所えかるき衆中可爲事、

一 賄方主人ハ一汁二菜、内清進菜卷、一日ニ三度ツ、

引菜有間敷候、酒有間敷候、付又小者ハ一汁一菜可爲

事、但又小者八中
飯被下聞敷事、

一先年京檢地之竿体不揃、諸侍御公役親疎有之由被及

聞食召、御改之儀候之間、能々念を可被入事、

右被 仰出條々於違犯之輩有ニ者、言上可被申候、隨

其趣速可被處罪科者也、仍下知如件、

慶長拾六年拾月廿三日

三原諸右衛門 〔重徳〕
伊勢兵部少輔 〔貞昌〕 ○
比志嶋紀伊守 〔國忠〕 □
町田少兵衛 〔久老〕 □

〔墨印也〕

875

〔廿三番箱十六卷中〕

公方様江内々申上子細候処、遮而被成 上聞、別而忝被

仰出、誠以恐悅無極候、尤早々致參上、御禮雖可申上候、

先々以使者申上候、仍銀子三百枚・虎皮五枚・緋綾子拾

端致進上候、可然様御披露所仰候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長十六年〕十月廿五日

本多佐渡守殿 〔正徳〕

同上野守殿 〔正徳〕

〔家久公御譜中ニ此御案文在リ〕

876

〔家久公御譜中〕

〔正文在琉球國司〕

日本國薩摩州少將島津家久拜書于琉球國中山尚老大人殿

下、恭聞國家興廢天命之常、政教不施之、愆至于五常不

守、是亦喪邦之基也、按汝琉球自開古爲我州之屬鎮、近

歲以來荒淫無道信義、不行貢物古禮也、而不我供大位新

嗣也、而我質厚禮、而不謝累約、而不踐左右、不甘神人

共憤用、是擧兵門罪戰帆南渡、征旗一應國破君俘、此皆

汝疏之自取禍耳、非人過也、茲念 足下懦弱純善爲好臣所

陷、是以斬鄭法司而送足下歸國安民、 足下可不忘寡人

之恩、堅守舊明速差官于大明、請許船商往來通好方可以

功補過、且 足下拜關東時、 大將軍家康公發令西海道

九國之衆寇明、寡人以仁義之言說而止之、蒙許候琉球通

商議好、否則進兵未晚、此郭氏之所備知而 足下之所悚

聞也、至今入寇之兵未動及寡人力矣、寡人以文教治國內

外、臣僚皆學四書經、吏各守禮讓亦 足下之所目睹也、

足下宣奏聞明國懇從日本三事、其一、割海隅偏島一處以

通我國舟商使彼此各得无咎、其二、歲通餉船交接琉球做

日中交易爲例、其三、孰若來往通使互致幣書嘉意勤禮交

相爲美、此三者從我一事則和好兩國萬民受惠、社稷保安

長久、不然 大將軍既耀德不服、使令入寇戰船曼渡沿海
勦除陷城邑殺生、靈明之君臣能無憂乎、是則通商之興入
寇利害判若白黑正 足下之所宜急告也、惟盡言無隱免致
後禍是幸、餘不宣、

慶長十六年^{辛亥}十月二十八 在御判

877 「家久公御譜中」

「正文在門司平右衛門」

禁中御材木之事何分出來候哉、寒中辛勞想像候、弥入精
早速可相調之儀簡要候、以上、

^{〔朱力キ〕}
「慶長十六年」十一月二日 家久(花押)

^{〔有間〕}
柏原周防入道とのへ

^{〔盈傳〕}
土持左馬權頭とのへ

878 「家久公御譜中」

同年十一月十八日、家久安置修理大夫義久入道三位法印
龍伯神儀於高野山蓮金之精舎、爲薦冥福、就金剛峯寺開
眼金剛胎藏兩部曼荼羅諸尊聖衆、新造立供養三層塔婆一
基・都卒内院四十・九重塔廟一字摩尼殿、各各安置法曼
荼羅身、此外願寫妙經・回向料銀・常燈料・佛前莊嚴物

色等、且設齊席燒香散華供佛飯、僧捧祭文、使神靈入德
三身之淨利、其眞情詳在文、

879 「正文在大乘院」

敬白

奉重開眼供養、金剛胎藏兩部曼荼羅諸尊聖衆、

奉新造立供養、三層塔婆一基・都卒内院四十・九重塔

廟一字摩尼殿、各各安置法曼荼羅身、

奉頓寫妙法蓮華經一部八卷并開結二經

奉施入尊靈牌前、每日回向料物白銀一千餘兩

奉捨入嶋津一家貴賤上下之牌前、晝夜不斷燈明料物杭

粒萬有二千勝

奉寄附佛前莊嚴色物若干等

右所修善根瓢錄如斯矣、孝子陸奥守嶋津少將家久洗情
塵於本淨水、焚信香於法界爐、稽首金剛胎藏兩部界會而
言、夫五智之法帝垂拱坐月之貌、九識之心王無爲乘蓮之
相、无爲之都亭垂拱之靈臺巍々焉、堂々焉、十地不能窺
窺、三自不得齒接秘中之秘、覺中之覺也、遙瞻而勃如也、
遠望而躍如也、深矣深矣、誰稱謂之乎、然則阿遮鞞一瞬
不祥未萌何忿怒、多諫告三喝厄會未見何降伏、只是容有

災過之用心、未然解脫之勝計者歟、至如八供之天女與雲海於妙供四波之定妃、受適悅於自樂法外也、自然也、自然之所感何有造作乎、伏惟 前修理大夫入道龍伯尊儀者、爲吾嶋津氏之令嗣、利澤施于人、名聲昭于時、仍一家之孫枝附門戶於其顯、滿園之子葉任榮枯於其濕者也、以故雖權益權威益威、上和下睦國豐人安、厭榮耀造次於之、事陰逸顯沛於之、遂乃委家督吾老父惟新、覓來報彼大善知識撥霜鬢染衣杖木叉蹈道、崇以佛德瞻以神威矣、豈畧卒而啓手忽焉、啓足如手、舟於伊陀移竿於蜜多、吁如予也守此國也、膺今也最雖嚴父之顧命務本也、豈非 尊靈之恩賜乎、恩山高而不堪荷負則憂鬻背之無力、德海深而不測極底則悲馬口之不盡矣、縱然生前有祝萬歲之壽算、沒後不祈三身之妙相、精魂無依奈弔祭何日薄星廻期齊奄臨、謹以慶長第十六歲次辛亥仲冬十八日就金剛峯寺、聊以設齊席燒香散華供佛飯僧佛陀、即除闇遍明之如來恣照生死長夜、僧伽是密符單傳之淨侶、恒事凡聖加持、加持者往來爲加不散爲持云云、看天天衆弊料來臨寒月表雲出、所以往來涉入爲加也、地祇刷衣集會梅花樹雪見、所以攝而不散爲地也、觀景趣自然知感應揭焉、伏願淑靈因此良緣、橋巖八難之河化、生八德之蓮、掃洒三界之火宅、入

德三身之淨刹、乃至沙界平等拔濟、敬白、

慶長十六年十一月十八日陸奧守嶋津少將家久

880

「權山久高譜中」

「正文在權山源三郎久清」

（本文書ハ五二〇号文書ト同文ニノキ省略ス）

881

『雜抄』

覺

鹿兒島武村知行三石永代ニ賣渡候、代錢九貫文内六貫文者七月三日ニ請取申候、三貫文ハ今日請取候、合九貫文
 髓ニ請取申候、爲後日墨付如此也、

慶長十六年十一月廿四日

新納善兵衛(花押)

大山稻介殿

882

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

寒天之時分檢地可爲辛勞候、涯分可入念事簡要候、尚從奉行中可被申候也、

〔朱カキ〕
慶長十六年十二月十六日

家久 ○〔御墨印〕

883

〔全御譜中〕

家久爲龍伯遺物、長光腰刀・左文字脇刀于 家康公、定
家色紙・葉茶壺・來國次刀于 秀忠公、以使者奉獻之、
則 大樹公賜 台書、本多正純亦有回答之書、

884

〔正文在文庫二番箱家久公
二卷中ニ在リ〕

以上

貴札致拜見候、仍 大御所様、龍伯御遠行付而、爲御遺
物長光御腰物并左文字御脇指御上被成候、懇ニ致披露候
処、御仕合共御座候間、御心安可思召候、委細者御使者
可爲演說候条、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
慶長十六年

十二月十八日

本多上野介

正純(花押)

鳴津陸奥守様

885

〔在官庫〕

爲龍伯遺物、定家色紙・來國次刀・葉茶壺三種到來、得
其意候、念之入候段無是非候、猶本多佐渡守可申候、謹

言、

〔慶長十六年〕

十二月廿六日 秀忠(花押)

薩摩少將殿

886

〔家久公御譜中〕

上使揖斐氏東歸之後、家久以一簡謝遠來、則彼亦就伊勢
貞昌有報謝之書、

887

〔御文庫拾七番箱十八卷中〕 〔家久公御譜中ニ在リ〕

以上

十月二日之尊書、今月廿七日ニ到來、寔以過分至極奉存
候、如御意今度罷下種々御馳走之段、書中難申上候、罷
歸委達 上聞候、是又可被思召御心安候、尚來春御下國
之節可申上候、是等之趣宜預御披露候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
慶長十六年

極月廿八日

揖斐与右衛門尉

政景(花押)

伊勢兵部少輔殿

御披露

〔表紙〕

義弘公	慶長十七年
家久公	
後 編 舊記雜錄 卷六十七	

888

〔古御文書廿一卷通トス之内〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

別紙申入候、仍旧冬者龍伯様爲御遺物、我等式まで御刀
沓腰被懸御意、忝奉存候、委細者此御使者申入候間、書
中不具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

正月廿日

山口駿河守

直友(花押)

鳴奥州様
(家久)

參入ニ御中

889

〔古御文書廿一卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊書拜見、忝奉存候、然者 禁中御材木之儀、早々相調
御上被成候儀、爰元へ參着次第、各々御奉行衆ニ被爲請
取候様可申候、其段御心易可被思召候、殊ニ食籠一・唐
碗・折敷十人前被懸御意候、忝拜領仕候、猶爰元相當御
用御座候者、可被仰付候、委細御上洛之節可申上候、恐
惶頓首、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

二月朔日

中井大和守

正清(花押)

羽柴陸奥守様

尊報

890

〔國分宮内澤氏藏〕

正宮 御田之指出し之事

一九段分ニ

五斗式舛蒔

慶長十七年二月九日

澤永温判

891

〔義弘公御譜中〕

答琉球國王書

別來忽忽換一寒暑、徒竭遠望而已、多歎多歎、恭聞錦旋之後匪甯安一國公族、至於島嶼小民各得其所矣、寔雖爲天幸、惟家久公德化之所及也、祇今圓覺東堂爲正遣使、遙渡大洋、一封書音・數箇珍贖逐一所拜受也、自今以往國泰民安長久之計貽厥孫謀者、在 尚寧王之存誠矣、誓勿忘在莒^キ之時可也、恐懼不宣、

藤氏惟新

慶長十七年壬子三月二十日

拜復 中山尚寧王 閣下

「正文在琉球國司」「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一 琉球江當分被罷居奉行之内一人、來年迄召留度由候へ共、先く可爲歸國之事、

一 其元より納物色々にて、上納之儀難成之由候、少く者云相調、其外難成物者、算用次第何色にても可有上納之事、

一 於琉球諸賣買御法度之儀、以高札申定候之事、

一 從琉球表渡唐船之時、銀子相隠指遣者於在之者、其地

之者へ不及申、日本人之事茂能く被遂糺明、此方へ可被申越之事、

一 其國より渡唐船歸國之節分一其儀、其方次第可被申付候事、

一 日本人於其地方く寄宿之儀可爲停止之通、制札差遣候之事、

一 米積船之儀者其方より如承候申渡候事、

一 浦添侘之儀者追而此方より可被仰遣候之事、

一 謝納居家其外一跡之事、其元ニ分在之者何と様にも可被申付候事、

一 高麗人被指遣候之事、

一 其地之女從 関東御用之由候間、五人程先く可被差渡候、但十二歳より十九歳までの女可被遣候事、已上、

〔朱少平〕

〔慶長十七年〕

三月廿二日

三原諸右衛門尉

重種(花押)

伊勢兵部少輔

貞昌(花押)

比志嶋紀伊守

國貞(花押)

町田勝兵衛尉

久幸(花押)

三司官

893

「家久公御譜中」

去年中秋因 大御所命、可獻球國之草花之旨、山口直友贈書簡、故家久今茲求異花於球國之一封投中山王、

894

「正文在琉球國司文庫」「家久公御譜中ニ在リ」

態呈一輪候、從 將軍樣其國へ在之花之可付草木、可致進上之由被 仰出候、於様子者細々自此方奉行中三司官へ可申達之間、無油断様被仰渡尤候、恐惶頓首、

「朱カキ」

「慶長十七年」

卯月二日

鳴津陸奥守

家久(花押)

中山王

玉床下

895

「御文庫ニ番箱義弘公五卷中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

改年之御慶雖事旧候、玆重奉存候、然者奥州様江御祝儀爲可申入、以使者申入候、就其萬端一ツ書を以申入候、被聞召届、奥州様御熟談尤奉存候、并鎌田加賀方御一ツ書ニテ蒙仰儀、具承届候、右如申、本上州具申入候、先以御心安可被思召候、上州内存懇ニ被申越候間、其趣口上ニ申含進候、過御分別間敷候、書中ニハ委細不被申候

条、駒澤忠左衛門得御意可申候、將又是式御座候へ共、

諸白柳并鮒之鮪式桶進入申候、表寸志計候、猶後首之節可得貴意候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十七年」

卯月二日

山口駿河守

直友(花押)

惟新様

人之御中

896

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

自陸奥守所以使申入候間、令啓上候、仍連々御取合を以陸奥守事心安致在國、上意忝儀幾度申候而も難申尽候、弥不被思召捨、可被添御心事、老躰是而已存計候、將又當國燒之かたつきニツ進覽候、御用ニ者罷立間敷候へ共、遠國物之儀ニ候間、爲御慰之ニもやと存如此候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十七年」

五月十日

御使

伊兵少

本多佐州老

人之御中

897

「全御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍簿」

從陸奥守所以使者申入候間、令啓上候、貴邊御無事ニ御座候哉、此方相替儀無之候、仍愚老事被思召出、每便御狀色々御音信共、誠々御芳情難申盡候、如此御礼切々可申述之處、隱遁之躰候故、乍存押移候、次陸奥守身上ニ付而被添御心儀、幾度申候ても有餘事候、弥可被成御退屈諸事御指南奉頼候、猶口上ニ申含候間不詳候、恐惶謹言、

猶以かたつき三・水さし一進覽候、御用ニハ罷立ま

しく候へとも、當國燒之物ニ而候間、任寸意候、

「朱カキ」
「慶長十七年」五月十日

御使同

本多上州老

人々御中

898

「全御譜中」

「全上」

從陸奥守所就御用之儀、伊勢兵部少輔進候間、用一書候、於様子ハ口上ニ可相達候間被聞召届、本佐州老・上州老へ被仰談、御入魂所仰候、連々被添御心儀乍不始儀、別而頼存候、次かたつきニ進覽候、此比切々御數寄出申之

由承及、極田舍物之儀候間、却而御慰ニやと存如此候、

委細兵部へ申含候間、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」五月十日

御使同

山口駿州老

人々御中

899

「全御譜中」

「全上」

久不能書信、積蓄此事候、尤切々以書狀成共、其元御立柄之様可承候處、隱遁之躰弥致老屈、何方へも不申通候故、無沙汰罷成候、雖無題目候、今度從陸奥守所以使者申候間、用一行候、將又當國燒之かたつき卷令進入候、御用ニハ罷立間敷候へとも、遠國物之儀候間、御慰ニもやと存如此候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」五月十日

御使同

立花左近將監殿

人々御中

900

「家久公御譜中」「伊集院氏元集譜中ニ在リ」

「寫正文在伊集院十右衛門忠覺」

先年於方々之弓箭因勵軍功、惟新様御感狀之趣、名譽

902

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

無比類候、至子々孫々不相替可抽忠貞旨、可被申讓夏可爲喜悅候也、謹言、

慶長十七年

五月十日

家久(花押)

伊集院肥前入道殿

「肥前守元巢ハ元和二年丙辰九月四日死、年七十三トアリ、考ニ供ス」

901

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

誠改年之御慶重疊、猶以不可有際限候、多幸々々、爲此等之儀、諸白柳并緇之緇二桶送給候、遠方迄之御心付一入畏入存候、仍而今度以御使者、条々御懇ニ被仰下儀、別而忝存候、於委細者伊勢兵部少輔可申達之条、書中不具候、恐惶謹言、

「朱かき」
「慶長十七年」

五月十一日

使者

駒澤仲左衛門尉殿

山口駿河守殿

御報

904

「古御文書廿一卷中」
「家久公御譜中ニ在リ」

如尊意之遙不能音問、積鬱存候處、玆書并琉球酒壺壹被

誠改年之御慶重疊、猶以不可有盡期候、爲此等之儀御使札、殊御太刀一腰・馬一疋并帷子三ツ、内單物二、被懸御意候、誠幾久可申承給与、別而畏存候、然者近日可有御上洛之由、御辛勞之儀共候、委細御使者へ申候間、不具候、恐惶謹言、

「朱かき」
「慶長十七年」

五月十二日

秋月長門守殿

御報

903

「義弘御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

態令啓候、仍先之使ニ如申候、玆敷墨跡はり出し申候、就夫一卜被差越候而可給由申候、然者一文字ニ可成絹ニはたと事被闕申候、其許於有之者一卜參候はん刻、一幅分之一文字持せ候て給度候、頼入候、恐々謹言、

「慶長十七年」

五月廿日

陸奥守殿

まじる

懸御意候、寔以從思召遠路御懇厚之段、忝賞味仕候、仍

我等も自旧冬江戸・駿府ニ逗留仕、近來令上着候、然者

兩御所様御機嫌能御息災ニ被成御座候条、御心易可被思

召候、隨而 禁中御材木之儀被仰付、早速被爲差上由、

尤玆重奉存候、併御苦勞与奉察候、猶期後音之時候条、

不能詳候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

六月四日

鳴津陸奥守様

貴報

板倉伊賀守

勝重〔花押〕

〔御文庫拾七番箱十八卷中〕「家久公御譜中ニ在リ」

起請文前書事

一 國分御上様へ我々親子進退之儀ニ付、御内談申上儀無御座候、勿論從國分茂被仰儀無之候事、

一 菊袈裟事、國分御上様御養子ニ罷成由風聞仕候哉、努

々不寄存儀候之条、國分又何方へも不致御内談候、於

自今以後茂此等之企申間敷候之事、

一 何篇 奥州様御爲ニ可惡儀ヲ存企間敷候、自然世上於

取沙汰も承付儀候者、早々可申上候事、

右之旨若於僞申者、

天爵靈社上卷起請文事

▽ 謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釈四天王 豹尾 黃幡 歳

德 釈迦善逝 釈提桓因 奉宿劫、四天 八天 十二

天 廿大天 三十三天 十二神將 七千夜叉 二十八

部第六天魔王 聖天地野三十六禽 百億須弥 百億梵

天帝釈 百億鉄困山 百億閻魔法王 諸天 百億天衆

百億天人 百億天女 百億童子 百億大力夜叉 百億

惡鬼 百億天上 百億閻浮提中所現之大小神祇、上者

有頂天、下者到金輪在佛神 皆悉驚白言、堅牢地神

八海所接龍王竜衆 十王神跡 俱生神 太山府君 司

命司祿冥官衆 有情無情辰星 南斗北斗星 月耀星

破軍將羅喉星 計都星 巨文星 七曜星 八曜星 本

命星 四方四佛 五方五佛 大聖摩利支天 太白神

大歳神 八將神 十二月將神 天葬神 地葬神 阿豆

智神 天神 地神 海神 木神 火神 金神 水神

風神 諸神 諸菩薩 諸善神 東方降三世夜叉明王

南方軍荼利夜叉明王 西方大威德夜叉明王 北方金剛

夜叉明王 中央大聖不動明王 大黒尊天 毘沙門天王

大弁財天女 宇賀神 十五童子 三寶荒神 多婆羅天

王 武答天神 頗梨菜女蛇毒氣神王 八王子 八万四

千六百五十余神 金剛界七百余尊 胎藏界五百余尊
 金剛藏王毘地帝王 大聖金剛童子 普天率土愛染明王
 妙見菩薩 過去現在未來三世諸佛 一万八千軍神 二
 万八千軍神 三万八千軍神 四万八千軍神 五万八千
 軍神 六万八千軍神 七万八千軍神 八万八千軍神
 九万八千軍神 十万八千軍神 一千八百師天童子 一
 万燈明佛 二万燈明佛 三万燈明佛 藥師如來 宝性
 如來 無量壽如來 微妙身如來 文殊菩薩 普賢菩薩
 觀世音菩薩 大勢至菩薩 大般若十六善神 八万四千
 夜叉神、忝日域崇廟天照皇太神宮 四十末社 内宮
 外宮 風宮 諸末社 八幡大菩薩 春日大明神 王城
 鎮守山王二十一社 根本中堂本尊 立堂諸堂諸坊中之
 諸本尊薩埵 祇園牛頭天王 松尾大明神 平野大明神
 吉田 立田 熱田大明神 大原大明神 稻荷大明神
 賀茂上下大明神 貴布祢大明神 北野天滿天神 三輪
 大明神 住吉大明神 十羅刹女卅番神 愛宕山四所大
 權現 熊野三所大權現 十二所權現 九十九所權現
 廣田大明神 金峯山藏王權現 子守勝手大明神 梅宮
 大明神 法華二十八品 三藏法師 鞍馬毘沙門天 吉
 祥天女 兩宝童子 関東守護神 伊豆・箱根兩所權現

三嶋大明神 鹿嶋大明神 富士大權現 白山妙理權現
 立山大菩薩 諏訪上下大明神 出雪大社大明神 多賀
 大明神 御靈八所大明神、殊者氏神、惣者大日本國中
 六十六ヶ國大社 二千小社 五百九十二所大小神祇等
 地藏菩薩 陀羅尼菩薩 竜樹菩薩 虚空藏菩薩 旃檀
 香菩薩 大病神 八万四千鬼神 大恩神 歲破神 天
 蘇神 大疫神 大歳神 現氣神 妙鬼神 六百五十余
 神 金山六十万鬼神 刀八毘沙門天王 父天狗太郎房
 眷屬 九万億四万三千四百九十余神 善貳師童子 八
 所大明神 善客房(考) 次郎房 八万四千眷屬 飯綱大明
 神 四十四万一千眷屬 大天魔三万三千 小天狗三万
 三千眷屬 智羅天狗 十二天狗等、日域中山々峯々
 嶽々所居住大天狗 小天狗等、各作群集而正路旨照鑑
 給、若偽心於在、立所受白癩黒癩重病 八万四千毛孔
 四十二骨節、日々夜々苦病无止、深厚蒙御罰、弓箭冥
 加盡終、佛神三宝雖作所願不可叶、於後生墮八寒八熱
 阿鼻无间地獄、到未來永劫不可有浮期者也、仍靈社上
 卷起請文如件、△

慶長十七年壬子六月十六日

又四郎

「血判也」

忠仍(花押)

きくけさ「血判」

比志嶋紀伊守殿

〔國貞〕
「忠仍ハ守右衛門尉彰久ノ子相模守久倍初名、忠仍ノ母ハ義久ノ二女也」

906

「御文庫拾七番箱十八卷申」「家久公御譜中ニ在リ」

覚

錦袋ニ入
一御景圖 二ツ

一兵書 二ツ

一本尊繪 卷ツ

一羽形之日記卷ツ

右鹿兒嶋へ被召上候、

已上

慶長十七年壬子六月十七日

町田勝兵衛尉

久幸(花押)

堀内日向守殿

田部四郎左衛門尉殿

參

907

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

誠當春之御祝儀、猶更不可有盡期候、玆重々、爲此等之儀御使札、殊御太刀一腰・御馬一疋被懸御意候、幾久可得貴意と一入忝存候、猶重疊可得御意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
「慶長十七年」

六月廿二日

御使者

浦上与三右衛門殿

羽柴左衛門太夫殿

御報

908

「全上」

「全上」

不存寄候処、爲御音信御帷子拾之内拾貳、淺黄之大縮・縞子・黒どし織之單物并枝柿千入之箱一ツ・熨斗三千本入之箱一ツ被懸御意候、誠遠方迄之御懇情、別而忝奉存候、然者當暮ニハ関東へ爲越年可被成御下御覚悟候哉、扱々御苦勞之儀共申も中々愚ニ御座候、猶御使者へ申入候間、不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
「慶長十七年」

六月廿二日

御使

浦上与三右衛門殿

羽柴左衛門太夫殿

御報

909

「全上」

「全上」

御上浴以後自是社御無音罷過候処、預御懇書本望不少候、東國御無事之由、目出度奉存候、此方も相替儀無御座候、然者大名衆之屋形普請被入御念候哉、是又御知せ畏存候、其元御隙明次第頓而可爲御下向之由候条、万端期其節候、恐惶謹言、

〔朱力半〕
〔慶長十七年〕

六月廿二日

使者(次之)

大童新三郎

相良左兵衛佐殿
(長徳)

御報

910

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

態令啓入候、然者 竜山様御遠行之由傳承、笑止千万無申計候、御家門様御愁傷奉察候、隠遁之乍身躰此由爲可申上、捧愚翰候、仍爲香典銀子五枚令進覽候、此等之趣宜預御披露候、恐々謹言、

〔朱力半〕
〔慶長十七年〕

六月廿五日

進藤三郎左衛門尉殿

911

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

不寄存候處、遠方迄之御使札一入本望不少候、節々以書狀成共雖可得御意候、隠遁之式ニ而御座候へハ、旁令遠慮御無音之至、迷惑仕候、猶御使者へ申入候条、不能祥候、恐惶謹言、

〔朱力半〕
〔慶長十七年〕

七月四日

小澤殿使

田代加右衛門

牟礼殿使

筒井惣兵衛尉

小澤瀬兵衛尉殿同案文

牟礼郷右衛門尉殿

御返報

912

「家久公御譜中」

去年家久奉 台命、入斧斤之手於領内之山中、所撰伐之禁裏造営之材頃日至大坂運漕、至總計之材木到著之時、可分附請取之各所、是匠頭之所演説也、宜早皆以可運漕、且琉國之花木先到著、胥議山口直友、炎暑之節暫留伏見、乘秋涼之時可獻駿府旨、見板倉勝重書、

「古御文書中廿一卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而申候、禁中御材木大坂迄爲御上候由承候、中井大和守書立之積參候者、面々へ割付早速可相渡、大工頭申条不殘御急被仰付御上せ可被成候、何篇此表御用之儀不可存疎意候、將亦伊勢兵部殿駿府へ御通之時分御上候御音信忝存候、兵部殿御下候時分具可申入候、以上、

先度者琉球^カ參候植木共駿府へ被遣候付、御上札具拜見申候、於爰許山駿州致相談候、今比炎天之時分候間、急指越候儀も如何与存候間、能々念を入暫伏見ニ留置候而、少涼敷成候而駿府へ可差越与存事候、はや痛候て色替候も有之由候、能時分相測自是相届可申候、於様子者山口駿河守方^カ近々可被申越候条、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」
七月八日
鳴津陸奥守様
御報

板倉伊賀守
勝重(花押)

「義弘公御譜中」
「案文帳寫在伊地知軍彌」

態令啓入候、仍當年も御山へ壺共上せ申候處、如早晚被

召置^{召乙}珍重存候、然者時分罷成候間、爲可被下一人申付候、此使ニ無吳儀可渡給事頼存候、猶期後音不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」
七月廿五日

愛宕山
長床坊
御同宿中

御使
鯨嶋与右衛門尉

「全上」
「全上」

道甫罷下刻細々示給令披見、本望之至候、先以御無事之由、珍重存候、老躰儀も同前ニ候、一茶わん二・茶せん被送越候、于今不始御芳情畏入候、一風炉下預候、御手前之御事闕候はんニ一入畏存候、是にて數寄出可申候、

「本マ、」
一先度上せ申候、肩衝焼立分能候由候而、古織公被召置之由令満足候、

一今度焼せ申候肩衝四上せ申候、若御氣ニ入候者可被召置候、歸齋・徳乘など御所望之由、道甫申候、其内かんに入道具於在之者、可被相留之由可被仰傳候、

一肩衝一上せ申候、是者焼立分替申候間、如何候へん哉、様子承度候間、細々御書付候而可被差下候、

一唐船爲商賣銀子被差下候、雖然當年者唐船着岸無之候、乍去小船一艘着津候へ共、長谷川左兵衛佐殿以御下知被仰付候間、此方より之かまひ無之候、然間商賣不罷成仕合ニ候、就其銀子之始末之儀、本田源右衛門尉方可申上候、爲御心得候、猶此使可申入候条、令省略候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕七月廿五日

御使同

宗善老

人々御中

916

〔全上〕

道甫罷下刻示給、本望存候、

一當年も宇治へ被相越、茶之儀別而被入精之由、乍早晩令祝着候、夏切色味等能覚申候、頼敷存事候、一愛宕へ上せ置候壺共、貴所才覚候而可下預之旨、是又畏存候、然者さいりやうとして上別府千左衛門尉与申者差上候、彼者一圓不案内之者候間、能々被申聞御下

頼入候、猶期來音候、恐々謹言、
〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕七月廿五日
御使同

917

〔全上〕

道与
御宿所

道甫罷下刻預珍書、本望存候、殊蘇香圓一器・香雪散百服・懸袋五送給候、御懇情畏存候、亭徳院事者別而申承候処、不慮之仕合無是非次第候、頓而此元燒御所望之由承候間、肩衝一・葉茶壺一・水指一令進入之候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

尚々焼物共とても御用ニ立間敷候へ共、任有合進入之候、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕七月廿五日

御使同

正因老

御報

918

〔全上〕

雖無題目候、任御床敷令啓入候、仍喜入攝津守罷下刻、

御懇書并諸白樽二荷被懸御意候、思召寄之御懇情難申謝

候、幾度申候而も先年高麗以來之御懇于今少も忘却不仕

候、誠節々以書狀成共御見廻可申入候処、隱遁之儀候へ

ハ、乍存旁御無沙汰而已候、哀々今一度懸御目、相積儀

共申承度念望天山ニ存候、猶期後音不能詳候、恐惶謹言、

追而山太郎右殿事去年死去之由、努々不承候而不申

入候、別而申承候処、御いたはしき儀とも無是非次

第候、

〔朱かき〕
〔慶長十七年〕七月廿五日

御使同

片桐主膳正殿

人々御中

919

〔全上〕

〔全上〕

態用一書候、仍道甫差上候刻、有樂様へ四方盆進上申候

處、御意ニ入申候由、令満足候、將又先年貴所下向之節、

従有樂様利休作之茶杓被懸御意候、則貴所上洛之砌御礼

爲申上与存居候処、今度道甫罷下御礼不申由承候而、誠

老耄故失念之至迷惑仕候、自然出合も於有之者、可然様

御取合頼入候、然者彼茶杓隨分致秘藏、従 大閤様拜領

之小壺ニ相添、一種道具ニ仕置候、猶期後音不能詳候、

恐々謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕七月廿五日

御使同

道与
御宿所

920

〔全上〕

〔全上〕

到本田源右衛門尉之御狀遂披見申候、仍関東へ被成御參

上、御前之御仕合能御下向、先以目出度存候、然者此元

へ御見廻之由候而、はや天草迄御越候由、就中先爰元へ

可被成御越之通、一入畏存候、奉待存候、余者期貴面候、

可得御意候、恐惶謹言、

猶々被成下着無程御出船、誠以御きもいり申も中々

愚候、

〔朱かき〕
〔慶長十七年〕七月廿五日

飛脚

寺澤志摩守殿

御報

921

〔三番箱室鑑中〕

東求院殿就遠行、爲香典銀子廿枚被贈越候、海陸數里之

御篤志、難謝次第候、態不具候、かしこ、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕七月廿六日

信尹

鹿兒嶋少將殿

〔家久公御譜中ニ在リ〕

922

〔義弘公御譜中〕

〔案文帳寫在伊地知軍彌〕

御札令拜見候、先以江戸御仕合能駿府迄御上之由、目出度存事候、此等之様子遮而遠方迄被仰越、畏入存候、定而駿府 御目見得も早々相濟、可爲御下國之条、旁期其節不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十七年〕七月廿八日

飛脚

相良左兵衛佐殿

御報

923

〔家久公御譜中〕

慶長十七年秋七月、家久欲無疎闊之情、乃使伊勢兵部少輔貞昌如駿府及江都、貞昌先到駿府、則就本多正純獻國幣・伽羅二斤半・沈香十斤・緋綾子二十端於于 大御所遙國命、則因 台許貞昌遂拜謁、貞昌以家久書授正純、

924

〔正文在文庫〕

且以舌頭達家久意趣、既而賜暖、八月初直至武都、即本多正信獻國幣・處皮二枚・天鵝絨二十卷・縮緬二十端於秀忠公、且貞昌以家久書呈正信說曰、家久感荷 兩御所之鴻恩未曾亡却、欲奉謝有餘、以故惶惶恐恐而 上言、吾已雖及不惑年未有嗣子、願賜 國若君以爲島津家嗣、先年於駿府密談貴翁、于今回答無聞、早報好事是所覲也、尚見時宜調達、憑翁之外無他、正信熟聞焉曰、先是直所依託之事今以無遺亡、至冬十月 大御所爲放鷹將來臨江府、俟 御父子一會之節、同可達 台聽及回答、慶長十五年家久來于江府之時、養嗣之事雖及 台聽、家久未老人必有男子、若無之則一族之中使任其器者相續、大樹無領諾、此旨告知了、且於 大樹暖乞之節、御口自亦宣件旨、今以 上意無忘、徒淹留自曠日月先不如還國、此旨告家久、同月八日授回書、貞昌應其意發武都到駿府、則正純亦同十七日授返翰、共帶之歸廳府復命、事審于正信父子之答簡、

爲使者差越伊勢兵部少輔候、殊虎皮二枚并天鵝^(絨)二十卷・塵綿廿端到來候、遠境之處被入念之段、実悅覚候、委

曲本多佐渡守可申候、謹言、

〔米力手〕

〔慶長十七年〕八月朔日

〔秀忠也〕
〔花押〕

薩广少將殿

〔義弘御譜中〕

〔案文帳寫在伊地知軍彌〕

唐津傳之芳札鎚相届披見、本望之至候、

一 佐伯右衛門尉下向之刻、春山之月毛たいしやく進入
申候處、御氣入候由、先以満足存候、

一 我等立置候春山野四歳之駒星栗毛早馬之由、須广七左
衛門尉・弥右衛門尉被申候哉、我等も別而秘藏仕候處、
今度陸奥守於鹿兒嶋馬揃被仕候、愚老も致見物候へと
被申候条、彼馬ニ乘申罷出候、如形之早馬ニ而、何も
乗ならひ候馬共六七騎も乗とをし申候、然処自陸奥守
をし取ニあひ申候、傳承候へハ陸奥守殊外秘藏被仕、
則其日居所ちかく馬屋をこしらへ候て立をかれたる
と申候、併馬ハ足之出るも入も乗手ニよる事候条、此
わけ如何可在之哉与存事候、

一 春山野黒月毛三歳之駒、是も今度馬揃ニ二三騎もぬけ
とをり申候、殊先日十五里程乗候へ共、聊くつおれ不

申候、定而以來者乘能可罷成致与存候、吾等駒之中ニ
別而秘藏申候、然處此度寺澤志广守殿爰元与風爲見舞
御越候条、進入申候、自然彼馬後日者其邊ニて被成御
覽事も可在之候、

一 如承唐船之事者當國へハ從 公儀不被成御着候、此比
小船二艘着岸申候へ共、是も長谷川左兵衛佐殿下知に
て商賣可在之由候間、此方自由ニ罷成候、せめて貴
邊へハ如此唐物など之儀成共、致才覚御馳走可申物を
と殘多存事候、

一 嗅犬之事、此方へも然々之犬無之候、とても御用ニ立
間敷存候つれ共、先任被仰進入申候處、御氣入申候由、
遮而御礼御慇懃之至候、

一 老躰事、今日之暮をも不期躰にてなからへ申候間、と
ても懸御目申承儀ハ在之間敷候、乍去今一度遂面上、
乗方以下之儀御物語申承度念願計候、猶期後音不具候、
恐惶謹言、

〔米力手〕
〔慶長十七年〕八月二日

寺澤殿御越之時傳書

荒木十左衛門尉殿

御報

〔全御譜中〕

〔正文在伊作衆池上源左衛門〕

態啓上候、今日眞幸表罷通候、伺公を以可得貴意處ニ、
路次草臥故直ニ歸山申候、上方弥御靜謐候、爲御存知候、
先以申上候、去月廿八日之御返書於中途拜見候、益々御
達者之由承、大慶至極ニ奉存候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

八月三日

相良左兵衛佑

頼房(花押)

惟新様

人々御中

〔義弘公御譜中〕

〔案文帳寫在伊地知軍彌〕

預御札令披見、本望之至候、先以上方御隙被召明、早々
御下向之旨玆重存候、昨日眞幸表被成御通之由、不存候
而以書狀も不申入、御殘多存事候、猶自是可得御意候、
恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

八月四日

飛脚

相良左兵衛佐殿

御報

〔義弘公御譜中〕

〔案文帳寫在伊地知軍彌〕

態令啓候、仍先度被成御下向之由、從眞幸預御狀候、誠
以御懇志之至候、御通之由承付候者、自是社可申入之処
ニ、御報ニ罷成迷惑仕候、定而江戸・駿府 御前之御仕
合能可爲御下向と、御満足奉察候、此等之通旁爲可申入、
先々企飛札候、余者期後首候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

八月六日

相良左兵衛佐殿

人々御中

〔全上〕

〔全上〕

先度者左兵衛佐殿御下向之由、從眞幸表預御狀候、畏存
候、定而江戸・駿府 御前之御仕合能可爲御下向与、玆
重存候、貴所満足之通察存候、此由旁爲可申入企一書候、
余者重而可申達候条、不能詳候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

八月六日

相良内藏助殿

御宿所

「雜抄」

條々、

一 一季居之事、堅被停止之上者、侍之儀者勿論、中間・小者に至迄、於拘留者速可被處罪科事、
 一 伴天連門徒御制禁也、若有違背之族者、忽不可遁其科事、

一 手負之事、不依上下疵付候もの在之者、他所を手負來に付而者、其所に則留置注交名、急度可有言上、若於隱置者可被處嚴科事、

一 たはこ吸事被禁断早、然上者賣買之者迄も於見付輩者、双方の家財を可被下也、若又於路次見付に付而者、たはこ并賣主を所に押置可言上、則付たる馬荷物已下改出すものに可被下事、

附於何地もたはこ作るへからざる事、

一 牛を殺す事御禁制也、自然殺すものには一切不可賣事、

右之趣御領内江急度可被相觸候、此旨被仰出者也、仍執達如件、

慶長十七年八月六日

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

昨日川上喜左衛門尉を以、貴所爰元へ何比可有御越哉之由被仰越候、一段祝着之至候、然者可被成御越時分之儀、來十五夜正八幡宮大祭礼、爰元より相調候、ケ様成ニハ我等かまひ無之儀ニ候へ共、十五夜迄ハ風時分ニて海上も心遣ニ存候、彼御祭礼過候而被成御越、心靜ニ御のなと御座候はんかと存事候、將又寺澤志广守殿事機嫌能被成御立候由、満足ニ存候、殊貴所引出物等時宜可然相調候通承付候、是又珍重ニ候、尤喜左衛門尉ニて可申入候へ共、乘馬ニ付爰元へ召留候條、能企一書候、追々可申候、恐々謹言、

「朱力キ」

「慶長十七年」八月七日

陸奥守殿

まいる

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

自是社無音罷過候処、兩度之御使札長入候、誠 兩御所様御前之仕合能、早々御歸國珍重存候、右之様子先爲可申述、從是も用飛札候、將又陸奥守江戸屋敷普請留主番

之者共早取付申躰候由、巨細示給得其意存候、然者貴所留守中、自陸奥守使者を以兩度御見廻被申候由、御礼被仰越候、別而御懇勸之儀共候、仍諸白二樽被懸御意候、是又御念比之至候、猶御使可有演說候条、不具候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

八月八日 使者 大童軍七

相良左兵衛佐殿 御報

933 「正文在御文庫二番箱家久公二卷中」家久公御譜中ニ在リ

就御用之儀ニ、爲御使者伊勢兵部少輔殿御越被成候、御口上之通一々奉得其意候、仍未御子様無御座候付而、御養子之事被仰下候、先年御下向之時分も被仰聞候間、今以無忘却候、重而兵部少輔殿ニ被仰下候趣、弥其旨奉存候、大御所様十月時分ハ御下向可被成候条、將軍様御一所ニ奉得 上意、様子山口殿迄啓上可仕之段、伊勢兵部少輔殿并山口殿方之御使者ニ申合候、御下向之時分迄ハ兵部少輔殿逗留如何ニ奉存候間、先御歸宅可然之由申談候、爰元之様躰、委曲兵部少輔殿可爲言上候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔片カキナリ〕
〔慶長十七年〕(元和元年)

八月八日

羽柴陸奥守様

貴報

本多佐渡守 正信(花押)

934 「古御文書中在廿一卷」家久公御譜中ニ在リ

以上

將軍様江爲御音信虎皮二枚・ひろうと式十端・ひちりめん廿卷進上被成候趣披露仕候處、遠路被爲入御念候段、御祝着之旨 御内書被進候、就中私へ沈香十斤・御帷子廿之内單物拾・唐之硯一面・同香合卷ツ送被下候、忝拜領仕候、尚兵部少輔殿可被仰上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

八月八日

羽柴陸奥守様

貴報

本多佐渡守 正信(花押)

935 「古御文書中廿一卷」家久公御譜中ニ在リ

以上

貴札忝令拜見候、仍而 公方様江伊勢兵部少輔殿以被仰上候、殊拙者式迄被成御音信、ちりめん三卷并御帷子十内單物五被懸御意候、誠遠路之處被思召出、御懇意之段

「全上」

寺澤志广守殿
〔正成〕
人々御中

八月十三日
〔朱力半〕
〔慶長十七年〕
右之御使從鹿兒嶋山田
民部少輔御言傳被成候、

「義弘公御譜中」
「案文帳寫在伊地知軍彌」
先度被成下着、無程追付爰元へ御見廻、一人御懇切不淺
次第、過當至極ニ候、殊更上方之様子共細々御物語承、
満足仕候、必以一人御礼雖可申述候、隠遁之事情之間、
先以令傳達候、猶期後音候、恐惶謹言、

鳴津陸奥守様

八月十日

〔朱力半〕
〔慶長十七年〕

酒井雅樂頭
忠世(花押)

忝奉存候、如被仰下候、去春 將軍様駿府へ被爲 成、
兩御所様御機嫌殘所無御座候条、御心安可被思召候、隨
而貴様可被成御參府處、 禁中御材木就被仰付、可爲御
在國之由 御詮之旨奉得御意、御書面之通具申上候、猶
期後音時候条、不能詳候、恐惶謹言、

鳴津陸奥守様
貴報

八月十七日
〔朱力半〕
〔慶長十七年〕
本多上野介
正純(花押)

貴札致拜見候、仍今度爲御使者伊勢兵部少殿御越被成候、
然者 大御所様へ伽羅式斤半・沈香拾斤并ひりん寸廿端
御進上被成候、致披露候處、即兵部少 御前被召出、無
殘所御仕合ニ御座候間、御心安可被思召候、猶遠路被入
御念候通、我等かたが相意得可申入旨ニ御座候、將又於
江戸一段之御仕合ニ御座候之由、從佐渡守方被申越候、
於其地御満足可被思召と奉察存候、何も此表相替儀無御
座候、委細者兵部少殿可爲演說候条、不能一二候、恐惶
謹言、

「古御文書中廿一卷」
「家久公御譜中ニ在リ」

寺沢志广守殿
人々御中

追而令啓候、仍此茶入頃燒せ申候間、爲可懸御目令進之
候、猶御好之様子承候へ、重而可申付候、恐惶謹言、
〔朱力半〕
〔慶長十七年〕八月十五日

939 「御文庫拾七番箱十八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

尊書拜見辱奉存候、仍去比者 將軍様當地 御成、兩御所様御機嫌共にて御座候間、御心安可被思召候、然者爲御見廻伊勢兵部殿以被仰上候、當地にては 御前へ被召出、殘所無之御仕合、於江戶も御仕合之由ニ御座候、是又御心安可被思召候、然者拙者式迄爲御音信、御帷子拾内單物五・ひちりめん三端被下候、誠慮分忝次第、可預御取成候、恐々謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

八月十七日

安藤帶刀

直次(花押)

伊勢兵部〔本マ、〕輔殿

940 「御文庫二番箱家久公二卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

貴札致拜見候、仍今度就御用之儀、伊勢兵部少殿御越被成候、御口上之通何も奉得其旨候、然而未御子様無御座付而、御養子之儀被仰越候、即右之通兵部少殿江戶御下、佐渡守様子被仰聞候処ニ、大御所様來十月時分爲御鷹野、江戶へ可被爲成御下向候間、其節兩 御所様御一所ニ而可奉得 上意之旨、佐渡守かた方御返事ニ被申入候

由ニ候、將又兵部殿其迄御逗留之儀、いかゞニ御座候付而、先々御上ニ候、猶此方之儀、於拙者毛頭如在存間敷候間、御心安可思召候、委細之段者兵部少殿可被仰上候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

八月十七日

本多上野介

正純(花押)

嶋津陸奥守様

貴報

941 「在御文庫二番箱他家文書卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

御札令拜見候、仍而今度嶋津陸奥守殿爲御使者、伊勢兵部殿御越被成候付而、御手前々御案内者一人被指添、御越被成候、然者爰元於駿府御仕合能御座候て、即江戶へ御下、於彼地も一段之御仕合共之由、佐渡守かた方被申越候間、御心安可思召候、猶此表相替儀無御座候、爰元相應御用御座候者可蒙仰候、不可存疎意候、委細兵部殿可被仰候間、不能一二候、恐惶謹言、

〔朱力キ〕
〔慶長十七年〕

八月十七日

本上野介

正純(花押)

山口駿河守様

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

其後久不申通、御無音心外之至候、然者先度者一段見事之御馬送給候、隨分泌藏ニ斜候、此等之御礼早々可申入之処、何致与取紛申後、誠背本意候、將又其元珎敷到來共御座候ハ、可預御知せ事所仰候、指儀雖無御座候、爲御音問企飛札候、余者期後音候、恐惶謹言、

猶々輕微ニ御座候へ共見來候儘、白さたう五十斤・

黒さたう七十斤并琉球酒壺一ツ進入申候、誠書音之

驗計候、

「朱カキ」

「慶長十七年」

八月廿日

使者

後藤拾兵衛尉

伊東修理太夫殿

人々御中

「御文庫拾七番箱十八卷中」「家久公御譜中ニ在リ」

覚

一ふつさう花沓本一桶ニ入、立枝あまたあり、

一さんたん花四本三桶ニ入、立枝あまたあり、

一せんねんさう一もと一桶ニ入、立莖あまたあり、

一あたん二本二桶ニ入、また枝少々、

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

「此一書年間知レス、前ノ慶長十七年六月十七日付ノ覚書ニ添候モノカ、龍伯公御逝去後國分御屋形より御受取之品ならん、右覚書ニ鹿兒嶋へ被召上トアルヲ以テ考察セラル、此ニ載テ考ヲ竣ツ」

一からすの花三もと一桶ニ入、立莖あまたあり、

一しろゆり根三十一桶ニ入、

一よなふ木沓本一桶ニ入、立莖あまたあり、

已上七種

「朱カキ」

「慶長十七年」八月廿日

八月廿四日

使者

太田采女正殿

御札令披見候、仍今度御上洛、御前之御仕合無殘所早々御下着之由、珎重存候、然処追付預使節、殊御太刀一腰・御馬一疋并御樽一荷・烏賊廿連被懸御意候、誠遠方迄之御懇情畏入存候、如承御親父別而爲申承事候間、可有演説候条、不能^(譯)祥候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「慶長十七年」

五嶋淡路守殿

御報

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

其後自是社可申入処ニ、遮而預御使札畏存候、先札ニ如申入候、江戸・駿府御仕合無殘所早々御下向之段、玆重存候、殊内藏助殿被差越、上方之様子共念比ニ承、満足之至ニ候、猶内藏助殿可有演說候条、不能詳候、

猶々於中途内藏助殿へ伊勢兵部少輔致參会、上方之様子とも細々承届可罷通之条、大慶存候、然者願成寺ニ鹿兒嶋方被得御意儀共、自是御吉左右可申越候、

玆重々々、

「朱かき」
「慶長十七年」八月廿七日

相良左兵衛佐殿

御報

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

懇令啓候、仍先度者被成御越申承、祝着之至候、併爲何御會尺も無之、殘多との申事候、然者先日承候喚之儀、此方一圓鹿りすぎ由申候間、鹿ニ可被合せ事不存候へ共、喚時分之儀候間、於御越者必待可申候、余者期參會之時

不詳候、恐々謹言、

猶々鷹之儀頼存之由申候々、次第ニ時分ニ罷成候条、

弥頼入計候、

「朱かき」
「慶長十七年」九月二日

又四郎殿

「古御文書中在廿一卷」家久公御譜中ニ在リ

猶々爰許上方(マカ)すぐ御用之儀御座候者、御心易可被仰付候、何様御上洛之刻、萬事可得尊意候、以上、

尊書拜見忝奉存候、然者 禁中様御材木早速ニ被仰付候故、爰許御作事悉出來仕、 兩御所様より度々 御機嫌能被 仰下候間、御心易可被思召候、拙者も一兩日中に駿府へ罷下申候間、御材木急度被仰付候通、 兩御所様御前へ具可申上候、殊段子拾卷被懸御意、忝拜領仕候、委細者御使者へ口上申含候、恐惶謹言、

「朱かき」
「慶長十七年」

九月三日

羽柴陸奥守様

尊報

中井大和守

正清(花押)

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

先度者被成御越候処ニ、乍早晚爲何風情も無御座無調法之至、于今御殘多存計候、爲御礼遮而御使者畏入存候、并爲重陽之御祝儀、御小袖一重被懸御意候、誠々御懇切之至、畏悦不少候、猶須广七左衛門殿へ申候間、不能詳候、恐惶謹言、

猶々壁土廿俵送給候、爰元不自由之処、一入満足仕候、

「朱カキ」
「慶長十七年」九月六日

寺澤志广守殿

御報

949

「薩州家系圖」

忠清弟忠榮之子

久基

初久盛 鎌菊 彌市郎 美作守 民部少輔

慶長十七年壬子九月八日誕生、母入來院又六重時女、

忠榮依無世子爲猶子、實入來院伯耆守重國子也、

950

「古御文書中在廿一卷」
「家久公御譜中ニ在リ」

以上

尊翰拜誦、畏悦之至候、殊ニ帷子五之内單一、御悃之儀候、兵部少輔殿早々下向候故、蹴鞠張行不仕候、御殘多仕合候、爰許鞠節々相催候、御嚙耳申入候、將亦鞠一顆・葛布拾端令進献候、何様追而可申伸候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」重陽

（飛鳥井）
雅庸

鳴津陸奥守様

人々御中

951

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

御下向以後以使者御見廻可申入之処、手前何欵与取紛、御無音心外之至候、然処先度者内藏助殿被差越、畏存候、左候へハ内藏助殿又々急ニ上洛之由候間、爲見廻若輩之使差越申候間、指儀無御座候へ共、用一行候、猶期後音不能祥候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」九月十日

相良左兵衛佐殿

人々御中

952

「全上」

954

「全上」

雖無題目候、須广七左衛門尉殿被相越候ニ付、幸使与存令傳達候、仍遙々不能向顔、御床敷旦夕御噂耳申出計候、

追而燒物師之事、今度被差越爰元ニテ燒物仕、一段与見事ニ出來申、満足仕候、猶巨細者須广七左衛門尉殿可有演説候、恐惶謹言、

九月十一日

寺沢志广守殿

人々御中

953

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

相良内藏助殿

御宿所

態令啓候、仍先度者被成下着、無程早々預御見廻、誠以御懇切之至一入畏存候、然如又々急ニ上落之由、御苦勞之段申も中々愚ニ候、此等之見廻爲可申入、若輩之使申付候、猶用口上候、恐々謹言、

猶々乍輕微段子三端進入申候、誠補寸志計候、

「朱カキ」
「慶長十七年」九月十日

955

「全上」

老躰事于今存命在之儀候、哀々今一度遂參會、相積儀共申承度念望天山ニ存候、然者有人之説ニ、強馬を乗候ハ手綱をつよくつめ、轡越奥之齒を引越、成程手綱を詰候而乗候由承候、御存知之様馬之口脇ふかくきれ申候ハ、轡をのつから齒ニあたる馬在之事候間、強引申候ハ、引こし可申候哉、又口脇あさく候ハ、おくの齒を引越可申事如何可在之候哉、然間右手手綱之詰様何程ニ詰申候哉、是ハ貴所へ相傳不申儀候、我等未強馬ニ不乘試候之条、善惡を難弁候、爰元之衆寄特成由申者も在之と聞得候、右之手綱殊外秘傳と聞得候条、御他言ハ努々有間敷候、御分別之通後便ニ密ニ書付候而可給候、頼存候、猶期來音候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」九月十一日

荒木十左衛門尉殿

御宿所

態令啓候、然者修理殿事頃御遠行之由承付候、扱々不思議之子細与驚存計候、平生別而爲申承事候条、咲止共中々可申様無御座候、貴老御愁傷奉察候、仍乍輕微銀三枚

進入申候、誠香典之驗計候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕九月十二日 從鹿兒嶋御使米良縫殿助へ
御傳書

中河内膳正殿

人々御中

956 「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

不存寄候処、使札并御太刀一腰・御馬一疋・御小袖五被懸御意候、遠方之御懇情一入畏存候、殊於御國被成打せ候刀二ツ送給候、誠以見事成儀共申も愚ニ候、隨分秘藏可仕候、將又到陸奥守向後不相替可預御入魂事所希候、

猶御使者可有演說候之条、不能祥候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕九月廿七日

鍋嶋信濃守殿

御報

957 「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

此比者不申通無音之至候、仍貴所相傳之馬書預持せ畏存候、近比乍慮外書写仕候而、馬書二卷返進申候、儘可被成御請取候、然者貴所上洛之打立何比にて御座候哉、是

又御返事ニ細々可示給候、猶期下向之時不具候、恐々謹

言、
〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕十月二日

相良内藏助殿

御宿所

958 「全上」

其後者遙久不申通所存之外候、其地相替儀無御座候哉、老躰事も于今存命在之事ニ候、然者毎年近比無心之雖申事候、數寄屋疊之表三帖・大目一座分・同替表一枚との表一枚此等之分爲可申請、飛脚差上候条、下給候ハ、可爲本望候、仍乍輕薄毛氈三枚・琉球酒壺一ツ令進覽之候、聊御音信之驗計候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

十月二日

御使

大窪主税助

廣嶋少將様

人々御中

959 「本田助之丞藏文書」

請取申老奴出銀之事

高七十四斛七斗五升四合分

外ニ三石殿役分

閏十月七日

一銀子七十三匁六分

一同老奴一分五リ四毛

合七十四匁七分五リ四毛者皆濟也、

慶長十七年

後十月九日

日高藤右衛門尉(花押)

五代舎人助(花押)

脇本少次郎殿

960 「義弘公御譜中」

「正文」

已上

從古織肩衝之儀付而、一人被指下之由候て預御狀、委細令拜見候、然者數十沓御上せ被成候肩衝、何も不可然之由候て可被返由候之間、定而可爲參着候、其内方拙子方へも沓ッ可被下之由候へ共、右之通候条、無是非候、和久甚兵衛指下申候間、具書中認申候、万端被届聞召尤ニ存候、此方御用之儀御座候者、可被仰越候、猶後音之時可申伸候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」

十月十一日

山駿河守

直友(花押)

鳴兵入様

御報

961 「義弘公御譜中」

「正文」

猶々御馬之つめ打づち沓ッ進上仕候、 存寄迄如此御座候、爰元御用等御座候者可被仰付候、以上、其以來者不得御意候、切々可申上処、何角御無沙汰ニ罷成候、隨而奥州様來春御上洛可被成御遠慮之由被仰付而、態以使者被申入候、其元可爲御満足と奉存候、駿河守も今月廿日ニ駿府へ被罷下候、拙子儀伏見ニ御用も御座候ハんかと御申被召置候条、若御用之儀御座候者、御國へ成共被召寄御用可被仰付之由被申候条、無御隔心何時成共可被仰聞候、何共來春ハ罷下、彼是可得尊意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」

十月十四日

和久甚兵衛

(花押)

惟新様

參人ニ御中

962 「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍痛」

御札令拜見、先以本望之至候、仍各御替之御人衆被成御
下向候付、可爲御上洛之由候哉、其表御逗留中節々以書
狀成共雖可得御意候、隱遁之式候へハ還而如何与、乍存
御無沙汰背本意存候、爰元之様子 御前可然様可預御取
成事所仰候、猶期後喜候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕十月十五日

牟礼郷右衛門尉殿

小澤瀬兵衛尉殿

御報

「北郷忠能譜中」

慶長十七年壬子十月十五日、忠能發都城赴武州江戸、拜
謁 大樹秀忠公、拜領御馬、

「在御文庫二番箱他家文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以右之御茶入二此御使者渡進之候、以上、

御札令拜見候、仍 大御所様鳴津陸奥守殿方唐之今燒之
御座候而、御茶入二御進上被成候、尤可致披露候得共、
不可然御進物候間披露不致候条、其通御心得可被成候、

然而今度至薩厂浦唐船着岸致候へ共、長崎方奉行被付置

候付而、陸奥守殿方御構不被成候由、蒙仰候、存其旨候、
然者爰元相替儀無之候、何ニ而も御用ニ候者可蒙仰候、
疎意存間敷候、猶期後音之節不能詳候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

十月廿日

本多上野介

正純(花押)

山口駿河守様

御報

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍痛」

先度者御懇書并諸白樽二荷送給候、乍不始儀遠方迄被思
召寄儀一入畏存候、然者老躰事于今存命在之事情、今一
度懸御目、高麗以來積儀共咄申度心緒天山ニ候、誠無題
目候へ共得幸便候条、御床敷之儘用愚翰候、余者期後音
候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕十月廿九日

片桐主膳正殿

人々御中

「義弘公御譜中」

「案文帳寫在伊地知軍彌」

先度者不存候処、御使札殊種々被懸御意、一入御懇志之至畏存候、必以一人雖御礼可申入候、蟄居之事候間乍存候、然者自陸奥守使者を被差越候条、令傳達候、仍雖無見立候、馬一疋并琉球折敷十枚令進覽候、誠補音問計候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

閏十月初日

かこ嶋御使者御傳書

鎌田左京亮殿

鍋嶋信濃守殿

人々御中

967

〔全上〕

〔正文在東郷二右衛門〕

爾來絕信操履如何、傳聞有鼠竊狗盜之類、法席者未知是否、千里之外思之無措令也、有的便雖輕少之至、贈以銀葉壹拾兩、聊以充禦寒之具而已、笑留爲幸、餘無可言者、恐懼不一、

〔朱カキ〕

〔慶長十七年〕閏十月初二

惟新(花押)

〔上包〕

仙岳房

床下

惟新

968

「家久公御譜中」

「正文在文庫」

以上

別紙ニ申入候、可然硫磺貳百斤程御上候而可然之由、從上州被申越候、是又上州書狀爲御披見進候、無御由斷進上尤存候、上様御鷹野へ去晦日ニ関東へ御下向之由申來候、弥御息災ニ御座候、これ又御心易可被思召候、此方御用之儀御座候へ、可蒙仰候、猶追而可得貴意候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

閏十月二日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參人々御中

969

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々去八月廿日之御狀、初十月廿三日ニ參着申候、則駿府へ板伊州申談差下申候、御心安可被思召候、尚追而可得御意候、以上、

重而琉球方着岸候草花御上せ被成候、則板伊州令相談、急度駿府へ差下可申候、板伊州も右之通御報被申入之由候、御使へ相渡申候、又先度御上せ候三丹花・仏桑花差

下申候、一段御機嫌之由、本上州を被申越候、彼書中爲

御披見進申候、御仕合之由口上ニも被申越候条、我等迄

満足ニ存候、先度御上候内かれかり候をハ我等方ニお

き候てよくそだち候ハ、來春分可然之由、板伊州任吳

見候、今度御上せ被成候草木次飛脚を以注進申候、上州

可有披露候之間、其返事ニ急度差下可申候、御心安可

被思召候、先度伊兵少歸國之御具申入候条、早々御報申

上候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十七年〕

閏十月二日

山口駿河守

直友(花押)

奥州様

參貴報

970

〔義弘公御譜中〕

〔案文帳寫在伊地知軍藏〕

先度伊勢兵部少輔罷下付而、御芳札殊口上之趣細々承届

候、誠不始御懇志一入畏悦不少候、然者かたつき御所望

之由承候間、然々無御座候へ共三ツ進入申候、幾度も於

御用者可被仰越候、進上可申候、余者期後音不能詳候、

恐惶謹言、

〔朱カキ〕

〔慶長十七年〕後十月三日

山口駿河守殿

人々御中

971

〔全上〕

鯨嶋与右衛門尉罷下付、御懇札本望之至候、殊茶碗二

・皿十被懸御意、度々御音信別而畏存候、

一 貴老事、頃者一段御息災御座候由、大慶存候、哀存命

中ニふと御下向も候へかし、積儀申承度念望迄ニ候、

一 當年頼入候尾崎之茶、色味能御座候、別而被入御念

候故与存事候、就夫代物取替之由畏入候、

一 今度釜一ツ上申候、餘口ひろく御座候間、五分計よせ

させ申度候、但御分別を以可然様頼存候、代物者先御

取替候而可給候、追而上せ可申候、

一 かたつき上せ可申之由承候、此比申付申候、無然々候

へ共、先爲可懸御目數七ツ上せ申候、此内かんにん道

具於在之者、いくつなり共被召置候者可爲本望候、一

其元方々はなやかなる數寄可有御覽与御浦山數存候、

吾等事老屈故、弥數寄も罷成躰候、乍去別成所作も

無之候へハ、心慰ニ仕日を送迄候、猶本田新介申合候、

恐惶謹言、

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

「朱カキ」慶長十七年「後十月三日」

宗善老

人々御中

「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々茶入式ツノ内老ツ我等預リ申候、今令ッ箱ニ入御使へ相渡申候、此方御用之儀御座候者可蒙仰候、以上、

先度被成御上せ候、唐之今焼之茶入御進上候、本佐州父子が拙者かたへの返狀爲御披見進候、大御所様へハ無披露由、本上州が被申越候、貳ツ之壺我等かたまで被越候、式ツ内老ツ我等預申候、但御用ニ候者重而可蒙仰候、則返進可申候、様子之儀者本上州書中ニ御座候間、不及申上候、江戸・駿府相替儀無御座候、御心寄可被思召候、尚後音之節可得責意候、恐惶謹言、

「朱カキ」慶長十七年

閏十月十二日

山口駿河守

直友(花押)

奥(州)

參御報

尚々當年者御作事無比類候、御満足可被成候、別而早出來申候而御手柄之由、佐渡守殿ハ一段御満足ニ被思召候而、上様へも切々之被仰上候、委細貴面之節可申上候間令略候、追而大栗三十令進らん候、委細者加賀守可被申上候、以上、

好便之条一書啓入候、仍而當春者節々御音信誠々辱奉存候、然者御手前御作事天下ニ出來申候而、兩御所様一段御褒美被成候、閏十月十二日ニ御所様御鷹野ニ江戸へ御着被成候折節、御門外ヲ御通被成候而御覽、見事成由御誼被成候、其様子兩奉行衆可被御耳立候、其外大名小名事之外褒美仕候、愚老式迄も満足至極候、明春者目出度御下向候而御覽可被成候、本佐州様も一段ニ御満足候由被仰事候、御作事付而兩奉行へも色々御懇被成、万端御懇成御指引ニ被成候而能御心得候而、重而御狀可被進候、將亦拙老建立之儀も來年中ニ是非共と存候、度々如申上候、一切經御求候而御寄進可被成候、是非々奉頼候、恐惶謹言、

「朱カキ」慶長十七年

十一月五日

眞福寺(々々)

照清(花押)

鳴津陸奥守様

參人々御中

「御文庫二番箱藝弘公五卷中」
「義弘公御譜中ニ在リ」

猶以遠路切々ノ御懇書忝令存候、此方相應之御用可
被仰下候、不可有疎意候、江戸爰元相替儀無御座候、
何も奉期後音之節候、伊平佐迄申入候、已上、

去九月廿日之尊書今日致到來、拜見仕候、

一 肩衝ニツ被成御上せ被下候、毎々御懇情之至不申足候、
一 宗箇罷下色々御懇共、於我等忝存候、然者宗ヶ罷上候
時之焼物共、散々悪敷御座候、委細御報ニ申入候、參
着候哉、宗箇好申候焼物散々物ニ而御座候、無是非候、
一 唯今參着申候肩衝乍ニツなり能御座候、乍去藥能も無
御座候、藥ハくろめなる藥之多御座候か能御座候、所
々白キ藥之入候も能御座候、なりハ被成御作せ候が能
御座候、今御上せ候茶入方も少せいを高ク御作せ候が
能御座候、此分ニ大サモ能御座候、尻ノすばり候ハぬ
様ニ可被仰付候、口肩ハ能御座候、二ツ内藥ノ黒ヲ留
申候、今老ツ爲被成御覽返進申候、恐惶謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕

十一月廿二日

古田織部

重然(花押)

惟新様

尊報

泰平寺藥師堂之事、前代以奉加之志雖有再興、今度者國
中繁多之時節故、施府庫之財令再造之畢、後年者不可有
其例者也、仍狀如件、

慶長十七稔

仲冬後八日

少將家久(花押)

醫王山

正智院

『高原佐野宮棟札』

奉建立霧島六所大權現下宮宝殿一字云々

大檀那藤原朝臣忠恒公云々

慶長十七季壬子十一月廿八日

當山開地天台末流

法印權大僧都有淳敬

御名代

大膳亮忠俊

遷宮導師

法印有賢

大工 柏木与三左衛門尉有吉

鍛冶 逆瀬川甚兵衛尉安次

977 家久公長男

兵庫頭

慶長十七年壬子十二月九日誕生、母家臣鎌田播磨政重

女、

同十九年甲寅正月二十八日夭亡、三歳、

978 「古御文書中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

幸便候条令啓上候、仍本田新介方上着候ハ、去十五日江戸・駿府へ下被申候、被仰越候通、具本佐渡守父子へ申越候、於様子ハ御心安可被思召候、兼又兩度御上セ被成候蜜柑、我等者相添差下申候、定而五三日中可罷上候、江戸・駿府方返狀可有御座候間、重而進上可申候、少も由断不存候、御心安可被思召候、又今度本新介方へ御上セ被成候草花、船中にていたミ申躰と見へ申候間、當地にてやすめ、年明候ハ、則差下可申候、これ又御心安可被思召候、尚後音之節可得御意候、爰元之様子鎌田加賀方可被申上候、萬々奉期後音之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十七年」

極月廿二日

山口駿河守

直友(花押)

奥(州様)

参入之御中

979 『在官庫』

以上

鳴津菊袈裟殿爲御替、北郷讀岐守殿御越候間、其趣披露仕候處、遠路御造作御苦勞之由被思召、御前之御仕合殘所無御座候而、則菊袈裟殿へ御暇被遣、只今歸路被成候、爰元之様躰委曲宿老中可被申上候、將又貴公御事御なつかしき由、將軍様節々被仰出候、兼又此地御屋敷御普請以下如何ニも丈夫ニ被仰付候儀、御造作御苦勞共候哉御詫被成、彼是以御懇成御事書中ニ難申盡候、何そ面拜ニ積口事可奉得貴意候条、不能一二候、恐惶謹言、

「慶長十七年」

十二月廿六日

本多佐渡守

正信判

羽柴陸奥守様

貴報

980 「家久公御譜中」

「正文在文庫」

蜜柑二桶到來、喜入候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

〔朱カキ〕
〔慶長十七年〕極月廿八日
〔秀忠也〕
〔花押〕

薩摩少將殿

981 「家久公御譜中」

處治世不忘武、處亂世亦不忘文聖主名將之能事、今也雖治世、家久點檢軍馬如左、是亦講武之一事也、

982 『在文庫』『家久公御譜中ニ在リ』

軍衆一紙目錄

- 一 三百人 乘馬衆
- 一 三千五十人 陸立衆
- 一 八千二百五十人 道具衆
- 一 一千五百人 手明さし物持
- 一 一五千人 夫丸
- 一 合卷万八千百人
- 一 此外船頭加子五千人
- 一 のほり三百八十本
- 一 鉄炮八千五十挺
- 一 弓二千五十張
- 一 鍔二千五百本

合道具數一万二千九百三十

983 「正文在文庫」

御分國中諸侍高人數付并兵具數之事

- 一 高三拾二万五千五百四拾七石五斗卷升七合五夕
- 一 人數卷万二千二百二拾人外卷所衆又被官未相究
- 一 鎧八百九拾二領此外不被付出諸所有之
- 一 甲百二拾五劔
- 一 弓八千七百七拾張
- 一 箆三千五百拾三
- 一 鉄炮七千二百九拾六挺
- 一 玉藥三万九千六百三拾卷放
- 一 塩焔二千六百三十七斤三拾匁
- 一 玉地かね廿九貫四百八拾匁
- 一 鍔四千八百四本
- 一 長太刀二百六拾卷振

已上

慶長十七年十二月晦日

〔此正文、御文庫拾七番箱十八卷中ニ在リ、季通糺合ス〕

〔此二通家久公御譜中ニ在リ〕